

丹波徳

船井部
下巻

卷七

京都府立総合資料館所蔵



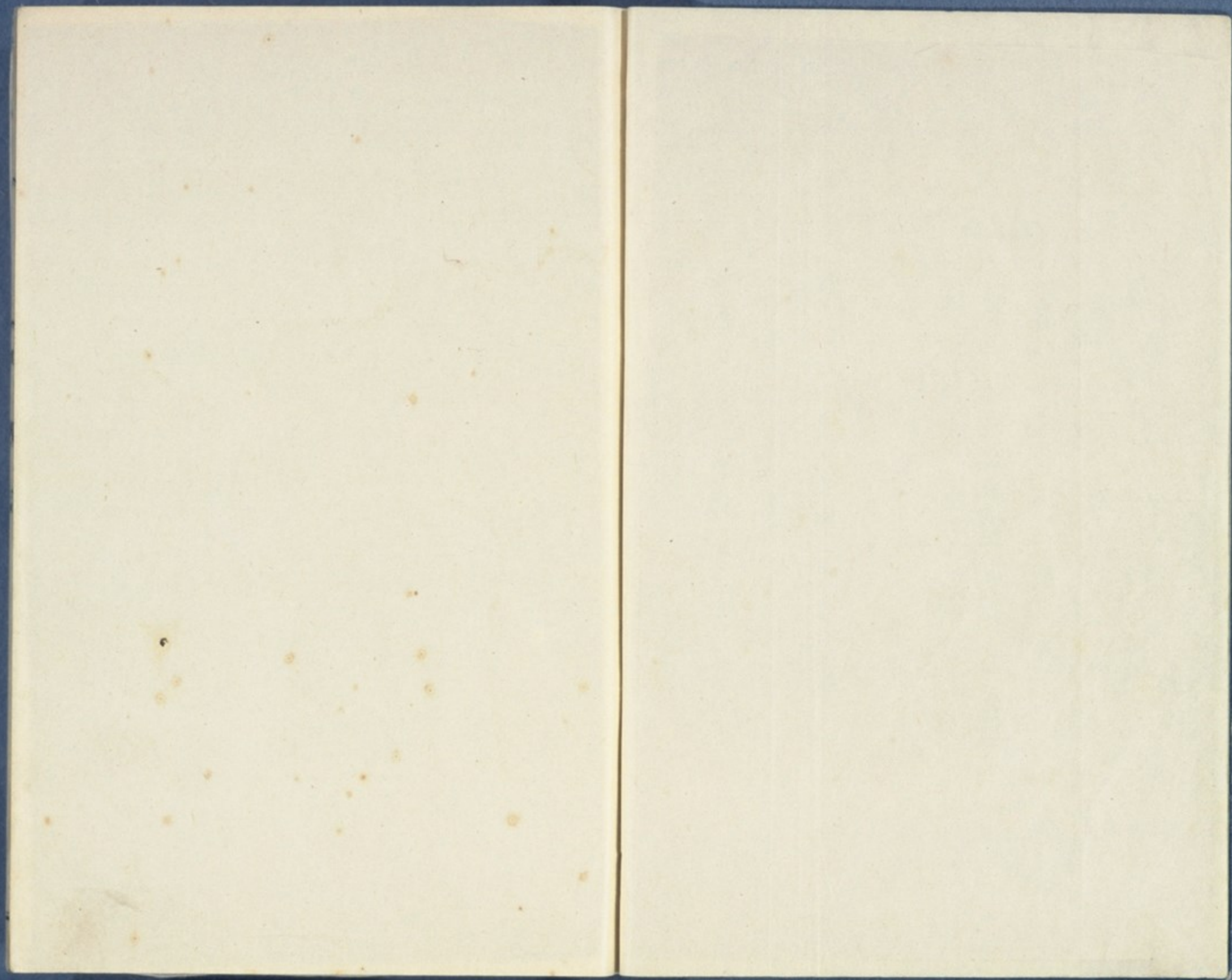
持
992
31
7

○北村先生編 丹波誌 一部拾五卷
先生に請ひて二部を淨寫し
京都帝國大學圖書館と京都
府立圖書館に各一部を寄託
す

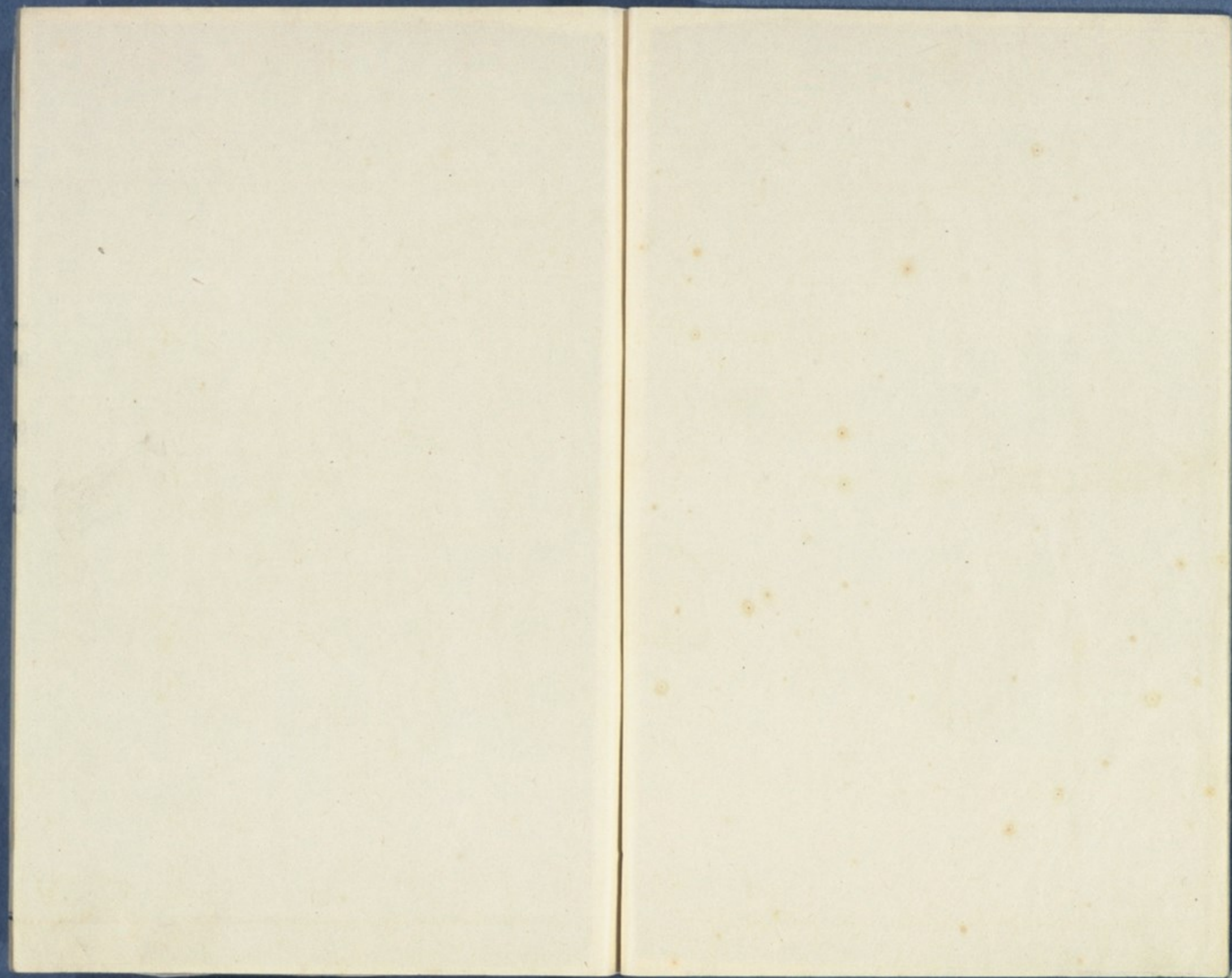
大正拾四年七月一日

北村龍象先生喜壽會

(北村先生喜壽會結末報告書を添附す)



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵

新野村
竹野村

丹波志

竹野村 大字 水戸 新水戸 高岡 口八田
 村位ハ本郡東西ノ中間ニアリテ西岸ニ偏シ北方
 須知町ニ隣リ西岸兵庫縣ノ地域ト相々嚙シ北方
 一帯檜山村ニ接シ南々観音峠ヲ越エテ園部町ニ
 交リ村地多クハ山丘ニシテ山陰道ノ貫通スル西
 側ニ耕地アリ
 文久年度ノ水帳ニ水戸村三百七十五石六斗新水
 戸村二百五十三石五斗五升 龜山領ト記ス
 明治二十七年調査 三百戸 一千五百四十人
 園部ヨリ来テ観音峠ノ嶮ヲ越エレバ竹野村トナ
 ル夏ノ日盛りノ村ハ鳴ク蟬ト鳴ク蛙ノ聲ノ外ハ
 森閑トシテ誠ニ太平ノ民ガ午寐ノ夢ヲ結ニテ居

ソウデアル茶店々々ニ暑サヲ避ケツ、アル旅人ハ
 帽氣ヲ話ヲ吐キ寛カク汲ミタル水ヲ咽ニ吸ヒ
 込ニ水ト話トヲ交換サセテ居ル尚且ツ暑ツイデ
 スナリヨ各個交換シテ斗ル田ノ面ヲ吹ク風ガ青
 イ穂波ヲ挾キ畔間ニ揚グルヲ看テ汗アク頬ニ笑
 ヲ作り盆踊リノ品評會ヲスル曰ハク今年デモ
 年ヤルノカ知ラシ南來田郡アタリテハ廢止シタ
 ノニ 氣車カ通ル様ニナルノカ此處等ハ何ナル
 ノカ 新ニ加ハリタル農父太キ烟管ヲ銜正十カ
 テ成算ナサソウナ相繼ヲ打ツ 其所是所行キ交
 フ村ノ人ガ目ニ附ク 看物ハ皆白泥ニ汚レ女モ
 壁土様ノモノヲ顔ニ塗ワテ平ル野仕事スルニ些

ト異様ナモノト之レヲ追ヒツ、茶店ヲ出テ行ケ
 バ是レナシ當地名産ノ藺草ヲ泥ニ染メル際其ノ
 脆走ガ新ク汚スノヤアルト知レタ 此ノ邊リ米
 麥ノ外ハ藺草ヲ多く作ル 之ヲ晒シテ路ノ傍ニ
 アル長方形ノ井戸ノ様ナ中ハ白キ泥ヲ溶カシ其
 ノ底ハ沉メテ色附ケラヌル 其日直ニ干シ揚ゲ
 ガレバ色が昏ハツタリ弱クナツタリヌル故天氣
 ヲ見定メテ一度スル 一束ヅ、籠ト浸レテハ車
 ニ積ミ女ヤ小供カ手傳ヲテ日當リノ所ハ運ビ出
 ス中々忙シ 藺草ノ染マル毎ニ體モ染マル 顔
 ガ白斑ニナル筈デアル 其ノ染マル文否泥ニ汚
 レル文ヲノ日ノ利益デアル 可愛想ナルハ他村

カラ新ニ嫁ギタル花嫁ノ親デアル 一方デハ麻
 ヲ作り之ヲ解キ晒シテ藺草ヲ編ム 檝屋見々様
 ナ簡單ナル器械ヲ庭ニ居エ 姉サシガフリシ夕
 老少女運ガキト足トラ働カスト疊表ガ千ヤシト
 出来アガル藺以テ經トシ麻以テ緯トストデモ書
 カバ縹文ノヲカ實以テサウデアル 一村一心ニ家
 ノ富村ノ富ヲ増進シテ居ルラシウ見受ケル 是
 トハ祠ノ庄村ガ本場デ木崎表ノ名カアル 祠ノ左村ノ
部考者
 細川忠興ノ妻明智氏ハ光秀ノ女ナリ忠興ハ織田
 氏ニ奉ハ軍功少カラズ丹後國ニ於テ封地ヲ賜ハ
 ル天正十年五月命アリ采地ニテ軍糧ヲ調シ羽柴
 秀吉ヲ助ケテ中國ヲ取レト具ノ六月光秀ノ軍京

都ニ入り襲フテ信長ヲ殺シ摂津ヲ忠興ノ父藤孝
 ニ興ハ之ヲ誘フ父子怒リ答ハ不忠興髮押シ切リ
 ニ心無キヲ心ニ誓ヒ且ヲノ臣下ニ示ス夫人ニ告
 ケテ曰ハク汝カ父大逆ヲ行ハリ我等父子ハ右大
 臣殿 信長ヲ
指スノ恩ヲ受ケル丁産大ナレバ爲ニ讎ヲ報
 ゼザルベカラズ逆賊ノ子ハ室ヲ同フシテ居ル可
 ラズト夫人ヲ三戸野 (水戸) 山中ニ幽シ家人一臣某
 ヲシテ之ヲ守ラシメ而シテ身京師ニ入り秀吉
 ニ會シ其ノ心事ヲ叙ブ秀吉之ヲシテ光秀ヲ攻メ
 自ラ殺サシム光秀亡ビ羽柴氏ノ先鋒トナリ明智
 ノ屬城龜山ヲ攻ム城陷ル秀吉其ノ二心無キヲ見
 之レ久ブシテ夫人ヲ迎ハ夫婦ノ交情元ノ如クナ

丹波志

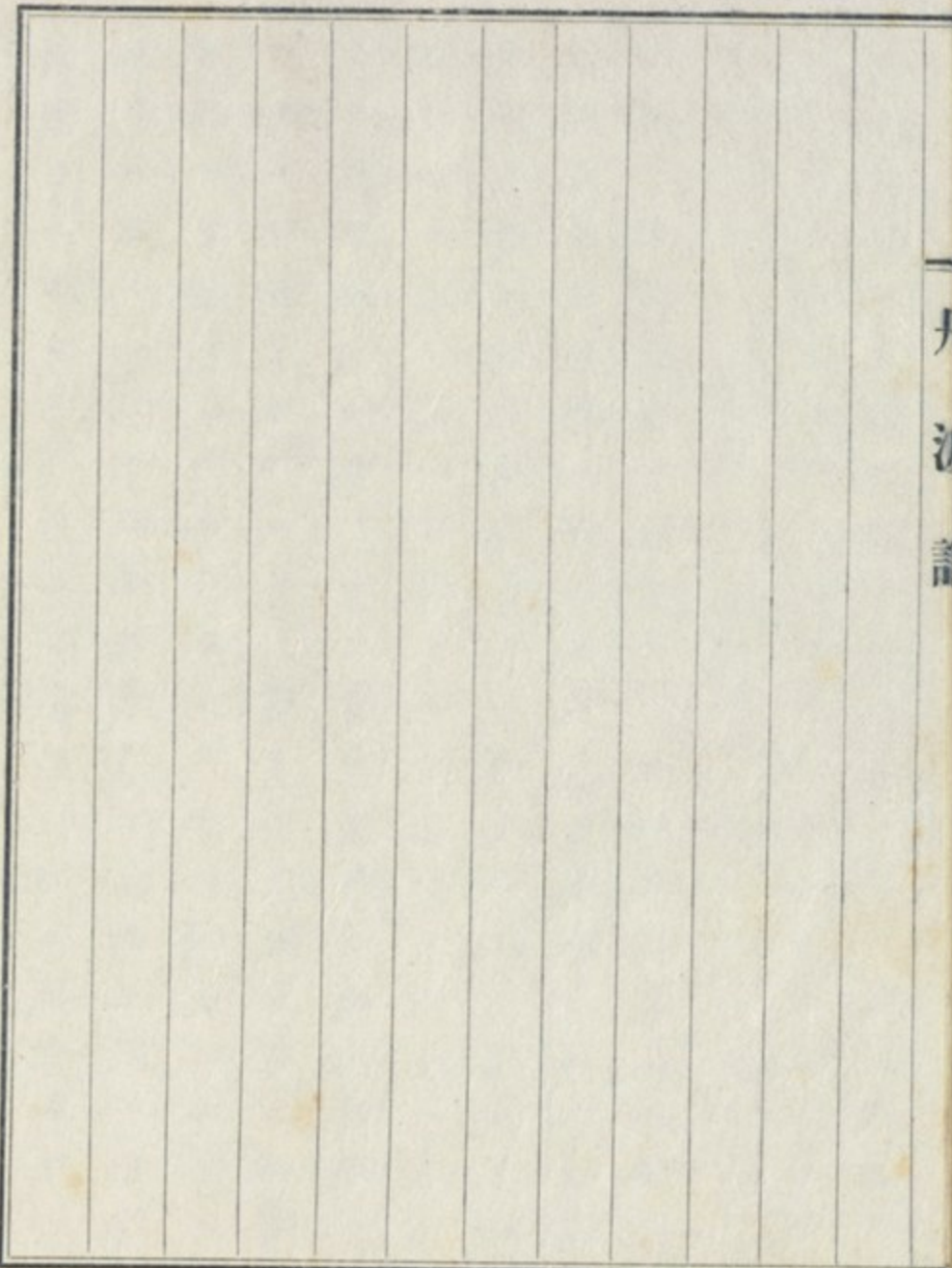
ラシム夫人ノ三戸野ニアルヤ光秀ノ死ヲ傳ハル
 モノアリ従者ソノ自害ヲ勸メ曰ハク君ハ婦人ナ
 リト雖モ逆臣ノ子坐モテ殺殺セラレヨリハ自
 殺スルニ如カジ夫人曰ハク良人ノ命令イマカ到
 ラズシテ自害セハ妻タル道ニ及クベシ孝道ハ立
 クシカモ貞節ニ背カント謹慎太ク務ム明年疫癘
 流行ス夫人一首ノ歌ヲ書キ之ヲ柵門ニ帖セシム
 其ノ詞ニ云フ以クテクハ信濃川乃ちなりれ汲む人
 子たよらん疫癘の神者ル者聞ク者相習ラ門戸ニ
 帖ス而シテ惡病ノ流行コノ村ニ熄ム人々大ニ夫
 人ノ陰徳ヲ慕ヘリ夫人ノ此ノ難苦中ニ在ル實ニ
 十二年ト云フ 慶長五年徳川家康東征シ忠興従

行ス夫人大及ニアリ石田三成諸大名ノ妻孥ヲ收
 メ質トセシトシ先ツ明智氏ヲ邀ハ取ラントス夫
 人聞カズ婦前田氏ヲシテ微服先ツ逃レシメ幽
 齋ノ妹ノ嘗テ武田氏ニ嫁シ姦トナレルモノ年七
 十餘ニシテ在リ是レヲモ亦逃レシメテ敵兵来リ
 圍ム夫人曰ハク吾ハ女ナレドモ唇ヲ受クルヲ屑
 シトセズト家人ニ令シテ曰ハク我ハ秀頼公ニ反
 カズ仇入ルトモ戦フ可ラズト命ジテ門ヲ閉分セ
 首ヲ取り十歳ノ男子九歳ノ女子ヲ手刃シ火ヲ放
 テ自殺ス^多光秀意沮ニ復タ質ヲ取ラズ夫人辞世
 さきたつハおなし^多路^多のい乃ち^多も^多き^多り^多を^多惜^多し^多き
 契^多り^多と^多も^多し^多れ

三戸野峠ハ三莊太夫が閨ヲ居ヘタル所ト傳フ
 口八田ハ西本梅村ノ八田ニ對シ口ノ字ヲ附シ夕
 ルモノト云フ西本村ノ八田ヲ南八田ト云フヨリ
 此ノ口八田ヲ北八田トモ云フテ其ノ混全紛雜ヲ
 避ケタリ 西方ニ聳ユル三國ヶ嶽ト三方ヲ圍メ
 ル丘山ノ爲ニ平地ニ乏シク田穀ノ村氓ヲ養フニ
 足ラザルハ人民ノ嘆息スル所ナリ
 耕地整理 明治中手ヨリ農商務省ニ於テ耕地ヲ
 整理シテ産穀ヲ裕ニスベシトノ論發表セラルハ
 ヤ當地ノ有志者ノ奮起トナリ舊辻村中畑兩區ニ
 亘ル面積十六町六段餘ノ凹凸斜直ナル所ヲ整理
 セントノ議起コリ三十九年ヨリ四十年ニ亘リテ

議熟シ十二月ヨリ起工シ嚴寒ト戦ヒ風雪ヲ犯シ
 數月ニシテ工竣ル府吏技手等ノ監督土民ノ勉務
 相待ワテ迅速ニ成工シタルハ他ノ模範トナレリ
 一町ニ段歩ノ増加スルヲ得テ土民大ニ賀ス經費
 三千二百餘圓ヲ要セシモ其ノ増歩ト爾後收得ノ
 利ヲ以テ之ヲ償フヤ容易ナリ區劃ノ改良水害ノ
 漸減農業ノ便利等舉グルニ堪エズ此ノ舉此ノ利
 ヲ聞見シテ相學バントスル者屬々起コル元來當
 部悉ハ共同苗代ヲ設置シテ他村ノ模範タリシ所
 ナリ

京都府立総合資料館所蔵



東本梅村 大字 大内 杉熊 中野 赤熊

南大谷 若森

中野ハ獨立小村ニシテ龜山藩領タリ近傍南栗田
郡ニ同名アルヲ以テ之ヲ下中野ト呼ブ郡界ノ標
識ノ東端ニ立ツ

從是西北船井郡

篠山街道東西ニ貫通ス 須知國郡等ニ赴ク道ア

リ 郡界ヨリ天引ノ西ナル多紀郡界マデ行程ニ里半
アリ 郡界ハ南栗田郡ノ宮川ヲ隔斷ストハ云ハ

其ノ實兩郡ノ人家軒ヲ接ス標識無クシバ行旅安
シク之ヲ認メ得シ江濃ノ寐物語モ想ヒ出デラレ
マ郡界ノ西少許ニシテ赤熊ニ至リ差ノ平野ア
ルニ逢フ田脛開ケ穀菜生フ人口ヲ養フテ餘蓄ア
リ東面シテ山城ノ峻宕嶽ヲ望ム陰窟ヲ出デ、潤
土ヲ得又孱瘦ノ笑ヲテ迎フルニ遇フ聊旅情ヲ慰
ムベシ一帶ノ人家往々直ヲ狹ミ半高半農ノ者カ
少需要ヲ充タスアリ小銀行ヲハアリ
大谷ハ古ヨリ地善ク圃ケ農牧ノ業ニ富ム餘米ア
リテ龜岡ハ發賣ス旅人宿三戸アリ園部領ナリキ
朱實佳良

蘇田神社ハ月讀命ヲ祭ル和銅年間信濃國ヨリ遷

東本梅村

産ノ際一莖ノ木賦ヲ傳ヘタリトテ土人尊崇ス自
後十餘年閭里ヲ利潤シタレバナリ當地ニ里四方
ノ諸社ハ大抵此ノ祠ノ末社ニ係ルト云ハ其ノ
昔ノ全盛ナリシヲ推スベシ祠藏ノ大般若經六百
卷ソノ半ハ武藏坊辨慶ノ手書ニ係カルモノト云
フ今ソノ三卷ヲ藏ス
埴生ハ田園拓ケ人口ヲ畜フテ餘剩アリ赤熊ヨリ
此ノ邊ニ至ルマデ土産ヲ賣リ他産ヲ買フハ一ニ
亀岡ニ於ラス里程四里篠山ハ六里アリ而モ山
路ヲ狹ム旅店三戸雜商四五戸小學校アリ
大内 産物 鬘利磁 礦脉 牽桑田 郡宮前村ニ達
ス 朱實佳良 栗

八田即十南八田ヨリ南行スレバ山路遠途トシテ
 大河内ニ至ル人家六十戸田頗有リ寒氣酷烈ニシ
 テ降雪春季ニ殊ル
 旅客ノ經過スルモノ此ノ街道西側ニ棕樹ノ大ニ
 シテ且老タルアルヲ見テ訝ル又俯シテ田野ニ木
 賊ノ茂リテ連ナリ生ノルニ驚ク此ノ二品ハ磨礮
 ノ用ニ供スルモノ此ノ土質何ニヨリテ斯カル植
 物ニ適スル地質學者ニ質サント欲ス 大ハアリ
 新故アリ其ノ大ナルモノハ數圍ニシテ枝葉十數
 間ヲ蔭ス今明治二十九年一樹ノ葉ヲ金百圓ニ賣
 レル家アリ此ノ樹ノ蔭スル所四畝歩ニ及ヒ一村
 ノ收得金本年ノ豫算二千圓之ヲ取り之ヲ乾ス手

間債ハ其ノ二割ヲ要ス棕ト木賊ハ七年下カリノ
 三年上ガリト云フ 諺アリ其ノ價值ノ平均スルヲ
 得々年々不同アルヲ説ケルナリ 木賊ハ本年ノ
 收入豫算一畝歩三百圓寒肥及ヒ刈取日干等ノ工
 錢ヲ引ケバ大凡ソノ半額トナル 此ノ邊田一畝
 ヲ米作スレバ三石ヲ得ソノ價金ニ十七八圓ナル
 ヲ以テ是ヨリハ木賊トテ各自ソノ耕作ニ趨ル傾
 アリ然レハ穀田ノ比較上多キニ居ルハ米麥ノ價
 ガ劇甚ノ變動ナキヨリ持産家が之ヲ主糧スルニ
 因ル而シテ棕樹ノ下田ニ又ハ不毛ノ地ニ木賊ノ
 栽培セラルト巨多ナルハ亦是ニ由リテナリ是ソ
 ノ生育力樹下ニ適シ廢地ニモ適スルヲ以テナリ

此ノ一村ヲ舉ゲラ之ニ適ストハ云ヒ難シ所ニヨ
 リテハ之ヲ植ウルモ漸減シ漸枯ル、アリ一時生
 茂スト雖コレニ安シ不可ラズ逐時異状ヲ呈シ遂
 ニ萎茶スルアリ 木賊刈ノ季節ハ極暑ノ時ニア
 リテ勞苦頗甚シ且ヤ舊莖ト新芽ト同長ナルノ故
 ヲ以テ之ヲ判別スルニ色ヲ以テシ一莖ヲ斬リテ
 又一莖ニ及ビ之ヲ刈ルハ五分録ヲ以テス録及小
 細ナラガレバ他莖ヲ損傷スルノ虞アリ熟手ナラザ
 レバ大利ヲ損ス 寒時分株スルアリ或ハ舊根古
 株ヲ其ノ儘ニ存シ次年新生ノモノヲ保護培養シ
 夏時之ヲ刈ルモアリ 棕樹ハ一二部落ノ產地ヲ
 劃ギレド木賊ハ數部落ヨリ他村ニマデ及ブ一里

有半ノ長距離ヲ有シテ其ノ產地アリ 木賊ハ莖
 皮ニ硫酸ヲ蓄積シ隨テ粗糙ナルカ故ニ木材骨
 節或ハ金屬ヲモ磨勵スベシ之ヲ暴乾シテ藥品ニ
 エタルヲアリ又之ヲ植エテ堤防ヲ堅牢ニセシト
 試ミタルヲモアリキ大古具ノ巨大ノモノアリタ
 ルヲハ化石ニテ知り得ベキモ此ノ地ニハ奇説ヲ
 聞カズ 明治三十年ヨリシテ歐洲ヨリ輸入スル
 謂ハ所ルペーパー(紙)ナルモノヲ試用シ磨礫ノ效
 大ニ棕葉木賊ニ勝ルヲ以テ右ニ品ノ需要衰へ木
 賊畑ハ衰シテ桑田トナリ養蠶ノ利ニ移ラントス
 然ラズシバ木賊ヲ如何ニセシ挿花家需要スト雖
 實ニ塵々ナリ

八田ハ叔井教業カ波多野ノ為ニ東軍ヲ防ギタル所ニテ城址アリ東軍ノ来リ撃ツニ會シ秀治ハ八上城ヲ根據トシテ楯籠モル秀治ノ軍勢旺盛ナルヲ以テ光秀ソノ母ヲ送り質トナシ以テ和ヲ成リントス秀治乃チ許シ第秀尚及ビ平林澁谷等八十餘臣ト共ニ来リテ本梅村ノ砦ニ會ス光秀言ヲ竭クシテ百方降ヲ勸ム秀治曰ハク和スベシ降ス可ラスト伏起^兵コリ皆斬殺セラル秀治死スル時大ニ悲言ヲ吐キ曰ハク年ヲ出デズシテ汝等ニ地下ニ相見ント年五十一

大慈山普濟寺 舊福大平山 一小丘上ニアリ開山年紀等明了ヲ歛ク

中興 佛性院殿傳心全正大禪尼諱ハ千代姫 尼利尊氏ノ父讚岐守貞氏ノ女カ父ノ菩提ノ爲ニ夢想國師ヲ聘シ中興開山トシ自分コノ寺ニ住シ生ヲ送リレナリ尊氏ハ其兄弟姉妹タルノ縁ヲ以テ之ニ資給喜捨シタリ 禪尼ノ像アリ古色ヲ帶ブ頗見ルベシ 又菅沼織部正定房ノ位牌ヲ安ンズ正房一町四方ノ地所ヲ寄附セリ其ノ地ハ目今コノ寺ノアル所ナリ 位牌ニ署スル所尤ノ如シ

捐館 大庭院殿前漆織正無業圓徹大居士 神儀

本堂 建具二十八枚 聖域ノ筆 十六羅漢 鶴山 水 唐風ノ画 天橋ノ圖等ナリ 天橋ノ圖ハ墨画ニシテ磊落ナル揮灑得昂カラザルモノトス

二株ノ長杉庭上ニ直立セリ開山ノ手植ト云フ枝
 桑ノ下盤ル所ハ猿猴杉ニ髣髴シル所アリ遠キヨ
 リ望ンデ此ノ寺ナルヲ知ル 予ハ(増補)此ノ寺ニ
 投宿シタルカ此ノ杉ノ餘蘖ヲ乞ヒ持歸リ之ヲ今
 ノ假寓ナル龜岡南乗俱樂部ノ前庭ニ栽エタリ
 足利尊氏ノ祈念佛ナル地藏尊ハ本寺ノ後方ニア
 リ一條ノ村路ヲ隔テ、一字ノ古堂アリ四百有餘
 星霜ヲ閱ヘタリト云フ丈アリテ古色斑々タリ南
 來田郡畑野村ナル土ヶ畑ノ裏田ニアリシモノ、
 飛來セルナリナド口碑ニ云フ左ノ記事ヲ見ヨ
 地藏堂
 三間四方ノ堂宇ナルカ釘ヲ用ヒズレテ之ヲ作ル

地藏觀音兩像ヲ安シセリ傳ヘ云フ此ノ觀音ハ千
 手ニシテ行基ノ作モトハ甲田村ノ北ノ坊ニアリ
 甲田ハ此所ヨリ一里許北方ニアル村ニテ船井郡
 吉富村神田西光寺ヲ云フ其ノ觀音美童ノ姿ニ化
 シ殿谷村ニ至ル農夫枚染ノ惟子ヲ着テ田ヲ耘リ
 耳シルヲ招キ告ゲテ曰ハク我ヲ負フテ普濟寺ニ
 詣レト其ノ言ノ誇奢ナルヲ訝リ恐レテ之ヲ負ヒ
 三田ニ至ル三田ハ寺ヲ距ル三町許ナリ童子曰ハ
 ク我ヲ卸セ且我が行方ヲ見ル可ラズト農夫ソノ
 言ノ如クス只遙ニ橋ヲ渡リ行クヲ視ルニ農夫
 ソノ家ニ歸リ之ヲ家人ニ語り日ナラズシテ死ス
 蓋シソノ姿ヲ見タルノ罰カ既ニシテ普濟寺ノ地

藏觀音兩立スルヲ見ル而レテ北ノ坊ノ堂ニハ只
 ソノ臺坐アルノミニテ佛躰ハ無シ兩寺ノ僧輩大
 ニ驚嘆シ以テ遷座シタルナリトス農夫ノ位牌ヲ
 觀音ノ後ニ置ク今ニ於テ殿谷ノ人杵色ノ惟子ヲ
 忌ム
 西藏坊野々口豪洲ノ寫影此ノ寺ノ藏幅巾ニアリ
 豪洲ノ事ハ宮前村ノ部ニモ出ダス其ノ像タル頭
 ニ侍烏帽子ヲ戴キ直衣メキタル衣裳ヲ着タリ其
 ノ模様ハ扇面ト櫻花トニテ色采リ腰ニ一小刀ヲ
 佩キ足趾ヲ前ニ合セラ坐ス衣上ノ袈裟左手ノ念
 珠右手ノ中啓等異様ノ風裝ナルガ上ニ面貌癡猛
 ニシテ重席ニ安踞スル所ハ修驗僧ト野武士ノ渠

料トコソ見ユレ一号西門居士ト呼寺東田郡宮前村
神尾山ノ部参考
 其ノ苗裔加舎ヲ氏トシテ此ノ地ニ土着ス其ノ寄
 附ニモヤ表装モ鮮明ニシテ保存セラレタリ
 大内文久年間改高三百零一石ニ斗四升園部藩領
 若森三百六石五斗五升九合龜山領赤熊高四百三
 十六石五斗四升三合同領中野百八十石四斗四升
 九合同領松熊百二十一石ニ斗四升三合同領
 中野年貢四ツ二分五厘赤熊諸役ヲ合算シテ六ツ
 若森大内中野モ諸役ヲ合算スレバ赤熊ヨリ高シ
 赤熊ノ收穫下田一石一斗中田一石ニ斗上田一石
 三斗平年見積明治二十年
前後ノ7一斛ヨリ一石五斗ヲ小作ヨ
 リ田主ニ納ル田主其ノ一石ヲ年貢トシテ上納ス

レハ其ノ餘米ヲ村費ニ提供シ田主ノ手ニ握ルバ
キモノ無シ小作人ハ一般ヨリ米麥各一石ノ入手
アルヲ以テ利アリ故ヲ以テ田主ハ小作人ヨリ田
地ヲ返戻セシメテ手作セザル可ラズ戸數割カ田
主ヨリ出ヅル故ニ右ノ如キ不利ノ所持由アリ
トテ

豆田ト云フ名アリ是ハ豆役トテ豆ヲ以テ年貢ト
シタルナリ往時其處ノ田地ニ生ズル白豆ヲ以テ
年貢トセシカ代官ノ小言年々ニ六ツケ敷クナリ
豆田ノ豆ニテハ納マラズ一粒撰ニシテサハ檢査
落第トナルヲ以テ已ムヲ得ズ白大豆名産地ナル
多紀郡ニ求メテ之ヲ納メタリ是レスラ一戸四五

合免ニテ撰リ上ゲ極上等品ニシテ上納ス是等ノ
豆ハ藩士ノ家ニ入り味噌ノ原料トナルモノ多シ
中古豆田ハ名ノミトナリテ豆ハ作ラズ乾草上
納アリ是レハ藩廩ノ飼馬料トナリ家中飼馬料ト
ナル孰レモ臨時賦課ニテ時ノ相場ニ見積モリ村
稅米銀ニテ差引クモノトス上納シタルモノ内
即銀ヲ請フモノアレバ庄屋コレヲ辨へ置キ納稅
ノ折ニ名主年寄立會勘定シテ收支決算ス夫役
ハ年々コレ有り此ノ地方ハ河川ノ大ナルモノ無
キ故水害トテハ之無シ從テ堤防ニ從事スルノ
勞役少ナリ大堰川筋ノ水患アルニ際シ龜山藩廳
ヨリ出役ヲ命ズルヲアリ其ノ命令書ニ示ス丈ノ

人夫ヲ出カシ村役人附キ添ヒ監督シ代官又ハ水道目付ノ命令ニ服シ損害地ノ助役工事ニ服ス藩廳ヨリハ一日工役賃一人前ニ云米六合六勺ノ充行ナリ是レ文ケニテハ應募者無ク出願スルモ藩廳ニテハ先規ノ通りト云フテ取リ合ハマ故ソノ倍額ヲ村費ニテ補助給與シ勧誘應募セシメタリ山林所有者ヒシテ畢生ソノ地ヲ踏マザルアリ其ノ有無ヲサヘ知ラザルモノアリ只其ノ字ヲ簿上スルノミノ者アリ故ニ山樹林木常ニ薪藪トシテ他村ノ如ク斧斤相踵ケノ弊ニ陥ラズ恰北粟田郡ニ入ルノ思アラシム全ク搬出ノ途ナキ故トゾ或ル一人が事アリテ所有山ヲ檢セントテ到レバ

東本梅村

是レハ如何ニ祖先以來斧斤ヲ入レザル所ニ一樹無ク疎々タル樸檉ノミ之ヲ採聞スルニ隣山ノ所有者カ之ヲ伐採シ盡クセルナリ便往キテ之ヲ尋ヌルニ彼レ其ノ境界ヲ知ラザルノ故ニ之ヲ犯セリニテアリケレバ其ノ藤忽ヲ詫ヒ具ノ伐木ヲ返還セント云フ山主却テ之ヲ苦ム其ノ出運ノ賃價ニガニ供スルニ足ラザレバナリ木ニハ價ナク人ヲ役スルニハ價給アリ一ハ人ヲ役スルニ因テ木ヲ戻サレテ益ナク一ハ自勞スルヲ以テ農暇ノ業トシテ利アルナリ是ニヨリ伐採者ハ酒一升ヲ買ヒ之ヲ贈リテ事ヲ了セリ

樂音寺 本尊 藥師如來一寸八分關浮檀金ナリ

シ 山ニ産スル櫛ハ他ニ異ナリ櫛モ葉モハツ元
 アリシ
 大内鶴頂ノ峰ナル山陵ヲ弔レ傍ナル寺ニ入り信
 ニ逢ヒ具ノ事歴ヲ問フ僧云フ拙僧ノ寺ハ醫王山
 樂音寺ト申シマスル御覽ノ通りノ一ハ廢寺デム
 リマスガ山陵ガアリマスノデ古来有名ナノデム
 リマス 由緒トナルベキ書類ヤ寶物ハ頗トムリ
 マセヌ 御尊牌ガアレデムリマス左様ニ基ムリ
 マス一ハ光仁天皇ノデ一ハ後白河法皇ノデムリ
 マス 左様光仁様ハ御開基ナノデ殊ニ大切ニ御
 法養ヲ申レ上げテ居リマスソレデスカ山陵ニ個
 ハ白河後白河ノニ帝様ナノデス アノ通り小石

ヲ土臺ニシテ六角形ニナツテ居リマス是モ何カ
 御謂レノアルヲデムリマシヨ
 拙僧モ前年
 取調バマシタカ白河様ノハ京都ノ蓮華玉院ノ東
 ニ方リマシテ昔ノ法住寺跡ニムリマスソレデ後
 白河様ノハ蓮華玉院ノ東ナル昔ノ法華堂跡ニム
 リマスソレデスシテ見マスト此ノ二陵ハ御追慕
 ノ爲ニトテ皇子ガ造ラセラレタルモノデムリマ
 シヨ
 尤皇子ガ御住持ナサレマシタ寺デス
 由緒トシテノ申シ傳ヘニヨリマスト光仁様ガ御
 拙在ラセラレマシテ一日ト童ラセラレマス
 所ガ御典藥ノ御醫者ガ手ヲ盡サレ名醫ヲ外ヨリ
 御呼寄セナリマシテモ何トモ御療治ヲ致シカネ

マスノデ宮中一同タ、茫然タルハカリデムリマ
 シタノニ老翁か何處ヨリカ忽然ト顯ハレマシテ
 恭シク一服ノ御藥ヲ進メマスル故一同不思議ニ
 ホタレテ居ラレマシタガ其ノ御側ノ御方カ御毒
 味致シ之ヲ御勸メ申シ上ケマスルニ御方抱申シ
 上ケテ居ラレマス人々モ斯ハ只事ナラズ神靈ノ
 御加護ソレ宜シカラントノテ服用アラセラ
 レマスルト俄ニ御平癒ト云フニ皆々是ゾ御運ノ
 再開カセラル、吉瑞ナリトテ老翁ヲ厚クモテナ
 シ其ノ住所ヲ尋ネ申セシニ老翁曰ハク叟カ栖ム
 山ハコ、ヨリ乾ノ方五百餘町ト飄然トシテ去ル
 勅シテ人モテ其ノ跡ヲ追ハシムルニ此ノ地ニテ

アリマシタノデス御悩ノ全治ラセラレマシタノ
 デ遂ニ勅使ヲ以テ茲ニ一寺ヲ御建立ナツタノデ
 ムリマソ一デス 左様山跡ハ其ノ老翁ヲ薬師
 如来ノ化身ト御認メナツタノデ附ケサセラレタ
 ノデ寺跡ハ樂シキ音ヅレト申スソ一デス 其
 ノ後ニ白河詔皇モ亦御不豫ノ時當時ノ一思シ召
 シ出ワセ玉ニ教願アラセラレテ御平癒アリテ御
 再建アラセラレタト申スソ一デス ナンデモ光仁
 天皇ノ御時己ニ大寺ノ御建立アリマシタノヲ白
 河天皇様カ御修繕ト御新建トガアリマシテ山ノ
 上ニモ山ノ下ニモ薨ヲ並ベテ七十餘宇ノ坊舎カ
 立チマシタソ一デス光仁様モ永長ノ丙子テシタ

京都府立総合資料館所蔵

カ御落飾アラセラレテ一度御臨幸ガムリマシガ
 山ノ下マデトアリマス何故テムリマスノカ判リ
 マセヌ御上リアソソ一ナモノデスノニ大治四年
 聖算七十七セニテ崩レサセラレ御遺言ニテ此ノ峰
 ニ御送葬アリマシタノデソレカラ舊稲袋谷ヲ
 改メテ大内トナリマシタ
 勿論御所ニテノ御稱呼ノ通りオホテト訓ミマシ
 テ御所ト同様ノ名ヲ下サレマシタノテムリマス
 コノ書付ノ通りデス御覽下サレマセ後白河様モ
 御臨幸ナリ嘉應元年寶算四十三ノ御落飾ニテ白
 河様ノ通りニトテ此所ニ御駐蹕トアリマスルカ
 ラハ山上ノ御上リアラセラレタノテムリマシヨ

一六十六ニテ崩レサセラレ白河様ノ傍ニ御葬
 リニナリマシタノデス塔イ丁ニハ此ノ寺モ明
 智ニ燒キ立ラレマシタノデ皆無トナリ書類モ
 何モゴザリマセヌ併シ三天皇様ノ御由緒ハ慥ニ
 アワタノデスナシデモ八木ノ嶋ニ車塚ガアル
 ソ一デスカ御二方様ノ御車ヲ埋メタ所ナノデス
 ト申シマス以下略ス
 腰懸石ハ若森ノ藪方村路中ニ伏ス此ノ道路ハ園
 部ヨリ摂津野勢ナル妙見ハ參詣スル線中ニアル
 ラ以テ妙見街道トハ呼バルナリ石ノ廣六尺ニ三
 尺計リアリ普濟寺ノ開山ガ七尾七谷ノ勝地ヲ得
 テ道場ヲ建テシト東西ニ索メ南北ニ探リ遂ニコ

京都府立総合資料館所蔵

、ニ至リ錫ヲ駐メ石上ニ踞レ西望シ今ノ寺地ヲ
見當テラレシ所ト云フ北条田郡常照寺ノ前ナル
腰懸石ト同旨趣ニテ石亦似タリ輓近道路ノ開鑿
修治セラル、アルモ途上ニ盤陀トシテ在リ焉開
山ノ尊崇セラル、ア之ヲ以テトスベシ

辨慶丈量石



腰懸石

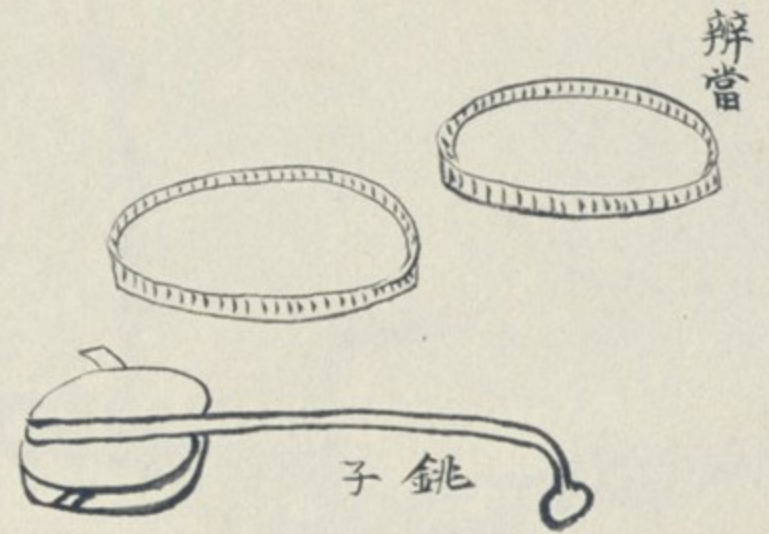


丹波志



此圖ハ... 前向 鉈子ハ茶房ニ供スル
 類光ノ遺品ハ大谷ノドンガメ茶屋ニアリ今
 店ナラズ姓ヲ奥村ト云ヒ片主ヲ孫市ト云フ
 鉈製ノ長柄鉈子長ク一尺四寸一固至ツテ重
 ハ木製ニテ竹ノ細バツ以テ綴
 是ノ者ハ...
 代ノ時トス
 所
 鬼退治ノ
 時ノ探問
 話
 明
 茶

一門測



京都府立総合資料館所蔵

此ノ圖ハ室町家式ニ出テクルモノ
ナリカ前圖ノ鉈子ノ卷秀ニ供ス



頼光ノ遺品ハ大谷ノドンガメ茶屋ニアリ今ハ茶
 店ナラズ姓ヲ奥村ト云ヒ右主ヲ孫市ト云フ(三十年)
 鉋製ノ長柄鉋子長ク一尺四寸一個至ツテ重シ
 辨當ト呼ブ物ハ木製ニテ竹ノ網代ヲ以テ縁トス
 扇ノ如キ物 是ハ箱入ノ儘ニテ家屋ノ棟ニアリ
 猥ニ之ヲ卸サズ 之ヲ揚ゲタルハ維新前ニテ先
 代ノ時トス此ノ一物ノミハ人ニ示サズ深ク秘ス
 ル所 何故斯カル物カ此ノ所ニアルカハ其ノ由
 ヲ詳ニセザルモ多記郡日置村ノ六本杓ト同様ニ
 頼光が大江山鬼退治ノ一話トナル著者カ明治元
 年ニ経過セシ時ノ探問ニハ其ノ昔話ヲ屢々ニテ
 古老ニ説語セラレ五月蠅キマデナリシカ今ヤ(三十五年)

大谷ノドンガメ茶屋ニテ
 北ノ國ハ室細巻左ニ出スルナリ



之ヲ聞カントスルニ説話スルモノナキニ至リ偶
 く爾之アルモ笑謔半分眞實ナラズトスルモノ
 、如シ又以テ時勢ノ變ヲトスバシ
 因、記ス遠江國引佐郡西濱名村大福寺ニハト
 部季武が大江山入りノ時ニ負ヘリト云フ古定
 アリ季武ノ家コ、ニアリ眼病ヲ此ノ寺ノ薬師
 ニ祈リ平癒シタルヲ以テ謝恩ノ爲ニトテ之ヲ
 奉納セリト云フ酒吞童子退治ノ談ハ唐ニ丹州
 ニ於ケル止ナラズト見ユ
 辨慶丈量石 俗言セくらべ石ハ大谷ノ道北ニ立
 ツ高五尺七寸幅三尺三寸武藏坊平家庭討ノ時コ
 、ニテ身ノ長短ヲ比較シタルニ同高ナリシト云

フ後人前ノ
 扁石上ニ立
 ナ之ト相對
 スルニ多少
 リノ差アリ
 君シ是ヨリ
 丈長キ人ア
 ルトモ及ブ
 丁能ハズ是
 ハ活石ニテ
 ヨリ長キ人
 来レバ忽地ニ



京都府立総合資料館所蔵

幾許カラ延長ストノ戯話モアリ樵斧磨岩ハ其ノ
 谷中ニアリテ斧破蹤アリ辨慶ガ持斧ヲ磋キタル
 モノト云フ
 太神ノ腰懸石 石神トモセリガ石トモ云フ宮碕
 ニアリ竪三尺許横六尺許厚五寸許 賽者小石ヲ
 苞ニシテ纏スル丁圍ノ如シ
 心太話 赤熊ノ高向吉太郎曰ハク予ガ祖父ナル
 吉兵衛ハ天保年間ニ寒天製造業ニ着手セリ其ノ
 書類ハ無し聞ク所ニ由レハ龜山ノ某家紀州ニ縁
 故アリテ原料ヲ紀伊海邊ヨリ取寄テ赤熊中野ノ
 原野又ハ近傍ノ田野ニテ晒シ上ゲナバ利益アル
 發明品ヲ造リ出ダスベシ紀州侯ハ御冥加運上

サハ差シ上ケナバ紀州侯御用トシテ許加セラル
 バレ等ノ勸誘ニヨリ赤熊ノ神崎儀助神前ノ森武
 助等扱カ合議シテ製造シ多少ノ利益ヲ得テ其ノ
 品ノ幾分ヲ紀州ハ上納シタリト云フ其ノ明細ニ
 知り得ラレヌハ残念ナリ 紀州侯ハ徳川三家ノ
 一トシテノ權勢ナレバ其ノ名稱ヲ藉ルハ時世ニ
 適シタル所置ナリ紀州侯トノ御縁故ニ由リ有柄
 川宮御邸ハモ御出入スルヲアリ他人ヨリ雨後年々
 継續シテ維新ノ時ニ至ル廢藩トナリテ龜山ノ關
 係モ絶エ記伊國ノ往復モ止ニ其ノ初ノ紀州侯ヨ
 リ許可セラレタル株權モ消滅ニ獨占事業モ競争
 管利事業トナル云々 當時ニツ葵ト申セバ徳川

家ノ紋所ニテ民間ニテハ見ルヲ稀ナル所ナルモ
 此ノ事業上使用スル所トナリ大威張りニ威張り
 タルヲモアリキ或ル時旅行致セシテ山路ニ於テ
 胡麻ノ蠅ニ逢ヒ劫奪ノ厄ニ係ラントシタル際袋
 ノ内ヨリ紀州御用ト書キタル三ツ葵ノ紋挑灯ヲ
 彼等ノ面前ニ突キ附ケ御用ナルグ無禮スルナト
 叫ビタレバ相手ハ這々ノ體ニテ逃ケ散リタリト
 祖父ヨリ聞ケリ云々

南栗田郡西別茂村
 記事参考

須知町 古稱須知村 大字 須知 院内 森 塩田谷

安井 市森 上野 蒲生 曾根

戸數 明治二十九年六百十六 人口三千五十八人
大正二年四百九十戸

本町ハ園部ヲ距ル約ニ里觀音峠ヲ隔テ、西南ニ
 アリ山隈ノ古驛トシテ貨物ノ集散地タリ土地較
 平坦ニシテ福知山ヲ距ルヲ遠ク四方ニ數十
 百ノ村落アルヲ以テ四時需給ノ商權ヲ握レリ
 京阪地方ハ通ルニハ觀音峠ノ急坂アリ加フル
 ニ牽索ニ老ノ坂アリテ不便ナリシヲ明治十五年
 車道開鑿ノ舉アリテ此ノ西坂ニ荷車ヲ通ジ人行
 亦頗ソノ勞ヲ少フスルヤ風氣俄ニ京阪ト相通ジ

須知町

一層ノ盛況ヲ呈シテ庄口ノ増加店舗ノ建設ヲ見
 シトセシニ四十四年瀛車東西貫通スルノ風聞
 リ或ハ言フ東西山腹ヲ洞貫シテ福知山ニ通ジ停
 車場ヲ須知ニ設ケラルベシ或ハ言フ北方ノ開鑿
 ハ大ニ工事ヲ減省スルヲ以テ須知ヲ經由セザル
 ベシト是ニ於テカ須知ノ死活問題ヲ惹起シ運動
 委員ヲ設ケ東奔西走シテ其ノ事ニ當ラシメタル
 ニ測量上北西地方經由ノ便ヲ認メラレ人氣大ニ
 沮喪シ前日移住シ来レル高買モ店舗ヲ閉鎖シテ
 新設胡麻停車場附近ニ轉住スルトハナレリ是
 ニ於テカ五十年前ニハ田畑ヲ墾シテ店庫トシ今
 ナ店庫ヲ墾シテ田畑トナス等急劇ノ變化ヲ顯出

セリ 其ノ運送力ノ便否ト賃銭ノ高低ハ左示ノ
 如シ例ハ一石ニ付園部ハ十五銭ニシテ胡
 麻ハ十二銭ナリ一石ニシテ三銭ノ差アリ須知
 ヲリ一度西方ニ向ヒ胡麻ニ搬出シ更ニ鐵道ニ由
 リテ東方京阪ニ向フハ不経済ノ如キモ瀛車賃物
 大輸送ニ三里五里ノ短距離ニハ大影響ナケレバ
 ナリ詰局胡麻ノ方ハ勞力ヲ省キ得ルノ利益アリ
 且生産費ニ長結果ヲ得レバナリ
 京阪ヨリ往來スル所ノ旅客ニ於テ胡麻ヲ經由シ
 テ須知ニ入ルニハ八哩ヲ逸クニ三等乗賃十三銭
 ノ失費ヲ多クスルモ觀音峠ヲ上下スルノ不便ト
 時間ノ失墜ニハ換算セラレガルナリ住民半農半

高ナルヲ以テ世態ノ憂遷ニ大異動ナク米ヲ田ニ
 取り薪炭ヲ山ニ取リテ生計ヲ立テ土差永住ノモ
 ノニハ大苦痛無ク依然タル須知村況ヲ維持シ銀行
 預金ノモテハ二十五萬ヲ有シ一戸當リ五百圓ヲ
 超ユ今ヤ却テ平靜ナル情致ヲ保テ急劇変化ニ良
 結果ヲ進メツ、アルモノ、如シ
 今ヨリ(大正三年)十四五年前ニ當リ後山ヨリ一盛リ満
 俺カ出テ昨日ハ三圓ヲ得タ人が有ツタ今日ハ又
 五圓ヲ得タ人がアツタト言フガ早イカ一村ヲ舉
 ゲテ浮足ニナリ真率ニ農高スル者ハ老人計リノ
 者ヲ呈シ俄然驕奢ニ誘惑セラレ錢廻リガ能クテ
 遣フ方ケ猶ソレヨリモ能クナリ一時面白キ夢ヲ

視タルモ満俺ノ思慮モ思フタ程ニ無ク一蹟一顛
 復起ツ能ハザル者輩出シ残ル所ハ贅澤ナル癖ト
 工夫等ニ荒サレタル娘等ノ私生兒ト墮落シテ便
 無キモノ、戸籍面ナドアルノミトハ村治一斑ニ
 示スガ如キ美風ヲ打仆ス唯一ノ惡因縁ナリシナ
 リ

高帳 一名水帳

上野村 高百五十五石七斗八升九合七勺

武田知行

須知村 高五百十五石四斗五升八合 文久度改

五百三十二石二斗四升一合

此ノ物成三百二石四斗八升二合五勺 龜山藩領

市森村	高二百八十九石二斗六升	文久度改三百三十石六斗八升一合
蒲生村	高四百七十九石三斗二升	文久度改四百七十九石八斗三升八合
塩田谷村	高二百五十二石九斗一升二合	此、物成百五十五石一斗二升九合九勺
安井村	高三百四十四石五斗二升八合	此、物成百十六石一斗三升二合
曾根村	高五百五十七石二斗六升六合	此、物成百五十一石四斗五升一合
	此、物成二百八十五石四斗七升六合	園部藩領

同村	高二百七十一石七斗九升	川勝中務知行
院内村	高百八十七石四斗四升六勺	文久度改二百八十二石四斗四升六合
	此、物成五十二石七斗	内、高五十六石四斗四升六勺
	此、物成十七石三斗	柴田七九郎知行
	内、高二百二十六石	前田帶刀知行
森村	高七十六石八斗	此、物成三十五石四斗
	此、物成三十石一斗四升一合五勺	内、高四十石

京都府立総合資料館所蔵

此ノ物成十七石六斗三合 山城 泉涌寺領

内 高二十石

此ノ物成八石八斗一合 山城 龍安寺領

内 高九石五斗

此ノ物成二斗三升七合五勺 山城上賀茂 林肥後守領

内 高七石三斗

此ノ物成三石五斗 前田帶刀知行

大牙ノ如ク錯雜出入セル多頭領知トシテハ一村

ニシテ數多異様ノ政恣ヲ承ケザル可ラ古來一

領主一副札ノ授ケルヲ以テ森村ニハ四個ノ副札

場ヲ作ラザルヲ得不例ノ切支丹部宗門云々等

部所ノ文句ヲ并列スルノ煩ト堪ヘ不僅々三十石

有餘ノ去米ヲ製シテ之ヲ四領主ニ分納セザル可

ラ不持ニ撥ムベキハ二斗三升七合五勺ヲバ遙々

山城ハ愛宕郡上賀茂社司ノ家ニ運送セザル可ラ

不人馬ノ飲食ニ往來ノ四日ニ徒費徒勞セザル可

ラザルトトス今ヨリ之ヲ視レバ近遠ノ程ナレド

モ當時ニ於テハ見テ怪マ不道途ノ險惡モ左マテ

苦痛トハ爲サリシナリ道米ハ領主ヨリ給スル丁

後ニ出スガ如シ川勝前田等ハ代官所ヲ置クヲ以

テ右ノ苦痛ハ之ナシ川勝ノハ當村曾根ニ前田ノ

ハ南栗田郡東加舎ニアリテ此處ヲ管理シタルナ

村治一斑

京都府立総合資料館所蔵

茲ニ此ノ邊リノ村路一斑ヲ記スマシ庄屋年寄所
煎ヲ村役人ト稱シ村治上責任ヲ有ス村内ノ名家
ニシテ人望アルモノヲ撰シテ代官之ヲ命ズ庄屋
所煎貢租ヲ取テ地頭ヨリ鰯レ書ヤ達シ方ヲ取
扱テ取舍存廢等ノ事加減ヲ爲ス庄屋ハ今ノ村長
カ收入役ヲ兼ネタラシガ如シ年寄ハ助役ノ如シ
庄屋ニハ米六石ヲ所煎ニハ一石ヲ一年ノ給料ト
ス之ヲ金錢ニ換算セバ六十錢以下ノモノトス(米一
石相場銀五十及六十文)舊任天保弘化嘉永ノ比庄屋ガ一村ヲ以テ
已ガ子分ノ如ク大小ノ世話ヲ爲スニ對シ三圓内
外ノ報酬トス今日ヨリ回顧スレバ意想外ナリ出
役ノ丁アレバ相當ノ實地入費ヲ支給ス

蒲生ハ庄屋給五石五斗二升 塩田谷ハ三石六斗
安井ハ四石 曾根ハ三石 院内ハ前田柴田各
自ニ石三斗ヅ、 森ハ泉涌寺龍安寺林ヨリ一石
七斗四升 前田川勝ヨリ五斗 右表面領主ヨリ
給與スル所ナルガ村租ヨリ引去ルナリ 曾根ノ
代官ハ給料三十七石領主ニ代ハリ政治ヲ布ク
院内村森村等數領主ニ分轄セラレタル所ノ寄合
ハ庄屋ヨリ場所時日ヲ定メ村ノ歩キト云フ人夫
ヲ以テ通知シ其ノ車柄ガ一村ニ係ルモノナレバ
地頭毎ノ庄屋主合年寄所煎名主相談シテ決定シ
一領主ノミニ關スル丁ナレバ具ノ領知所ノ役人
名主ノミニテ決定ス九石七石高ノ領主ノ如キハ

租米コヲ徴收スルナレ其ノ地ニ君臨スルニ非レ
ハ地頭タルノ名義ハアレド何所ヨリ何所ニ至ル
面積何程ト云フ實封ノ土地アルニ非レバ作民ヨ
リ御倉ヘ收入シタル内ヲ分納スルマデナリ幕府
ノ制知行所アルモノト藏米取ノ別アリ林又ハ泉
涌寺ガ藏米取ナラシニハ京都ニ條城内ノ倉廩ヨ
リ之ヲ受取り大手數ヲ要セズ且ツ豊凶ニテノ増
減ナキナレド領主トカ知行所トカ云ハバ名譽ア
ルモノ故往々土地ニ主タルノ名ヲ欲シガリタル
ナリ
山役ハ即チ山林租税ニシテ貧富ヲ以テ家ノ等差
ヲ立テ上中ニ等ハ家別米一斗ニ升ヲ納レテ一年

中薪ヲ燃ルテ得ルナリ下等即チ貧家ハ一二合
ノ米ヲ收ムレバ何時タリトモ採樵スルテ得ル
ナリ其山林ハ大畵小瀑ノ辺傍トス
納租期ハ毎年十二月二十日トス小作人ニテ不納
スルトキハ地主コレヲ五人頭ハ通知ス伍頭即時
之ヲ小作人ヲ呼ビ督促ス欠納兩三度ニ及ブトキ
ハ小屋ヲ村外ノ不毛地ニ作り之ニ住居セシメ乞
丐同様ノ取扱ヲ爲ス便チ是レ村内慣行ノ流刑ナ
リ村人ノ大ニ耻ナ且恐ル所ナルヲ以テ納租ヲ
怠ルモノ少シ
五組頭ナルモノアリ名譽職ニシテ村普請ノ下
擔當シ割り當テノ權衡ヲ取ルテ掌ル組内ニ先

丹波志

亡者アレバ之ヲ組内ニ報告シ周旋ス多額ノ納税
ヲ爲スモノモ此ノ役ニ就キ死人アル家ニ往キテ
ハ喪事ノ棟梁トナリ柱石トナリ其ノ事ヲ操リ親
族ハノ報告ヲモ擔任ス謝儀トテハ贈ラズ忌明ノ
際ニ之ヲ拓キ食膳ヲ饗シ謝意ヲ述アルノニ香奠
ノ額以テ葬式ヲ舉行スルニ足ラサル片ハ之ヲ周
旋シテ其家相應ノ禮ヲ舉ゲシムル等ノ事ヲモ爲
サ、ル可ラス婚禮嘉儀ニハ招キテ上客トス
伊勢講愛宕講アリテ講中ノ積金ニテ名家各番具
金ニテ參詣スルヲナリシガ維新ノ大變革ニテ其
ノ事跡ヲ論没セリ念佛講ノニ依然トシテ在リ講
中ノモノ講内ニ死亡者アレバ墓穴ヲ掘ル 九役

ト唱フルハ一日役セラレテ玄米一升六合ヲ給與
ス村役ノ出張日當ノ如キ之ニ當ル半役ト唱フル
ハ六合ナリ一日役セラレ、ノ給料ナリ五組頭ノ
取ル所ナリ是皆土地ヨリ取ル即チ田畑ノ租米ヨ
リ取ルモ宅地ニハ賦課セズ免ハハツ九厘ナリ
増米トテ一石ニ付二升ツ、込メ置クナリ 道米
トテ一石ニ付一升ノ運送費ヲ領主ヨリ給與セラ
ル遠近ニヨリ差アリ龜山迄六里ニシテ十分一ノ
道米ナル故一石ヲ納ムレハ一石一斗ヲ納メタル
ニ同シ左ハナリ乍ラ大難関アリテ彼ノ小差大差
コレナリ是ハ城内ニテハ米改メニテ前示ノ増米
スルヲハ之レガ爲ナリ大差トハ太キ竹人筒ヲ苞

京都府立総合資料館蔵

二差シ込ミ小差ハ小ナル竹筒ヲ苞ニ差込ミ中ノ
米ヲ拔キ取り吟味シ不良ノモノアレバ其苞ヲ持
歸ラシムルナリ是ノ関門ハ即チ姦吏カ姦ヲ弄ス
ル所ニレテ賄賂ヲ要スル所トス
租米ヲ不良視セラル、ニ於テハ之ヲ投賣セザル
ヲ得ズ又良米ヲ龜山米高ニ購求シテ收納セザル
可ラズ其ノ足元ヲ見タル高人ハ不良米視セラレ
タル米ハ之ヲ叩キテ買ヒ之ニ代フベキ米ハ之ヲ
高相場ニ賣ルノ弊アルヲ以テ之ヲ村ニ持歸リ再
ニ輸送スルハ煩勞ニ耐エズ是ニ於テ藩主ヨリ切
キヲ買フノ一途ヲ得タリ其ノ途タルヤ藩中ノ高
祿アル賣米スル程ノ家ニ親近ニ出入シ誰某出入

方トナリ其ノ士人ノ賣米券ヲ買ヒ其ノ券ヲ藏方
役人ノ所ニ持行ケバ券面記載ノ米ヲ出スナリ故
ニ須知ヨリ收ムベキ額米平年三百餘石ノ米券ヲ
士家ヨリ預買シ之ヲ藏方役人ニ渡シ役人ヨリ受
取りタル米ヲ直ニ須知上納米ナリト唱ヘ役人ニ
出セバ差米セラル、ノ患ナク難關通過上ノ虞モ
ナシ且ツ一升ノ通米ハ運送セズシテ之ヲ得テニ
産ノ暴利ヲ得ルトナルナリ併シ出入ヲ許サレ
タル士家ハ、贈與ハ多少之ヲ爲サザル可ラズ一
石ニ付一升ノ利コレヲ三百石ニ集ル數ト三百
石ヲ六里運送スル費ト藏役人ハ、賄賂ハ全ク村
方ノ利トナルナリ藏方役人ハ大家ノ爲ス所ノ不

町
皮
志

正ナルヲ知レドモ勢威ノアル所如何トモスル能
 ハザルナリ
 産物 薪炭 柘菌 味噌 柘菌ハ近來塩ニ醜ケ東
 京ハ輸リ罐詰ノモノ北海道ハマテ輸出ス復知味
 嗜ハ赤味噌ニシテ淡味ヲ含ム一家ノ獨占ナリシ
 ガ今ハ數家ヨリ製出ス本家本元ノ絹屋ハ丹水
 ニアラザレバ具ノ淡味ヲ出サヌトハ思ヒキヤ今
 ハ孰レノ家何ノ水ヲ問ハズシテ思フが儘ニ絹屋
 具ノ物ト同ジキヲ製出ス
 當時市場ニ於テ輸出スル米ハ多ク檜山梅田高原
 吉田竹野實美三ノ宮ヨリ來ルモノ大凡年一萬石
 平均具ノ外ノモノニテハ薪ノ七十萬束炭ノ十萬

俵柘茸ノ一萬五千貫栗ノ實ノ五百石枡ノ實ノ五
 萬貫ナドヲ巨額ト算ス
 蒲生野 コモノ 度蘭野 クイアシノ 深志野 フカシノ
 蒲生野ハ大字蒲生ヨリ高原村ノ大字豊田ニ至ル
 ノ原野ニシテ東西五町南北九町面積六十町飛地
 ヲ算入スレバ百町トナル之ヲ郡中第一ノ原野ト
 ス吾丹波屈指ノモノトス海拔ニ百米突ニ達スル
 高地アリ地質ハ黒砂ニシテホコノ黒土ナル
 ハ枯葉枯草ノ陳々相重ナリ一尺以上ニモ及べル
 處ハ樺櫨草莽生ニ重ナレルニ由ル化學家曰ハク
 蝕酸ヲ含有シテ燐酸不足シ土粒微小ニ過ギテ毛
 細管引カ少弱ナルが故ニ温ヲ引クノ力ニ乏シ之

度蘭野
 深志野

須知高京檢山
 約百町歩ノ開墾
 正十一年十月ニ始メ
 府ハ調査田農商
 務省ニ申請
 直轄ノ上ハ公
 共團體ニ於テ
 料管
 一一定年限ヲ設ケ
 一一定ノ作科ヲ定メ
 一一定ノ經費ヲ定メ
 一一定ノ開墾地ヲ小作業
 者ニ移シ
 一一定ノ自作農者ヲ
 十月七日農商務省
 技師舎品某來

ラ救フノ方恣ハ土沙ヲ混入スルニアリ是ハ大工
 車ニテ容易ニ行ハル可ラ不故ヲ以テ具ノ簡便方
 トシテ鋤鉄ヲ入レテ日温ト空氣トヲ引キ入レシ
 ムバシ黒色ノ次第ニ減少シ茶褐色トナレルハ喜
 アマシ具ノ赤土ノ部分ニハ果樹ヲ種ウベシト其
 ノ圓形丸形ノ石出デ角アルモノ少キハ具ノ昔流
 水域中ニアリタルヲ知ル古ノ河身ナルヲモ知ル
 具ノ岩質ナラザルニ於テモ亦知ルトハ地質學者
 ノ言ナリ
 深志野ハ管根ニアリ山丘ヲ以テ蒲生野ト聞ツ而
 シテ深志野ハ西蒲生ハ東而シテ慶蘭ハ南 福知
 山方面ヨリ来ル者石標ヲ見ル右京左せぎト刻ス

是レ即チ深志野ナリ右方ニ既墾ノ田墾ヲ見ル具
 ノ農功ノ擧ケ難キヲ知ルニ足ル 蒲生野ノ北端
 ニ界線アリ高原村トノ分野點トス龜山藩領ノ當
 時茶樹ノ栽植ヲ試ミ又具ノ實植ヲ爲シタルモ結
 果ヲ得ズシテ止ム京都府ノ管理トナリ明治五年
 ニ知事長谷信篤大參事模村正直ハ大藏省ノ訓示
 ニ原ヅキ全國ニ率先シテ牧場ヲ此處ニ設ケアラ
 カシ種ノ牝牡牛ニ十八頭ヲ米圃ヨリ購入シ正直
 ガ知事トナルヤ農牧學校ヲ此處ニ設ケ米人セ
 ムスヲスタリシウ斗ナルモノヲ聘シテ教師ト
 シ弘ク學生ヲ募集シ畜産繁殖搾乳開墾ノ教授セ
 レ

府
 志



十二年六月京都牧畜場ニ於テ牛運物益城畜牛ヲ
壹萬八千頭ニ賣却スルノ悲運ニ接リ當所農牧事
業ニ同一蹇蹶ニ歸シ牛畜益城運物ヲ賣却スル
ノ事トナシテ種村正直
ノ勸業知事ノ報告ナリ

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

丹波
深志
須知

京都府立総合資料館所蔵

蒲生野 葎南野
深志野 合稱シテ
須知野 ト云フ



京都府立総合資料館所蔵

十二年六月京都牧畜場ニ於ケル建物器械畜牛ヲ
 壹萬八千圓ニ賣却スルノ悲運ニ接レ當所農牧事
 業モ同一蹉跌ニ歸レ牛畜器械建物ヲモ賣却スル
 下トナレリ植村正直ハ學校ノ下工商ノ下ニ盡カ
 レ勸業知事ノ綽名ヲサハ博リシカ大抵挫折ニ歸
 レタルハ惜ムベシ竊ニ疑フウチドノ如キ實業經
 験家ニシテ先見ノ明ナカリシ下ナリ著者モ其ノ
 規模ノ大ナルト教師ノ勵精ナルトヲ目睹シテ以
 爲ハラク前途有望ノモノニシテ不毛ノ地無カ
 シムマシト而シテ昏聩ニ教師ノ鞅々トシテ去
 リ生徒ノ悉々トシテ散ジタル孰レモ傷心ノ下ニ
 テアリシ其ノ土地耕下ゲノ手續ハ京都府ニテ之

丹波志



丹波國
 丹波郡
 丹波市
 丹波町

ヲ爲シ遂ニハ之ヲ稅務署ニ移シ大抵一錢歩金一
圓價格トシ早キハ五年目ニ晚キハ二十五年目ニ
納稅地トスルノ方針ニテ土地ノ情況ニテ遲速ヲ
定ム
是等原野丘陵ハ世人ノ廢物視スルニ及シ軍軍眼
ヨリ視レバ重要視スベキノ點アリテ明治維新後
兵ヲ續リ軍ヲ調フルノ地ヲ數フレバ屈指ノ中ニ
舉ケラレ年々此ノ處ニ於テ銃聲砲響劍影旗采陸
續トシテ行人ノ耳目ヲ衝動シタリ其ノ要地タル
所以ハ萬が一ニモ日本海面ニ外敵アリテ軍港ハ
封鎖セラレ一隊ハ鋒銳ヲ丹波ニ向ケ天田郡ノ野
戰業已ニ殆ナリト假定セヨ其ノ長驅ノ勢ヲ防遏

スルハ此ノ原野ヲ舍キ好地位無キナリ平原此ノ
如シ數大隊ノ兵ヲ操ルニ足ル丘陵數十級援護ノ
小補無シトセシヤ此ノ好戰地ニシテ用ヲ爲カズ
ンバ丹波ヤ臨リ京都殆シ下圖ニ示ス所ハ明治二
十年ヨリ繼續シテ練習シタル夜行工事ナリ晝間
ハ熟眠休養ニ作候ノニ要所々々ニ勤務ス午前一
時將校竊ニ起床シ兵卒ト共ニ哨々地飲食結束シ
燈火無ク楚音無ク夫々任ニ就キ業ヲ執ル曉天ナ
ラントシテ工事ヲ休メ又哨々地歸營スル也此ハ
工兵ノ鑿テラ墜道廣ク一間許高ク肩ヲ設スル也
カハ敵管假設地此ノ練習ハ檜原口百三高地ノ
攻撃ニ實施セラレ露軍ヲシテ落膽セシメタリ

京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵

明治四十一年ニ至リ郡立實業學校起コル乙種程
 度ノモノニテ百餘名ノ生徒アリ桃園アリ棠林ア
 リ農作試場アリ大池アリ蒲生一面ノ給水ヲ為ス
 マレ縦五町横二町ノ池水ハ春時桃花ト相映シテ
 美ヲ歎ハス 生徒ハ學理ヲ實地ニ應用シテ、勞
 働シ卒業前早ク既ニ獨立ノ判断ヲ自ラ下スノ氣
 概ヲ具ヘタリ
 芋 大正元年度高サ六尺ヲ過キ 莖下直徑四五寸
 小芋粘氣強ク味美ナリ
 一畝歩 收穫一千十貫八百匁 八錢替八十圓
 餘

種芋代六圓三十錢 肥料七圓九十錢 手間

見積モリ二十圓二十錢
 金合計三十四圓六十錢 差引金四十五圓
 五十錢ノ利
 斛芋 一斛二百匁位ノモノヲ造リ出ス 一坪
 ニ一貫匁ヲ收ム
 馬鈴薯 四百七十貫ヲ一坪ヨリ得
 陸稻 一畝歩ニ一石六斗一升八合ヲ得
 猿カク池訴訟判決 猿カク池トテ安井村ノ田
 用水アリテ數十畝ノ養ヲ爲セシガ一年旱敷ノ丁
 アリ村ノ長百姓ニ安井長兵衛ナルモノアリ一筋
 ノ溝ヲ掘リ自分ノ田養水トナセシカバ塩田村ヨ
 リ故障ヲ申シ立テ長兵衛ニ迫マル長兵衛コレニ

從ハ塩田村民ヨリ其ノ趣ヲ龜山藩代官ニ訴ヘ
 長兵衛ヲシテ連ニ其ノ溝ヲ埋メ立テシメントテ
 乞フ代官ヨリ長兵衛ヲ呼ビ出シ村民ノ訴状ヲ示
 シ其ノ答ヲ責ム長兵衛ノ言フ所亦理ナキニ非ズ
 代官其ノ裁決ニ苦ミ之ヲ奉行ニ訴フ奉行雙方ノ
 口書ヲ覽テ曰ハク此ノ池アルニ由リ此ノ紛議ヲ
 生ズ以後ハ此ノ池ニ溜水スヤカラズ縫合溜リ水
 スルトモ一切私用ヲ禁ズ塩田村民モ長兵衛モ此
 ノ判決ヲ聞キ啞然タリ其ノ後ハ良田養水アリテ
 カラ之ヲ用ル能ハズ羊ヲ誣ルニ從ヒ此ノ池モ自
 然ニ埋モレヌ
 式内 何鹿神社 宇曾根ニアリ 出石鹿峯部トモ

何鹿神社 宇曾根ニアリ 出石鹿峯部トモ

云フ曾根ハ必部ノ訛ナラント言フ
能滿神社 上野鎮座 主神事代主命武甕槌命
須知郷大宮ノ稱アリシナリ延慶三年造立享祿四
年布森城主須知左馬頭再建慶長十五年米百石人
夫千五百人ヲ費シテ修理ス現存ノ神殿ハ寶曆十
二年起工シ五年ヲ経テ明和三年竣功セルモノ本
殿ノ彫刻ハ郡内ニ見ル稀ナル技巧ナリ
新産物蝙蝠傘ノ柄 此ノ品ハ後來支那ヨリ輸入
レ来リシガ如復(三十八九年ヨリ)當地ニテ製出ス
ルヲトナリヤまなし ことねりお ちさき そよぶし
でノ五種ヲ主要木トス中ニ就キシデハ工藝的性
質ノ最優等トス是レ木質堅固ニシテ細ク而モ削

リテ折ル、ノ憂無キヲ特徴トス其ノ木多クアラ
ズ原料購入ノ方法ハ一山若干ト稱シ立木ヲ一纏
メニシテ買フ山ニテ適當ノ原料木ヲ搜シ當テタ
ル上ハ直ニ鋸断シ運搬便利ナル所ハ一束ヲ百本
トシ不便ノ所ニテハ五十本トシ藤蔓ナドニテ結
束シ肩上車上馬上等ニテ山元附近ノ工場ニ持出
スナリ 着後直ニ皮ヲ剥キ乾燥セシム冬ハ五十
日間夏ハ十餘日ニシテ水氣去ル而シテ傘柄製造
蓋城ニ懸ケルナリ此ノ蓋城一臺三十圓位トス
一日ノ工程一日一人ニテ乾燥 屈曲ノ矯正粗削
等ヲ以テ平均百八十本ヲ仕上ケルナリ此ノ代價
三圓六十錢差引一本六厘一人ニテ一圓八錢ヲ利

得スルトナル 此ノ粗製品男物三百六十本ヲ
三十打トス女物ハ七百二十本ヲ一駄トシテ荷送
リシ大阪ハ送ル 男物長四尺二寸ト四尺トアリ
直徑五六分 女物ハ長三尺八寸 五六分ヨリ三
分四厘ノ直徑モノトス 冬期農家ノ副業トシテ
好適用トス
満庵ニ亦近來ノ輸出品タリ
復知八景 古來傳フル所ニシテ何人ノ命スルカ
ヲ知ラズ左ノ詩モ亦何物ノ作ニ係カルカヲ知ラ
ズ

象鞍鹿鳴

何處却々露氣新
夜深猶聽送聲頻
聖朝不問靈臺事

秋冷前峯月一輪

市森琴瀑

萬丈懸○似古琴
五條日灑老松陰
却疑暗有遊仙到
彈出風流世外音

花岡山躑躅

南風縷動漲紅霞
路上人來幾駐車
誰識年々春晚節
杜鵑啼出滿郊花

深野朝霧

遠遮山野映空輕
若有如無渺々生
知是前村人過路
暗糝糊裏只聞聲

上野晴雪

白雲紛紛到晚暉
亂鴉無影帶聲飛
前溪天齋殊多趣

不做山隈興盡歸

蒲生野蟲聲

唧々啾々月色清
滿郊青草露珠輕
秋風一夜聞天樂
不是繁弦孤笛聲

城址桃花

不見頽垣廢壘斜
太平時節植桃花
殘陽方在香霞裡
紅殺村中三兩家

眉女明月 眉女山名

遠翠橫眉輕霧開
迤如嬌面映樓臺
月輪升得清岡水
疑是天孫捧鏡來

三日市ハ往昔市場ノ遺址

高等小學初設ノ時ニハ一郡ニ二校ヲ置キ一ハ園

部ニアリテ東部生徒ヲ容レ一ハ當地ニアリテ西

部生徒ヲ容レタリ是レモ山脈ニ横断セラレタル

結果トシテ一校ニテ不便ナルニ因ル

村西ニ於テ道路ニ分レ北向スルモノヲ舞鶴街道

トシ南行スルモノヲ福知山街道トス

和知ニ趣クノ道路ハ明治二十四五年間ニ開鑿セ

ラレ北東田郡ノ木材コ、ニ集散ス鐵道開通シテ

ヨリ其ノ利途ヲ失ヘリ

升谷迄ハ木材ヲ筏ニシテ下レ升谷ヨリハ車載シ

テ此ノ地ニ至リ山路ヲ屈曲上下シテ園部ニ出テ

再ビコレヲ筏ニシテ保津川筋ニ浮バ京坂ニ送り

タル煩擾モ今ハ昔ノ一夢トナリ了シヌ

京都府立総合資料館所蔵

商品賣買ハ盆暮ノニ季掛ナルトハ他村ト異ナル
ト無カリシガ其ノ異ナル美風ハ懸取りニ行クモ
ノ無クシテ懸掛ニ来ルモノ計リテリシニ在リ盆
季七月ニ入ルヤ買方ハ後レシトラ怕レ面々商店
ニ来リテ通帳又ハ書出ラ求ム賣方ハ其ノ貸ニ倒
レ無キヲ確信スルヤ悠然トシテ常ニ其ノ準備ヲ
後ル一方ハ通帳書出シノ請求ヲ爲ル一方ハ其ノ
延引ノ断リヲ言フナドノ奇談モアリ年未亦然リ
他方ニ見ル可ラザル慣習ナルヲ惜ムベシ明治文
明ノ荒風吹キ荒ミ此ノ美風ヲ埋没シ了シヌ
城山 須知景光ノ居リシ所ニシテ瀑傍ノ小山ナ
リ五段歩許ノ平地ヲ存レ石垣ノ残石軍用ノ丹迹

亦在リ左馬頭ガ明智方ニ攻陥サレタル所アリ
須知六郎景澄ノ家系ハ上野ニ残り須知次郎左衛
門ヲ名乗ル数代ノ通り名トカヤ須知ヲ昔ヨリシ
うちト讀ミ来ルハ當時志守知又ハ志内トスレナ
ド色々ニテ太平記ニ志守知山内芋毛ノ輩トモ又
ハ長澤志内ナド種々文字ノ換ハレルヲ見ル須知
ノ字ヲ用ヒ慣レテヨリ三百年トカヤ叔景澄ノ家
ハ舊キモノナルガ賤ヲシテ知ラレヌ源氏ノ臣ト
ナリシモ義朝ニハ見出サレヌ勇カアルモ可惜月
日ヲ無下ニ送り斗ケル内ニ義朝ハ平貞ノ爲ニ京
都ヲ逐ハレ途中ニ殺サレシカバ景澄モ身ヲ寄ス
ルニ處ナキモノカラ同僚ト共ニ心ナラヌモ時ノ

丹波志

ク平氏ノ門ニ腰ヲ屬メ時ヲコソ持テタレ義朝ガ
子ナル惡源太義平ガ敵平家ヲ睨フ様ヲ察レ語ラ
テテ巴ガ奴ニ装ヒナシ平家ノ館ニ候スル毎ニ伴
ト行ケリシニ何日トナク誰レ言フト無ク此ノ事
六波羅ニ聞コエ難波妹尾ノ西勇士ニ數百ノ士卒
ヲ引率セシメ須知ノ旅館ヲ取圍マシム義平景澄
コレヲ聞キ今ハ是レ迄ト白旗押立テ、應戦シ義
平ハ自名乘リテテチテ出デ一旦ハ敵ヲ驅ケ散ラ
シタルモ衆寡遂ニ敵セズ屋上ニ登リ其ノ行衛ヲ
ゾ暗ラマセケル景澄モ亦度々戦ヒ疲レ甲冑ノス
キマシクノ琛手ヲ負ヒ終ニハ捕虜トナリ六波羅
迄ニ引出サレ清盛自出デ、之ヲ責ムルヤウ其ノ

方ハ近頃吾ガ家ニ来リ扶持セラル、須知ナラズ
ヤ何ニ由リニ心ノヲ行フヤト景澄怖ル、様ナ
ク悪ヒレズシテ曰フヤウ我ハ代々源氏ニ仕テ誓
リ汝ガ家ニ仕フルハ時ヲ候ツノ謀ノミ汝疎漏ニ
シテ悟ラズ何シツ我ヲ嘲ケルゾト清盛怒リ武士
ニ命ビ速ニ之ヲ斬ラシム
墜石ノ話 慶應二年ノ頃空中ニ怪シゲナル響音シ
テ京都ノ方ヨリ飛ブモノアリ當時内慶外患輻輳
シテ人心汹々タルノ折柄トテ口舌ヨリ産ミ出セ
ル珍説多キカ中ニモ此ノ墜石ヲ以テ天命ノ警告
ニテ人間滅却ノ前兆トナド、マデ評シ合ヘリ此ノ
怪物ハ曾根ノ野ニ落チ入畜ニハ損傷モナカリシ

丹波
志

ガ四方ヨリ来リ着ルモノ引キモ切ラズ曾根ノモ
ノモ騒ギ立テテレ暫シガ程ハ仕事モ年ニ附カガ
ルノ有様ナリシガ土人秋田某ノ所有ニ歸シテ
博物館ニ容レタリ館人曰ハク是レハ珍シキ品
ニテ天躰中ノ流星群ニ常軌ヲ脱シ地球ノ引カニ
汲收セラレテ落テ来レルナリトテ金若テヲ與ハ
タリ
琴瀑 舊稱瀧見(たなみ)ノ瀑ハ大字市森ノ山中ニ
アルヲ以テ市森ノ瀧ト呼ブ山中ノ濬池コレガ源
ヲ成シ琴身ヲ爲シテ下ル高サ百六十尺幅四十二
尺一大岩アリ流泉ヲ堰シ碎イテ數十百條ノ緑線
状ヲ造リ平面長岩ヲ傳フテ下ル其ノ音ノ嘈々松

風ノ颯々ニ和シ水勢少キ時ニハ琴絃ノ天然ニ豎
テラレ天女ニテ奏スルナラシカト訝ル領主松平
紀伊守一夕此ノ雅名ヲ命ケテヨリ世間ニ喧傳
セラル、ニ至ルニテ寛延二年ノ事トスたなみハ
此ノ邊ノ地名ナリシヲ何人カ瀧見ノ字モテ之ニ
當テ又惜ムベキハ瀑面ノ陽ニ向ハズシテ北ニ嚮
フニアリ紅葉ノ期日ヲ最佳トス
幕府徳川ノ制度ニ大小名ハ各自城邑防守ノ任ア
リテ一夜タリトモ他所ノ宿泊ヲ許サズ故ヲ以テ
領主龜山藩主ハ名ヲ領地巡視ニ藉リテ看瀑ス君
臣十餘騎壘ヲ并ベテ掛曉龜城ヲ出テ齋暮ニ歸城
ス無風流ナル村役ハ之ヲ他瀑ト競争セシメ水勢

丹波志

ノ多キニ因リ優勝ノ名ヲ博セシメシト水涼路ニ
 堰シテ滯蓄シ領主ノ瀑下ニ至ルヲ計リ土豚ヲ除
 キ水カヲ濶大ナラシム以爲ヘラク領君ヲ稱スル
 臣氏ノ務ナリト一日藩侯侍臣ト語り話次コノ瀑
 ニ及ブ一侍臣具ノ水勢ノ細キヲ繚ノ如キニ動ア
 ルヲ説ク侯曰ハク瀑勢予ノ見ル毎ニ漲リ落ツル
 ハ何ゾヤ侍臣俄ニ悟リ急ニ唯々ス候怪ニ詰リ問
 フテ具ノ實ヲ知り苦笑スルモノ之ヲ久クシ後日
 代官ニ命ジ瀑勢ハ天爲ニ任セウシモ人爲ヲ加フ
 可ラズト侍臣某大ニ其ノ失言ヲ悔リ村民ハ之ニ
 ヲリ勞役ヲ免レタリ

京都競馬倶楽部ノ競馬場 大正二年設置 最初

九月三日間 周回一哩

明治三十二年土地ノ有志者相謀リ道路ノ開通ヲ
 爲シ要者ヲ得セシメタリ此ノ費用ニ六百圓

水多ふと地隈異



常世ニ結ルモノト
 運送業者

京都府立総合資料館所蔵



ヨリ傍役ヲ免レタリ
侍臣某大ニ其ノ先言ヲ悔リ村民ハ之ニ

京都府立総合資料館所蔵

京都競馬俱樂部ノ競馬場 大正二年設置 最初
 馬會 九月三日間 周回一哩
 明治四十二年土地ノ有志者相謀リ道路ノ開通ヲ
 爲シ車行ノ便ヲ得セシメタリ此ノ費用ニ六百圓
 金ヲ投ジタレバ看瀑ノ客ヲシテ足脚ヲ勞セズシ
 ラ眼眸ヲ慰ムルヲ得以來尋訪ノ數著ク増加セ
 リ大阪朝日新聞記者ハ之ヲ評シテ以爲ヘラク一
 瀑ノ爲ニ巨資ヲ投スルハ經濟上不倫ニ似タリ云
 ヲ安ンズ知ラン此ノ奥區ニ生茂スル巨樹偉杖ニ
 シテ價値ナカリシモノガ搬運ノ便ニ免リ出テ、
 有用ノ材トナリ山地ノ所有者ヲ利シ運送業者ヲ
 益シテ土地ノ遺利ヲ世ニ紹紛セントハ



知事モ種畜場ノ臨檢カアルノテ高原村カラノ歸
 途立寄ラレ、郡長モ數名未ル新聞記者モ来ル是
 テハ種畜品評ノ餘興トシテ瀑布参看ソレヨカ
 ト俄ニ路ヲ開ク澁見寺ノ修繕ヲスル其ノ序ニ瀑
 側ノ難木ヲ斬ルニ付ケ見出シタルハ槭樹ノ古來
 數多アルニテ難木ヲ斬ルニツレテ一樹頭ハレニ
 株著ハレ當年ノ秋色ハ大ニ古ヲ思ハシメ古人ガ
 イツノ程ニカ斬クモ心ヲ籠メ置キシヲ感ズル
 トハナレリ明治ノ御世ニハ遺杖無シ真ニ然リ琴
 ノ絲ニ錦ノ掛カレル得モ云ハレ又風情ヲ露ハシ
 靈樹山玉雲寺俗稱澁寺瀑下ヲ距ル迂回ノ路七八

町直
 正七
 八年
 八
 日
 練ヲ
 線ハ
 宗旨
 三十餘ヲ管ス
 大圓寺
 宇上野美女山ノ半腹ニアリ
 開基後
 城天皇第三皇子
 足利尊氏コレヲ追慕ニ堂宇ノ

慶吉天
 正
 天
 正
 堂
 縁
 具ノ匹
 具ノ練



(行徳園寺) 圖ノ山頂由頂峰東山頂望見
 宗旨 禪宗 洞 船井郡 四本寺ノ一ニ居リ末寺

町直
 正七
 八年
 八
 日
 練ヲ
 線ハ
 宗旨
 三十餘ヲ管ス
 大圓寺
 宇上野美女山ノ半腹ニアリ
 開基後
 城天皇第三皇子
 足利尊氏コレヲ追慕ニ堂宇ノ

知事	モ	種	畜	場	ノ	臨	檢	カ	ア	ル	ノ	テ	高	原	村	カ	ラ	ノ	歸
途	立	寄	ラ	ル	、	郡	長	モ	數	名	来	ル	新	聞	記	者	モ	来	ル
テ	ハ	種	畜	品	評	ノ	餘	興	ト	シ	テ	瀑	布	参	看	ソ	レ	ヨ	カ
ト	俄	ニ	路	ヲ	開	ク	凝	見	寺	ノ	修	繕	ヲ	ス	ル	其	ノ	序	ニ
例	ノ	雜	木	ヲ	斬	ル	ニ	付	テ	見	出	シ	タ	ル	ハ	槭	樹	ノ	古
數	多	株	著	イ	ツ	ハ	株	著	イ	ツ	ハ	株	著	イ	ツ	ハ	株	著	イ
ト	ハ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ
靈	樹	ト	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ



町直徑ハ二町計リ開基ハ城主須知美濃守慶吉天
 正七年城主須知景光明智光秀ト戦フテ亡ホサル
 、ヤ寺亦具ノ火ニ罹リ堂宇什物尙有ニ歸ス天正
 八年光秀再建シテ舊觀ニ復ス然レハ往時ニ比ス
 レバ規模甚小ナリ而エ幸ニシテ今日ニ存ス堂縁
 ヲリ瀑布ヲ望ノハ一段ノ風趣アリ然レハ具ノ匹
 練ヲ直懸セル姿ハ尋常一様ノ瀑布ニシテ其ノ縁
 線ハ見ル可ラス具ノ琴調ハ聽クニ由ナシ
 宗旨 禪 宗 洞 船井郡四本寺ノ一ニ居リ末寺
 三十餘ヲ管ス
 大圓寺 宇上野美女山ノ半腹ニアリ 開基後嵯
 城天皇第三皇子 足利尊氏コレヲ追慕シ堂宇ノ

丹波
 志

建増梵鐘ノ高附等ヲ爲シ其ノ規模ヲ弘ニセリ
 明徳元年ノ秋大雨ニテ山崩レ寺壊レテ以テ址ヲ
 東北ニ移シテ再建ス寛文十一年小出信濃守光考
 ノ碑ヲ安置シテ寺格ヲ高ノ園部領内三箇寺ノ一
 トス 文化六年今ノ地ニ轉シテ堂宇ヲ建フ境内
 凡境ナラス眺臨ノ目ヲ放ツベシ小丘廣原見テ厭
 カズ 臨海宗ニシテ天龍寺末ナリ
 上野ニ塚穴アリ
 森忠太夫家ノ事及ビ御葬牛ノ事
 森忠太夫ノ家ト皇家ト如何ナル御閑撃ノアリテ
 御大喪毎ニ御葬用ノ牛ヲ拜領スルヤラ尋ヌルニ
 當時幕府ハ朝廷ヲ度外置キ年々ノ御入費モ勅使

ナル小吏ヲ上京セシメ冗費ハ勿論必要ノ御調度
 サハ十分ニ奉ラシメ不商家ヨリ日々贖買セガル
 可ラガルモノサハ嚴密ニ調査シテ減額スルヲ常
 トスル時トテ御代々ノ泉涌寺其他ノ陵墓モ亦棄
 勝ニテ新喪アラセラルトモ地所ノ埋葬シ奉ル
 ベキモノナキマデトハナレリ忠太夫ハ其ノ領主
 ノ泉涌寺ナルヨリ役僧ヨリ又役人ヨリコノ事ヲ
 耳ニスルコト久レク聞ク毎ニ朝廷ノ御衰徴ヲ嘆
 キ其ノ所有地十七町アルヲ以テ之ヲ御陵地ニ獻
 納シ猶且フ泉涌寺ヲ再建シタル功ニヨリ朝廷ヲ
 御覺目出度何かナ御褒美アルベキハツナルモ御
 不自由勝ノ事故下賜品トテハ之ナシ偶々御先

京都府立総合資料館所蔵

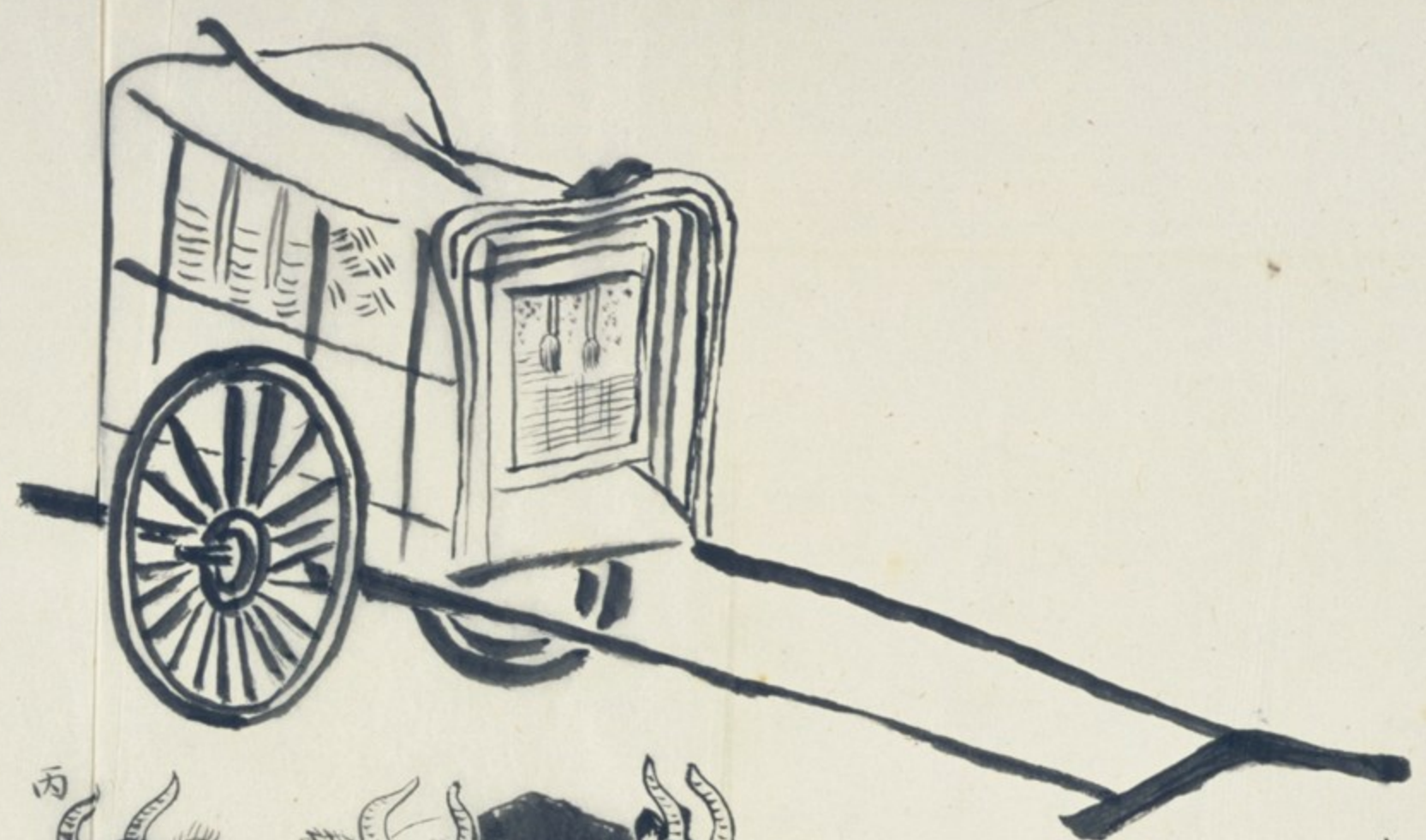
代崩御ノ際御葬キノアルヲ以テ之ヲ下サル、
車トナリタルナリ牛ノ装束モ下サレタルカ圖中
蓮華斑ノ如キ裝飾モ下サレタリ大紐小紐厚繻等
高價ノモノナリ御用牛ハ四頭ナルガ内二頭ヲ下
サレ養育料トシテ云米十六石下サレタルガ今明
治三十年七月二日英照皇太后ヲ奉葬シケル牛モ
又先例ニ準據シテ下サレタリ 牛名 あめすだ
丸 せこしまだら 二頭ヲ拜受シ一頭ヲ自家ノ
農用ニ供シ一頭ハ同家ノ其飼育ス
あめすだ丸ハ銘簾ニテ銘色ニ白線アリ簾ヲ懸ケ
タルカ如シ せこしまだらハ脊斑ニテ脊ヨリ
左右腹部、薄紅色ノ毛線通ズ一名蓮華斑ト稱ス

四頭中ノ最上位ニアルモノ黒ノ四ツ白ナル所腹
ノ白斑アル所ナド威儀アル様見ラル、ナリ此ノ
二頭往古ハ司人ノ手ニ入ルヤ即時使役ヲ止メ從
五位ノ宣下アリ丹波守近江守ノ叙任アリシカ今
四ハ其ノ事ナカリシ外ノ二頭ヲモ下サル、昔達
セラレシヲ森氏コレヲ碎シタリ
附言一頭位牌斑ナルモノハ前額ニ斑紋アリ温
容ヲ具フ 一頭くろ即チ純黒ノモノニテ全身
漆ノ如シ猛威アリ是ハ豫備タルモノトス
是善ノ牛ハ常ニ多クアルベクモ思ハレズ古ヨリ
云フ御大喪ノアル毎ニコノ四頭ハ日本中孰レノ
地方ニカ産スト故ニ御大喪ノ發表アルヤ其司人

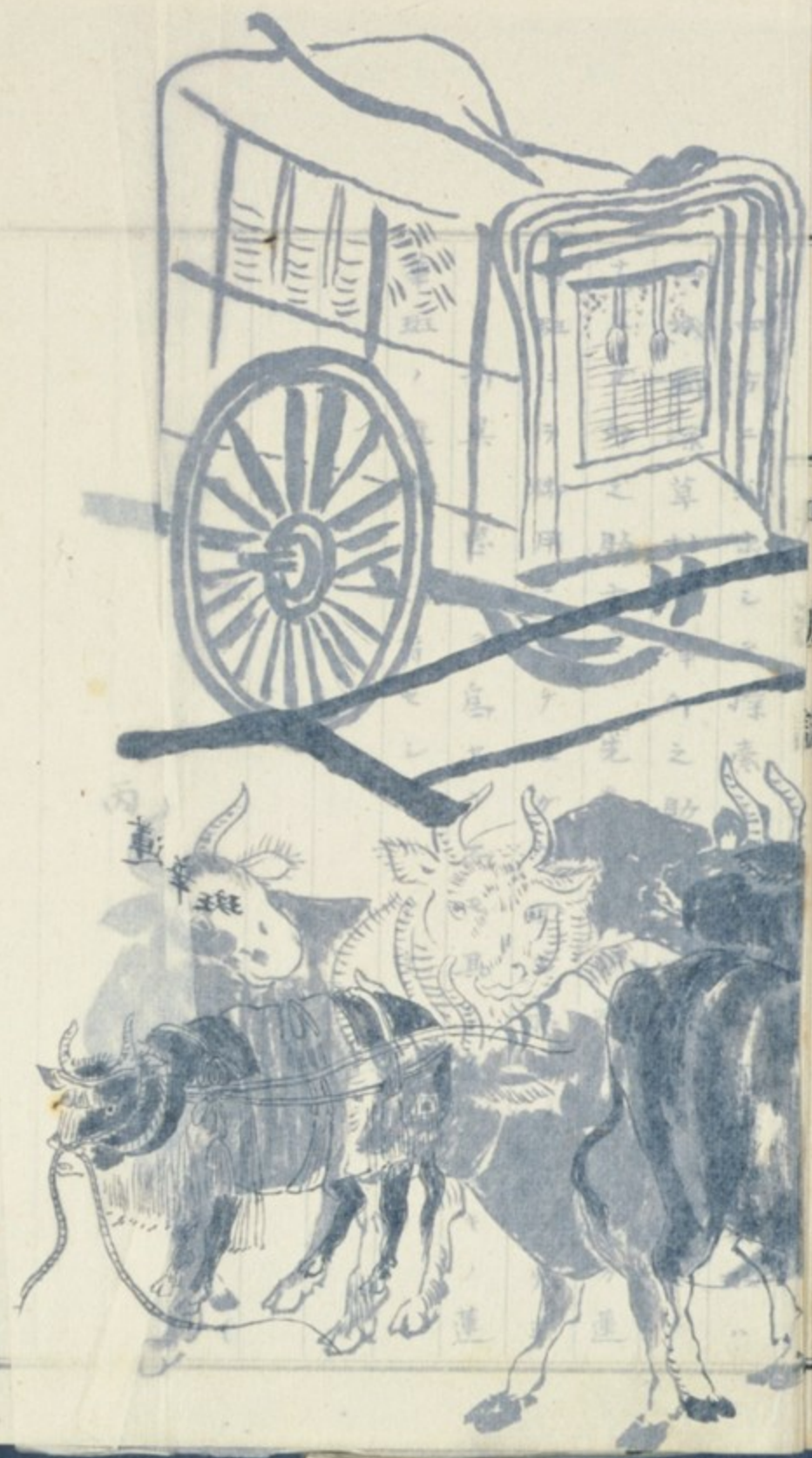
牛
岐
志



丹波 諸
 八四方ニ派出シテ探索スルナリ今回ノ蓮華斑ハ
 山城國深草村中澤外之助方ニテ祭見シタルモノ
 ナルガ如ク之助方ハ先帝崩御ノ際ニモ飼牛ガ蓮
 華斑ニテ御用ニ立ケシカ今回モ亦コノ事アリシ
 ヨリ奇異ノ思ヒラ爲セリ而モ其ノ家ハ先キノ蓮
 華斑ノ種牛ヲ飼育セシニハアラザリシナリ



京都府立総合資料館所蔵



舊式ノ通りナレバ願ハズトモ下サル、ナルモ御
 一新ニテ舊規ハ多ク廢却セラレタルヲ以テ御葬
 式相習ミタリトテ忠太夫ヲ呼出シ下渡サレ、哉
 否覺束ナキヨリ忠太夫ハ直ニ上京シ御葬式掛リ
 ハ出願ヒタルニ大葬便ヨリ難聞届トノ指令アリ
 忠太夫大ニ落膽シ自家由緒ノ廢滅ニ歸スルヲ嘆
 キ走リテ泉涌寺ニ赴キ之ヲ長老ニ謀ル長老ハ之
 ヲ憐ミ御葬式後從容大葬使長官ノ親王ニ話シ奉
 リシニ升ハ最易キ事ナリトテ直ニ下賜アリタル
 ナリ
 古例ニハ御葬式途中ニ尾籠ノ下ナカラシメンガ
 爲ニ胡麻ヲ以テ飼養シ糞セシメズコレガ爲ニ御

用後早ノ預ツ故ニ今四ハ每頭麥六升ふすは六升
千草三貫目胡麻三合食塩少許トヲ給セリ故ニ今
日ニ至ルモ尚存命セリ
右御葬式ハ明治三十年二月七日ナルガ記者カ此
ノ牛ヲ見タルハ二年ノ後ニアリ
後日之ヲ畜牛家ニ聞ク位牌斑ハ前圖ニ示セル兩
牛ニミテ額面ニ長角白色アリテ位牌ヲ額頭ヨリ
鼻端ノ間ニ置キタルニ似タルモノヲ云フ 和牛
ニハ少ケレド洋牛ノホロスタン種ニハ柱々是ア
リ今ハ價值次第之ヲ買フモ昔ハ之ヲ嫁フテ廉直
ナレド捨テ、顧ミ不故ニソノ類少カリシナリ和
牛ニテモ之ナキニハ非ルナリ其ノスタレト云フ

ハスベアカト云フモノニテ赤黒ノ色ガ相交ルモ
ノ是亦和牛ニ往々之アリ前文ニ示スカ如ク御大
喪アル前表トシテ不思議ニモ是ノ種カ描フテ産
スルト云フ譯ナラスト

院内ノ孝子國藏トカナ 京都府廳ノ下文ヲ左ニ録ス

丹波船井郡第三區院内村 生田國藏 十七年三月

其方事幼孩ニ初産母子難ル父重長並ニ祖母た
ねニ養育ニテ漸ク生長少歳ニ及テ方難産ニ上
去ル由今午次父重若不計病ニ罹リ翌七年九
月遂ニ歿ス其妻父存生中分胎一日も未急殊
ニ祖母たね又昨八年一月ニ老病ニテ善名院
盲目ト成リ身折不自由ニ付命ハ晝夜懇切ニ世

丹波 志

活友一着病に暇ゆかると啓るく日産稼に出
て其侵蝕を以て病人に嗜好を要求せざるの中
より多原く心を盡し少歳本年一月祖母た叔に
去り後今日に至り家業を以て出精し姉弟睦を相
愛し行状を發段進傍にて感賞を以て逐お少言
おし事い仍命を賞金五拾銭下給の事

明治九年十月

京都府

丹波郡井原町三區渡田村 生田國藏 姉 二加子
其方事幼孩に御愛母子離れ父重吉并に祖母た
叔に養育して漸く生長少安之存多方針能く上
去り明治十年正月父重吉不計病に罹り翌七月九
月遂に逝去の事父存生才少抱一口と是急殊に

祖母た叔又昨一月より先病うて多言養育
目と知り不自由にして晝夜懇切に看護し
着病に暇中國蔵と啓るく日産稼に出て其侵蝕
を以て病人に嗜好を要求せざるの中より多原く
心を盡し少歳本年一月祖母た叔に去り後今日に
至り家業を以て出精し姉弟睦を相愛し行状を
發段進傍にて感賞を以て逐お少言おし事い仍
命を賞金五拾銭下給の事

明治九年十月

京都府

飛行場 京都ノ飛航家安井庄太郎、院内野二十万坪ノ飛行場
設置ニ着手セリ 大正十年

京都府立総合資料館所蔵

富本村	大字	屋賀	上屋賀	青戸	観音寺
西田	北廣瀬	刑部	氷所	日置	明迄二十
二年調査	六百二十戸	三千三百五十二人			
村名ハ富ノ莊ニ採ル富莊ノ所在ハ今ノ刑部邊ナル					
バシ而シテ其ノ小山モ此ノ邊ニアルバシ小山ハ					
丹波名勝ノ一ニシテ和漢三才圖繪ニ出ヅ大江匡					
房ノ歌アリ曰ハク					
柳系のむしとほろをけりいづハミり山子久八とをこき					
屋賀村高三百二十九石九合	文久度	龜山領			
観音寺村高二百三十二石五斗	同				
内	百六十石一斗八升	准后御料			
	三十七石三斗二升	龜山領			

富本村志

二十五石	上賀茂社領
十石	下鴨社領
二石一斗五合六勺	准后御料、上納
一斗六升二合	小御取 同 上納
北廣瀬村高二百三十一石二斗三升六合	文久度 龜山領
水所村高八百九十二石二斗七升九合	同
内二百三十三石一斗八升一合六勺	仙洞御料
六百五十九石九升七合四勺	御代官所
青丘村高百九十八石三斗	文久度 龜山領
西田村高四百五十九石六斗五升六合	同
内三百九十三石七斗四升	御代官所
六十五石九斗一升六合	愛宕社領

日置村高六百四十三石七斗九升六合	同
内二百二十七石七斗二升一合	准后御所
百九十三石九斗一升八合	仙洞御所
二百二十二石一斗六升	鳴瀬左衛門知行
刑部村高二百八十二石二斗四升六合	龜山藩領
此ノ村モ亦大字トナリテ古稱ヲ存ス允恭天皇二十年癸丑春二月忌坂大申媛命ヲ立テ、皇后トス	
刑部ヲ定ムトアリ刑部ハ忌坂部ノ畧語セルナリ	
今ヤ一轉ヒテをさべトナル	古ハ標代民アリ之
ヲ御代ヲ標表ス民ト云フ子代民ナド、モ唱ハ皇	
后皇妃ニテ皇子持タセ玉ハマ御方々ノ名ヲ後世	
ニ傳ハ以テ無恥ノ御志ヲ慰メ奉ラント其ノ御名	

日置村
西田村
青丘村
水所村
北廣瀬村
上賀茂社領
下鴨社領
准后御料、上納
小御取 同 上納
文久度 龜山領
同
仙洞御料
御代官所
愛宕社領

ヲ取り一部由緒アル人民ニ冒ラセテ名象ラスル
 古史ニ見エ此ノ刑部モ其ノ子代ノ民ガ住居シ
 斗タル地ニアラザルカ百濟王酒君ガ刑部トナリ
 タルトモアレバ或ハ其ノ縁故モテ名ヲ命ケタル
 モノカ 秦川勝ノ功ヲ賞シ桑田船井何鹿保内ニ
 地ヲ賜フ依テ野々村ニ住シ又刑部ニ處ルトノ文
 アリ古史ニ見エ此ノ邊ニ川勝姓多クアルハ蓋ソ
 ノ由緒ニヤ

青戸村 高百六十二石三斗 此ノ年貢米 米納
 三石二斗八升 白豆二十石四斗 村高呼聲ノ斯
 クノ如クニシテ其ノ實收ノ少キハ故アルナリ著
 者曾之ヲ代官某ニ聞ケルトアリ曰ハク龜山領五

萬石ノ内ニテ今ニモ七村トナラントスルモノニ
 個所アリ一ハ船井部ニアリト此ノ村ヲ作セルナ
 リ

田三町八段八畝歩 畑田六町一段三畝歩 畑十
 四町二段歩 山林十三町一段餘 宅地一町八段
 餘 合計三十九町八畝歩餘 (畑田トハ水隈面ニ於テ畑其ノ
 實ハ田十八モナラズ)

收穫米百九十七石餘 維新後富本村トナリ京都
 府ニ編管セラレ畑田ノ丈量アリ改正セラレタル
 所左ノ如シ

地租金百五十二圓 此ノ田四十一町二段三畝歩
 餘 畑七段五畝九歩 山林八町一段二畝歩 宅
 地三町五段八畝歩餘 合計五十一町七段餘 此

丹波志

收穫米千の六十石トナリ地ニ於テ十四町六段ニ
畝餘ヲ増シ米ニ於テ八百の三石餘ヲ増ス
維新後政府ヨリ命ヲ下シ村々落々ヲシテ丈量セ
シメタル結果往々此ノ如シ此ニ於テ隱田零地モ貢
田租地トハナレリ政府自ラ之ヲ施行セズ具ノ方
法ヲ人民ニ授ケ人民ヲシテ丈量セシメタルハ怨
府トナラザル良手殿ナリシ古来ソレガ爲ニ竹槍
席旗ノ擾アリシハ枚舉ニ暇アラズ維新後テサヘ
伊勢ニ百姓一揆アリテ貢租百分ノ五ヲ百分ノ二
半トナリシナドノ丁モアリ竹槍で一寸ほり出
ニ分五厘ノ狂句出テ来リタル時ノ丁ナリ
明治七年川勝瀬平翁没ス年齒七十五左ニ具ノ事

歴ヲ掲載シ殆ト亡ビントスル村民ヲシテ蘊息セ
シル右ニ示セル如ク隱田ヲ公田トシ村是ヲ興シ
タル緣由ヲ語ラシ
翁ハ青戸貧農ノ子ト生まレ人ト爲リテ農業ノ辛
慘ニシテ利少キニ感ジ其ノ家窶キ以テ父母ヲ養
フ資スラ無キヲ慨キ之ヲ他村ニ較ブレバ青戸ノ
農ノ辛キ其ノ幾倍ナルヲ以テ責メテハ他村ト比
肩シ得ラル、迄ノ村是ヲ興サバヤトノ動機ヲ青
年時代ニ萌芽シタルゾ頼モレキ茲ニ於テ小字ニ
十代加賀杭依見黒塚當木三十町計リノ荒廢山地
ニ目ヲ著ケ之ヲ踏査スル數十度水涼ヲ尋ネテ深
山幽谷ヲ跋涉スル數十度謀ルニ同志無ク舉ゲル

丹波志

二資金無シ而シテ其ノ志ヤ益々確シ偶々明
治維新百廢多ク興ルノ運ニ遭遇シ其ノ志ヲ貫徹
セント奮然起ツラ水源地ヲ索ノ東溪西谷苟モ水
聲ノ聞ユル所縛ネザル無ク遂ニ五里ヲ間テ、山
城國堰城村大字越畑ニ入り一線水路ヲ發見ス此
ノ時ニ當リ政府ハ銳意治ヲ求メ民利ヲ興スニ汲
々たり翁ハ此ノ機失フ可ラズトシテ時ノ領主龜
山藩廳ニ向テ前途有望ナルトヲ陳ジ其ノ許可
ト起エトヲ併セテ請願セリ藩論コレヲ納レント
スルニ北東田郡苜生ノ開墾事業ツノ效ヲ奏セズ
工費ヲ徒消セルニ鑒ミテ躊躇ス翁ノ苦悶勃發シ
幾度カ足藩閣ヲ越エ士家ニ趨キ朝請暮願其ノ家

ニ歸ラズシテ狂奔ス精神疑リテ藩主ト重臣ヲ勤
カセ漸ニシテ嘉納セラレバ藩吏ヲ請ヒ村人川勝
儀平川勝五郎右衛門ヲ誘ヒ實地ノ踏査ヲ爲セシ
ニ一患忽地ニ起コリ之ヲ沮止スル者アリ并ハ南
栗田郡ナル山科村民ノ反抗ニゾアル數十人隊ヲ
爲シ翁ニ迫リ其ノ計畫ヲ止ム曰ハク其ノ地ヨリ
其ノ地ニ至ルノ水路ニ於テ水溢ル、トアレバ吾
等ノ村ハ大害ヲ蒙ルベシ疾ク其ノ事ヲ休メヨト
翁聞カズ一夜竹槍獵銃モチ具ノ家ヲ圍ミ翁聞カ
ザレバ翁ノ家ヲ屠ラント言フ翁出デ、其ノ巨魁
ニ面シ其ノ有利ニシテ無害ナルヲ縷陳スルモ及
抗愈太甚シ乃己ムヲ得ズ之ヲ慰諭シテ歸ラシメ

テ翁ノ志拔クベクモアラズ即時ニ藩カヲ借ルノ
一策ヲ案シ奔リテ龜山ニ赴キ藩主ニ謁センヲ
乞フ當時藩主ノ威尚ホ熾ニシテ一平民ヲ以テ
之ニ面スルハ容易ナラザルモ遂ニ許サレテ具ノ
利害方途ヲ面陳スルヲ得藩ヨリ役人ヲ出張セシ
メ藩カヲ以テ説諭ヒテ及對ノ輩儕ヲ屈服セシメ
初メテ獄入ノ式ヲ舉行ス之ヲ二年七月十九日ノ
事トス明治三年良田二十三町六段九畝灌溉意ノ
如ク行ハレ秧苗青々トシテ榮育スルヲ見テ翁大
ニ喜ビ村人ノ并躍スルヲ以テ畢生ノ娛樂トスト
言ヒ寸土モ取ラズ些報ヲモ受ケズ故ヲ以テ貧窶
ソノ身ヲ終ハル猶ソノ幼時ニ異ナラザルハ慈ム

西谷
池紀
念碑

地無灌溉之利土壤多荒廢矣此昔日之青戸也川勝
瀨平君有慨焉建議鑿池之策請之龜田藩廳得允
可明治二年起工鑿池於西谷築堤貯水新開石良田二
十町閱日月殆二年告竣青戸新田是也於是芒種之後
水聲激然漲滿渠之間秋成之期觀家々穰々之收穫
此今日之青戸也村民皆以手加額曰瀨平君之遺惠
不可忘也遂相與謀建碑彰之以垂後昆云

明治三十九年三月
上野佐壽撰
谷平吉書

ベシ明治三十九年翁ノ徳漸ク村民ニ仰ガレ碑文
成リ祭典行ハレ藩主ヨリノ助資金數百十圓ハ已
ニ二十三年ヲ以テ京都府ニ返納ス其ノ出所ハ皆
其ノ新田ヨリ獲タル利子ヨリス
長洞穴 小丘ノ洞ヲ穿ツテ觀音寺部落ニ達ス數
十百間ノ距離アリ維新前ニハ青磁左衛門藤綱ノ
穿リタルモノニテ立入ルモノニハ崇アリト言ヒ
這入ル者ハ無カリシガ開テ行ク世トナレルヨリ
之ヲ探査シタル人アリテ陶器刀劍ノ破片ナド巨
多掘リ出セリ其ノ人ノ言ハク青戸ヲ青磁ト書キ
タルヲモアリシヨリ臆説ノ出テ来リタルナラン
丹波ニハ所々ニ斯ノ如キ穴アリ人造ノ石窟モア

丹波
破
志

所ニハ六疊ヲ敷クベシ云々青砥藤綱ハ先世以来
 伊豆國大場ノ住人ニテ大場十郎近郷ナル者承久
 ノ役ニ宇治ニ戦ヒ功アリ録倉ヨリ上総國青砥莊
 ヲ勅賞セラレテ青砥ヲ氏名トナセシトニテ丹波
 ニ具ノ事歴ノアリトシモ覺ヘズ不文ノ世ニハ往
 々簡様ノ混濁ヲ免レズ曾我部村大飼ノ部具ノ他
 所々参考スベシ
 産物 硯石 中實下實
 城址 村内ニアルモノ 大國山屋賀等ニ存ス
 丹波少將一時コノ邊ニ在陣セシト云フ荒木山城
 守屋賀ニ城主トナリ明智氏ニ亡ボサル墜道ヲ存

不古刀劔類ノ土中ヨリ顯ハル、往々在リ
 日置ノ龜峰山護國寺 開創ハ天平年間ニシテ國
 分寺ト其ノ時ヲ同フスト云フ今ハ普洞宗ニシテ
 正觀音ヲ本尊トス
 西田ノ布團話 明治二年著者ガ門人ノ家ヲ訪フ
 トアリ之ヲ西田村ノ川勝某トテ庄屋ナリ懇ニ止
 メテ一宿セシム臥床ニ新蒲團ヲ敷ク手折木綿ニ
 シテ綿厚ク入レテ軟ナリ著者臥シテ頗快キヲ賞
 ス老人坐ニアリ曰ハク此ノ夜具モ今ハ不用ニナ
 リマシテ家ノ道具トナリマシタガ世ガ世ナラ是
 レハ疾ニ小堀ハ持ツテ行クノデス世カ換ハリマ
 シテ有リ難イトデス 其ノ譯ハ 左様デス元来

丹波
 城
 志

此ノ土地ハ天領幕府直轄デシタノデ代官小堀敷
 馬ノ支配デス故年未ニハ何ナリトモ土地ノ産物
 ラ賜ルノガ例ニナツテ居マシタ イエニ數馬
 殿へ上ケルノデハ無イ手代衆へ上ケルノデス手
 代ノ内ニ元締ト云フ役ガアリマシテ地方ニ對シ
 中々勢ガ強イノデス 左様布團一流ハ新調シテ
 年々持ツテ参リマス 勿論上納米金ノ外デス
 之ヲ出シテ置キマスルト年貢米ノ小言モ少ナシ
 不作年ノ免引モ容易ニ出来マスノデ イー上最
 初ハ難穀少キト新綿少キ位ヲ土産トシテ持参シ
 タノジヤト祖父ニ聞キマシタ ソレガ一枚ノ布
 團丈持ツテ行ク 御機嫌ガ好イ 裏地手折ヲ添

ハル 猶更受ケガ好イ 遂ニハ表地ヲ載セテ
 御氣ニ入ルヲナ所カラ遂ニ一流ツ、持参スル
 トナリマシタノデス 御一新ハ有リ難イモノデ
 御年貢以外ノ事ハサツバリ御廢シニナリマシタ
 其ノ妻傍ニアリ語ヲ添ヘテ云フ アンナ引キ合
 ハヌトハゴザリマセヌ綿ヲ撰ルモ表地裏地ヲ織
 ルモ六ツケ敷イテデゴザリマシタ 今ハ氣樂ナ
 デゴザリマス
 著者曰ク私ハ御存ビノ通り幕臣ノ侍分デシガ暮
 シ方ハ小堀ノ手代ニ及ビマセンガモ理テス手
 代ハ三石ニ人扶持一人扶持ハ一日
云米五合ヤソコラデ吾々ノ百
 石ニ百石取リ以上ノ生計ヲ立テ、耳マシタノハ

母
 成
 志

全ク此ノ布圍ノ御話デモ判リマス 此ノ話ニテ
夜半ニ至リ具ノ夜具ニテ熟眠シ晨ニ至ル十一月
今日十二 二十三日ナリ
諸國御料ノ貢米年々ニ減ジテ僅ニ二ツ八分九厘
トナリ御料ノ百姓カラ進ラセル所昔ニ換ハレリ
ト聞コエネド御代官ノ手代ナド云ノ者共ノ各具
ノ私ヲ營ミシ故ト相聞コエ正徳二年七月ニ至リ
幕府ハ勘定吟味役ヲ設テ正康ノ聞コエアル勘定
組頭役杉岡彌太郎萩原源左衛門二人ヲ以テ之ニ
充ラヌ翌年御料ノ貢米凡四十三萬三千四百俵ヲ
増シ而シテ百姓ノ方モ相悦ブテ大方ナラズ官民
共ニ幸福ナリシモ末ノ間ニテ數十年ノ後ニハ又

モ手代共ノ私ヲ營ムセトナリテ幕府ノ末路ヲ邊
レリ
勤王藝者 祇園町ノ君尾實名中西君ハ弘化三年
十月此ノ村ニ生マル 父ハ狹容ニテ西田ノ友ト
呼バル本名中西友七園部藩ノ入レ方元締トナリ
妻袖ノ間ニ此ノ君ヲ生ム生レテ美形ヲ具フ博徒
ノ巨魁出ヌ安ナルモノ於君ヲ己カ物ニセント附
キ纏フヲ友七ニ認メラレ大ニ辱カシメラレタル
ヲ恨ミ兼ネテ友七ノ勢力ヲ嫉ミ居ル輩ノ勝次ニ
謀リ二人シテ無慘ニモ友七ヲ切害セリ女房於袖
ハ於君ヲ携ヘ京都建仁寺町四條下ル所ノ槍術家
江良七造ノ食客トナリ於君ニ遊藝ヲ習ハセ文久

町
成
志

元年十八ノ春祇園町新地ノ鳩村屋ノ君鶴ヲ妙分
トシ初メテ左禰ヲ取ル身トハナレリ爾後嘉永安
政間京都ニ天下有爲ノ浪士藩士等來往シ常ニ狹
斜ノ地ニ離合集散シ密々國事ヲ談スルヤ君尾ハ
其ノ間ニ周旋シ高杉晋作久坂玄瑞桂小五郎(木戶孝允ノ前名)
西御隆盛山縣狂助(有朋)品川彌二郎井上聞太(馨ノ)
桐野利秋土方孫右衛門(久元)伊藤俊次(博文)等ノ諸
元老ニ多大ノ勲負ヲ受ケテ勤王藝者ト呼ハレタ
リ今ヨリ五年前(大正六年)廢業シ祇園町ノ自宅ニテ
實子辰次郎夫婦ノ手ニテ老後ヲ養ハレ居タルニ
一昨年来老病ノ爲ニ常ニ褥中ニアリ遂ニ大正六
年二月十七日午前六時白梅で一才一盃ニ死出乃旅ノ

辭世ヲ残シテ没ス享年七十五
故老ノ説ニ池邊ノ氷室トテ延喜式ニ出テタルハ
此ノ所ノトナリト申ス之ニ由リテ氷所ト申スノ
デス此ノ御由緒ニテ古來朝廷仙洞ノ御領ナノデ
ス云々
小林幻菴和尚名ハ駒太郎明治初年著者ハ栗田郡馬路村ニ浪人トシテ寄寓ス
ルヤ祖父ニ橋ヘレテ末ル時二年十有二年ニシテ著者ガ美濃ニ歸農スルヤ和尚ヲテ
京都入り春日潛庵ニ學ビ國字ヲ戸田保遠ニ問ヒ高山彦九郎高我ヲ慕ヒ東京ニ
赴キ廣應義塾ニ入り海軍志官ヲシテ欲シ眼疾ヲ以テ果テ明治九年薩摩ニ遊ビテ
西郷隆盛ヲ訪フヲ通フ能ク桐野利秋ニ遇ヒ天下ノ形勢ヲ論ギ西南後起ヲ及ビ
飄然此地ニ還リ歸晦數年大ニ悟ル所アリテ相國寺ニ赴キ獨園禪師ニ師事シ明
治二十年遂ニ法号トナリ名ヲ全信ト改ム獨園禪師ノ東北巡錫中基督敎徒同

志社擴張ニ際シ校地ヲ相國寺中ニ求ム全寺僧徒賣却ノ議ヲ決ス幻奪其ノ不
 可ヲ唱ヘ自奮シテ之ニ當リ事遂ニ久通官朝彦親王殿下ノ台閣ニ達シ議漸ク止
 來殿下ノ恩遇ヲ蒙リ禪師遷化後相國寺ヲ辭シ京外田中村新田ニ庵ヲ作リ住ス
 四十三歳病ヲ得テ此地ニ歸住シ一小庵主トナリ復出テ大正五年重病ヲ得テ六十
 三歳ヲ二期トス幻奪余信塔下ノ人トリ村内墓地ニ葬ル著者ヲ禪海ノ一滴ヲ嘗
 シタルハ實ニ幻奪其人アリ幻奪ノ家ハ造酒家アリ安政元年ニ生マレ早ク父ヲ喪ヒ
 母ト祖父トニ慈育セテ異父ノ志合ハズ幼ヨリ老ニ至ラズテ艱苦其ノ身ヲ經テ
 丹波ニ於テ崎人ヲ與テハ第一指ヲ幻奪ニ屈セシ

胡麻郷村	大字	保野田區	志和賀區	胡麻區
上胡麻區	畑郷區	明治二十九年調査	五百	
二十三戸	二十七百三十三人			
ソノ領主ハ	上胡麻ノ小字大戸	天領	二十餘	
戸	胡麻區ノ小字熊ノ股	旗下某	三十餘戸	
下胡麻	嶋蒲左衛門	其他ハ	園部藩	
ソノ耕地ノ多キヲ	胡麻區トシ上胡麻志和賀之ニ			
次キ保野田ニ至リ	畑郷ニ至ル	畑郷ハ	樵多シ	
志和賀神社	式内	月讀命ヲ祀ル		
石窟	保野田ノ小字家田ニアリ	口碑ニヨレバ	他	
ノ石窟ト由緒ヲ同ク	シ古人カ天降ノ火ヲ避ケン			
所ト云フ	二個アリ	山姥ノ住セシ所トモ云フ		

胡麻郷村

胡麻郷村

牧數六ツ日
 國爲余野
 子國甲賀ノ牧
 國爲水ノ牧
 子國甲賀ノ牧
 國爲水ノ牧
 子國甲賀ノ牧

胡麻野 原野中標杭アリ界線ヲ示ス東ノ方ヲ胡
 麻野トシ東西十七町南北十二町ノ所アリ十町ノ
 所アリテ參差ス所々開墾ノ跡アレ氏滋潤ノ源ナ
 キヲ以テ之ヲ拋擲ス新踏故路原中ニ並行シ或ハ
 錯綜ス躑躅叢生シ花時一抹ノ紅霞人目ニ映ス地
 僻ナルヲ以テ世ニ知レズ
 竹細工師四五家アリ是ハ高原村ニ屬ス今(三十年)ヨ
 リ四十年前砂糖ヲ製セレ者アリキ
 延喜式ニ 胡麻ノ牧ハ諸國ヨリ所貢馬牛各放件
 牧隨事繫用 回飼御馬五匹 左寮 毎年預前五月
 五日節差專當國牽連 トアレハ此ノ地ニテ馬牛ヲ
 養ヒ馬ハ國ニ供シ牛ヨリハ乳ヲ取り納貢セシモ

胡麻野村

ノナル丁天武天皇記ノ貢蕪ニテモ知ラル終論貢
 蕪ノ部ヲ着參スベシ
 胡麻牧ハ駒牧ノ訛リ遂ニ村名トナリシナラント
 云フ然ルニ似タリ胡ハ清音ニテ讀ムベキヲ胡粉
 胡麻延胡索余胡ナド濁音ニテ讀ミ來レルヲ以テ
 爾カ訛レルナルベシ
 宇野豊後守ノ裔孫當地ニアリ豊後守ハ南來田郡
 山本ノ城主ナリシガ天正年中明智光秀ニ攻落サ
 レ歿死シ子孫當所ニ墮墜レ農ニ歸セリ
 秀林山龍澤寺 曹洞宗 船井郡四本寺ノ一ニ居
 リ末寺ナセアリ檀家百四五十寶物様ノモノ無シ
 之ヲ和尚ニ問ヘバ答ヘテ云フ永平二十二世開基

胡麻野
 史志

以来漸七百年有リト事ハ無シト 開山 伊山
 徳照禪師 大徳ノ僧ナリ
 噴火跡カ 四十年ヨリ四十一年ハカケ鑛道工事
 起ル 砂石ニセノンドラ混和スルニ付テ細砂ヲ
 檢スルニ灰様ノ土質カ粘着スルニヨリ其ノ用ヲ
 爲サズ故ニ之ヲ遠ク他村ニ仰テトナレリ 談
 技師曰ハク是ハ噴火抗ニ見ル砂土ナリト 素
 燒キノ小瓶一個出デタリ
 産物 米 麦 蕪 蘭筵 木材 薪炭 松茸
 新 茶 礦物ニテハ碯 副業養蚕
 海拔 六百五十七尺ノ所ニアルヲ以テ避暑好適
 ノ地トス

園部藩開拓ノ遺址アリ
 上胡麻村高四百三十七石一斗四升四合 園部藩領
 下胡麻村高六百五十五石五斗九升八合
 内 貳百五十三石五斗九升 同
 内 三百五十二石八合 嶋孫左衛門知事
 中胡麻村高百三十七石七斗三合 園部藩領
 志和賀村高四百五十九石四斗七升六合
 内 三百 森知行所
 百五十九石四斗七升六合 園部藩領

町
 皮
 志

新庄村

新庄村

大字

船枝

室橋

山室

野條

池上

諸畑

地勢 東方ニ富本アリテ南位ニ直リ西北ニ山河

アリ郡ノ東部ヲ占メテ地味比較上肥エタリ

明治二十九年ニ於テ戸三百二十六 人一千九百

零四人ヲ容ル

高帳 龜山領 山室村二百四十九石一斗九升五

合 池上村二百七十石零一斗九升 内百石 准后御

一斗九升 御代官所外ニ小物成ト山役 二斗二升九合四分 准后

御所 二石一斗五升。一夕 同六石九斗。五合 坪并敷石 御代官所

室橋村 園部領 五百〇八石三斗一升三合 船

枝村 四百六十九石三斗一升七合 同領 野條村

三百八十五石 内 二百五十九石五斗二升三合七分 准后御所

百二十五石四斗七分六合三分 御代官所

五百。八石三斗一升三合 園部領 畑中村二
 百五十八石九斗七升四合 同領
 山室村、享和四年甲子正月領主龜山藩侯ヨリ藩
 札通用ヲ達シ年賦上納セシムル丁左ノ如シ他村
 高ニ應ジテ多少アリ畧ス領主タレドモ正統外ノ
 モノニ係カル故ニ御頼上納トハ云ハルナリ

御頼上納通 山室村

一銀札貳貫八百七十五匁九分
 内銀札二百四十匁 子二月九日上納 同百匁 三月廿四日
 上納 同百匁 四月廿六日 上納 同百匁 六月晦日 上
 納 同二百匁 九月四日 上納 同五百匁 十月廿五日
 上納 同二百匁 十一月廿九日 上納 同百五十匁

丑正月廿五日 上納 同百匁 四月廿七日 上納 同
 二百匁 五月七日 上納 同二百匁 同廿六日 上納 同
 内金二兩一分代札百四十七匁五分七
 厘トナル 札五十二匁四厘三毛 同百匁 六月廿八日 上
 納 内金壹兩一分二厘此札九十匁七分六厘 同百匁 八月廿五日 上
 納 内金二匁代三十三匁一分一厘六十四匁 同二百匁 八月三十日 上
 納 内金九分替札三匁六厘九分 同二百三十
 匁 同百五十匁 九月廿二日 上納 同二百三十
 匁 五匁九分 十月廿日 上納 内金二兩代百三十二匁四分
 而六十四匁九分替札二匁百三匁五分
 ヲ貳貫八百七十五匁九分

右之通請取申候以上

文化二乙丑年十月廿日 寺本六郎兵衛 印
 山室村庄屋 松本十左衛門殿

金ニテノ返還ハ藩ノ歡迎スル所ニテ民ノ困難ス

町皮志

北原田郡宇津村
 加人尾崎...
 首...
 其...

ル所寺本ハ銀札係ノ役人ナルベシ殿ノ字ハ草書
 ニテ右畧シタル所ヲ書ケリ
 明治四年改村部落合併ノ際ニ調製シタル明細書
 高敷百三十四石六斗一升 元高ヨリ減スル一十五石五斗八升
 段別十九町二段八畝十歩内譯上田八町三段一畝
 十七歩 一石三斗五升盛 分米百十二石二斗六升三合 中田四町二段二畝 一石三斗盛 分米五十四
 八斗六升 下田二町二段三畝二十六歩 一石二斗盛 分米二十六石九斗六升四合
 上畑一町一段四畝九歩 一石盛 分米十一石四斗三升 中畑七
 段六畝八歩 九斗盛 分米六石八斗六升四合 下畑一町八段五畝十
 六歩 分米十四石八斗四升二合 屋敷七段四畝廿五歩 分米七石四斗
 八升三合
 新田五口合高十九石八斗五升六合 納込五石三

斗六升五合四勺
 一大豆一石五斗 米八斗替 納込高ノ内上納 一夫銀
 六十四匁五分 七月極月兩度ニ上納 一山役錢三貫二百
 十八文 七月極月 兩度ニ上納 一小物成掛リ 藁六十束一把
 繩四束一把 蓮八枚 荒糖一石三斗二升 一入
 草 五月初日ヨリ九月五日迄御廩納
 古高百六十一石一斗五升ハ今儀御入用銀掛カル
 制札場御藏井堰井堤神社等ノ免稅修繕費ハ租稅
 中ヨリ之ヲ賦ス 年々差違アリ畧ス
 式内船井神社 船枝ニアリ 祠格ハ郷社タリ 神
 體ハ春日太神トス 祠内ノ石燈籠ニ鹿野森ノ彫
 字アリ鹿野森ハ此ノ邊ノ古橋ナリ誤リテ畧ノ森

宇津村
 史
 志

上表ルカイノ本林
ナリト云フ字
事考者

トシ手腕ノ病人来リ祈ルモ可笑シ 一町田五段
田ノ字アリ五段乃至一町ノ廣衰アル田地ハ此ノ
地締有ノモノナリシトゾ 産出ハ米麦蔬菜ニ次
グニ枿實アリ美濃枿ハ美濃國産ノ乾枿ニ似タル
ヨリ名ヅク核子少ク縦裂シテ切斷セバ一果七十
反ノモノアリ風味佳良口中ニ溶解シテ渣滓ヲ残
サズ 西條枿亦可ナリ前者ニ比スレバ一籌ヲ輸
ス
池上寺ハ池上ノ寺ナリ今ハ池上院ト呼ブ傳ハ云
フ昔時巨蛇アリテ池中ニ住ム時々出テ人ヲ吞
ム土人ノ之ヲ困ミ池ヲ埋ノ蛇ヲ逐フ蛇ガ祟ヲ爲サ
シテヲ怕レテ一寺ヲ兵ノ上ニ建テ因リテ名トス

新庄村

當時六院アリ今其ノ一ヲ存ス間山ハ皇慶阿闍梨
ニシテ書寫山ノ性空上人ガ甥ト云フ 庭前ノ無
枝櫻池上ヲ掩ヒ水花相映ジテ春ヲ飭ル看客年ヲ
逐フテ増加ス 秘藏ノ名硯アリ
如城寺ハ室橋ニアリ巴御前ノ寺トテ名高シ巴女
ノ位牌ニ如城寺殿巴御前大照祖心尼大炊トアリ
寺名ハ戒名ヨリ取りシモノトス少將ト呼ベルモ
ノ巴女ニ召シ使ハレシガ木曾義仲ハ七心巴女ノ
行衛モ定カナラザルモノカテ少將些ノ縁ヲ察ヒ
テ此ノ處マテ落テ延ビ得度シテ木曾殿ト巴御前
ノ進福ヲ修ス朝比奈三郎其ノ志ヲ感ジ田園ヲ寄
附ニタルヲ以テ寺ヲ建テ自身住職トナリテ一生

新庄
志

ヲ終フ巴女か此處ニ住ヘリト聞キ三郎ナ母子ノ
情誼忘レカネ来リ訪ヘリトノ話ハ土人ノ傳テ言
ヘル所ナリ本尊阿彌陀如來ハ義仲ノ守本尊ト云
フ
巴御前ノ墓ハ田間ニアリ荆棘生ニ繁リテ五輪僅
ニ頂ヲ着ル觸ル、モノハ崇アリトテ顧ミルモノ
ナカリシカ墓地モ世ニ從フテ開ケ今ハ墓畔マデ
田トナリヌ
巴ノ守本尊ハ一尺餘ノ觀音像ニシテ福安寺ニア
リ此ノ寺今ハ如城寺ノ管治トナル
帝釋天ハ有名ナル佛像ニテ紫雲山小倉寺ニアリ
庚申サントモ云ヒ庚申参リスルモノ多シ船枝寺

リトモ云フハ船枝山ニ在ルヲ以テナリ本尊帝釋
天ハ和氣清麻呂ノ自作トス口碑ニハ八幡大菩薩
ノ御手作ナリトス光仁天皇ノ寶龜年間清麻呂草
創應仁ノ亂ニ燒ケ本尊ノミ持テ出ケレ貞享年中
再建シテ今ニ至ル左右ノ青面金剛童子毘沙門天
モ亦住作ナリ本尊ハ龕中ニ秘ス傳ニ云フ神道ニ
テハ猿田彦ヲ祭リ佛家ニテハ青面金剛ヲ祭リ道家
ニテハ庚申ヲ祭ル庚申トハ八專ニ入りテ九日月十
リ九ハ易經ニ云フ无陽ニテ陽氣純旺シ金氣強大ノ
日ナルヲ以テ天地萬物ノ氣變革シテ清肅ナリ乾金
至剛ナル故ニ善人ニハ大吉ヲ與ヘ惡人ニハ大惡ヲ
與フ此日コソ改善正路ニ就クベキナリ夫レ帝釋天

丹波
洲
志

ノ有司ニ天一神アリテ三界ヲ巡リ人間ノ善惡ヲ記
シテ帝釋天ニ報告ス其ノ日ヲ天一天上ト稱ス天一
神ノ臣下ニ日遊神アリ天一神ノ天上スル間下界ニ
降り人家ヲ以テ住居トス此ノ神不淨ヲ嫌フ故ニ天
一天上十六ケ日間ハ掃除清淨ニ注意スベシ天一神
ノ天エニアルハ癸巳ノ日ヨリ十六ケ日トス云々
傳ニ云フ清麻呂ハ敬神尊佛靈威ニ感ズルト少カラ
ズ一夕空中ノ異光ヲ詛ノ之レヲ追ヘバ徐々西行ス
十餘里ノ行程ヲ經テ山中ニ入ル俄ニシテ異香ノ有
ルアリ紫雲ノ如キモノ一ハ土倉中ニ入ル隨テ入
レバー先叟馥郁タル香木ヲ捧ゲ之レヲ授ケテ曰ハ
ク此ノ堅木ハ以テ帝釋天ヲ彫ルニ適スト而シテ其

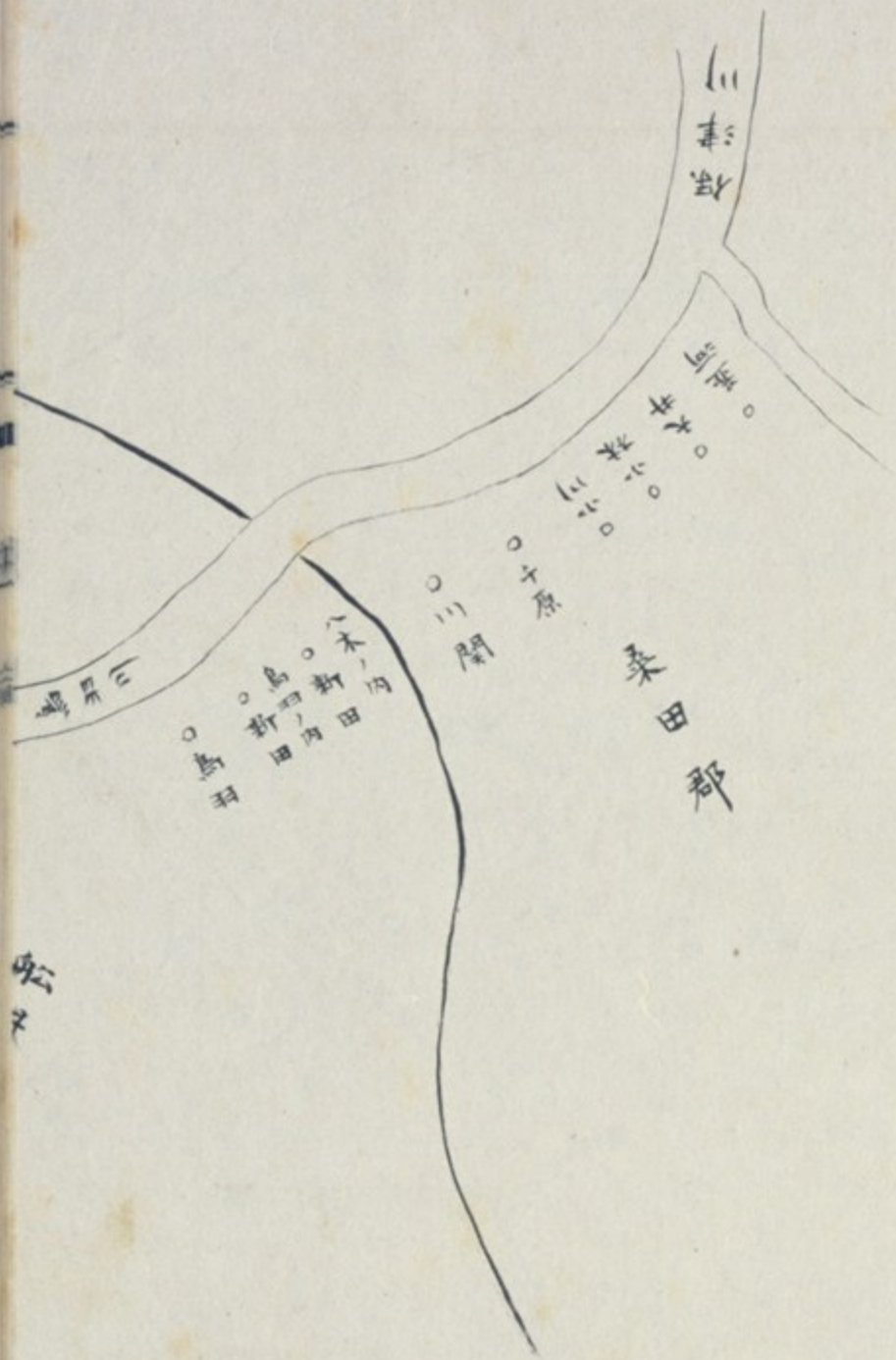
ノ姿ヲ失フ便ソノ言ノ如クス山禰寺名コレニ由ル
無住ナルヲ以テ福壽寺コレヲ保管ス

天降石ハ奥院ニアリ小堂コレヲ掩フ石塊土中ヨリ
其ノ上部ヲ顯ハス是レハ古人ノ尊奉シタル所ナル
モ今ヤ之レヲ以テ流星群中ヨリ常軌ヲ脱シテ来ル
モノトシ宗教外ニ之レヲ見ル須知所ニ此ノ事アリ
テ具ノモノハ博物館ニ入り参考品トナル同一物ニ
シテ或ハ佛法流行ノ兆候品トシテ賽者ヲ呼ビ一ハ
博物學上ノ参考品ニ供セラル鳴呼

讚岐金毘羅遙拜所アリ傳ニ云ヘリ帝釋天ノ像木ハ
金毘羅大權現ノ像木ト同一株ナルニ由ルト

慈閣晚照

園部藩主某侯



玲瓏浮閣倚崆峒霞彩映明殘照中澗水潺湲聲乍咽天
花亂墜晚來風

堰川下舟

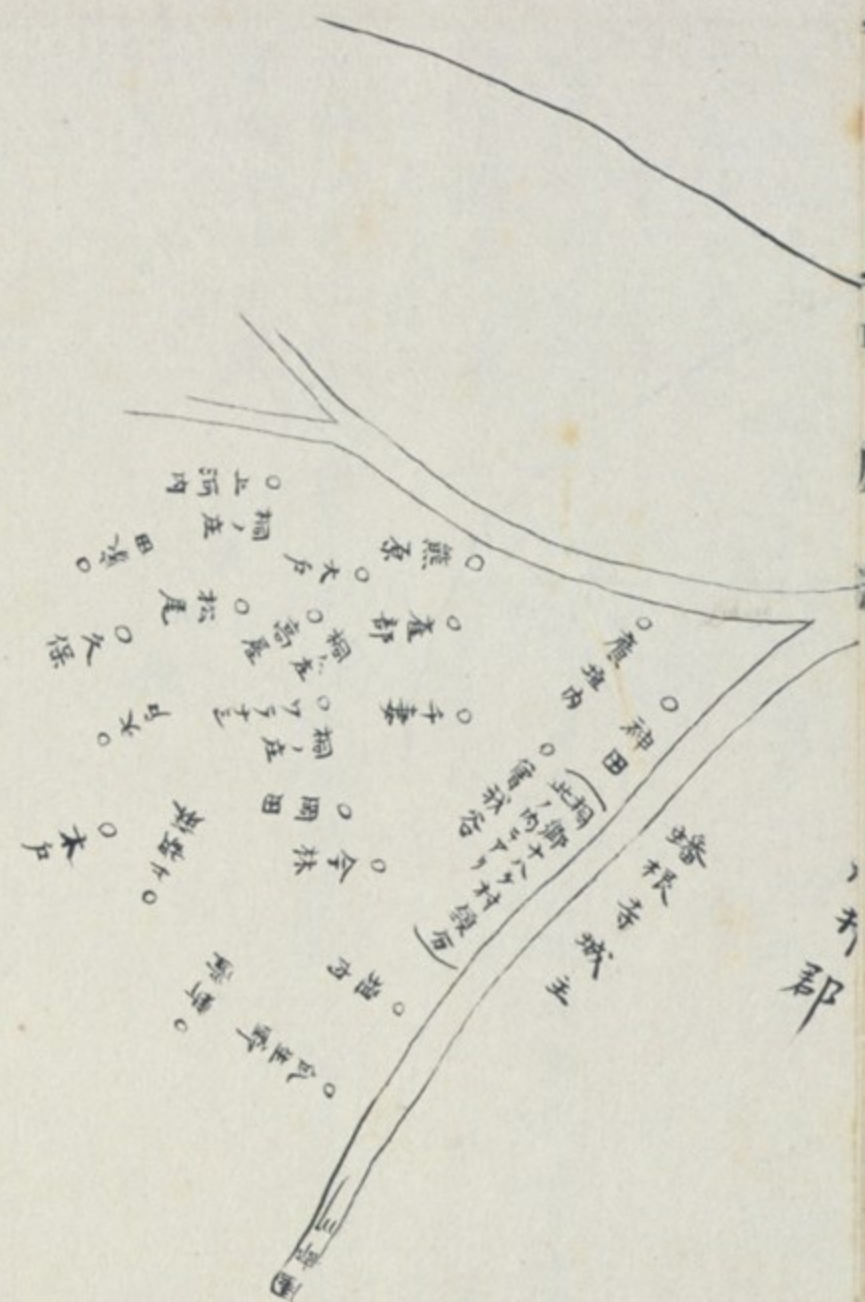
堰川近接紫雲山賈舶相銜碧浪間直向峽中鳴棹急要
時已過幾烟灣

舟枝暮雨

四圍山色喚雲生日暮荒村而未晴草舍炊烟焦遠遠遙
聞歸艇棹歌聲

吉富村

吉富村	大字	木原	室河原	池ノ内	玉ノ升
馬和	八木ノ島	大藪	南廣瀨	神田	廣垣
内	崔部	吉富ハ	舊名ニテ	八木ノ邊ヲ	モ
合稱シ	タリ而シテ	此ノ邊リハ	古名志摩郷ノ	内	
ニ屬スト	モ云フ	明治二十九	年人口	四百十	
一個	人口	二百二十	人		
八木ノ	嶋ハ	本村ノ	東部ニ	アリ而シテ	郡中ノ
東部					
タリ郡	中ノ	地味ニ	於テ最良ノ	部ニ	アリ産物亦
産物					
フテ	饒多	ナリ地ノ	平坦ナル	モ亦郡中	屈指ノ
部					
リ舊	高四	百七	十七石	八斗九	升ニシテ
定免	七ツ	斯			
カル	高租	ヲ納	メテ	人民ニ	苦情ナ
キハ	其ノ	地ノ	膏		
腴ナル	ヲ以	テノ	故ト	知ラレ	タリ地
價	賣	額	壹		



段二百圓以上トナレリ維新前ハ其ノ十分一ナリ
 シ舊府ノ時ニ篠山藩領ナリキ
 蠶豆ハ地味ニ適ス一莢ニ五粒六粒ヲ容ル中ニハ
 ヨリ多キモノサヘアリキ老農謂フ是ハ種ニヨル
 ニ非ズ地味ニヨルナリ此ノ地ニ出来タル多粒ノ
 モノヲ去年ノ種トシテ却テ出来宜シカラズ他村
 ノ一莢三四粒ノモノヲ取り来ワテ栽ウレバ五六
 粒ノモノヲ産出スト併シ他所ヨリハ此ノ地ノ産
 ヲ望ムモノ多シ記者モ亦年々後圃ニ此ノ地ノモ
 ノヲ栽ウ四五粒ヨリ中ニハ六粒ノモノヲ獲
 産物 桑酒ハ宇城端ニアリ隣村八木ノ産物トナ
 リタレド本家ハ斯處ニアリト云フ

久昌寺 南阪ノ山下ニアリ殿主細川右京太夫勝
 元 位牌ニ龍安寺殿後四位下前右京仁榮實公大
 居士トアリ細川氏ノ由緒丹波ニ多レ具ノ管國ナ
 レバナリ
 狐書一幅 千景丹頭鶴 八百十二景白狐朝古書
 トアリ傳ヘ云フ老狐僧ニ化ケ三年間コノ寺ニ住
 職トナリ看經會向葬式等ノ務ヲ執レリ一日忽然
 本性ヲ露ハシ障子ノ破レ目ヨリ抜ケ去リ行衛知
 レズト云フ書體ハ童稚ノ筆カト思ハル狐魅者ア
 レバ来リテ此ノ書ヲ拜セシムルニ忽地醒覺スト
 カヤ丹頭ハ丹頂ノ誤カ或平仄ニ悞ハセンガ處ニ
 セシモノカ果シテ然ラバ朝古ハ聲律ニモ違セリ

丹波
 志

トヤ謂ハシ
坊ト呼ビ又奥ノ坊ト稱スル家アリ氏ヲ廣瀨トス
城山ノ麓ニ住ス城主内藤備前守ノ女コレニ嫁セ
リトテ昔ハ重シセラレ具ノ部地モ維新迄無税ト
レ領主國評藩モ之ヲ優遇セリ
内藤氏ノ故蹟 岩壺山元興寺ハ菩提所ニシテ白
拍子ト云フ所ハ具ノ遊所タリ
車塚 田間ノ一小堆土ナリ相傳フ白河法皇ヲ葬
ル時御柩車ノ上ル能ハサルヲ以テ車ハ此所ニ埋
メ御柩ノモヲ昇キ大内山ニ至ルト或ハ後白河法
皇ノトモ云ハリ(東本梅村大内ノ部ニ出ス)
鳥羽 西村副施行前マデハ獨立村トシテ又ハ名

所トシテ宿驛トシテ有名ナリシガ數度ノ水災ヲ
經過シ且又鐵道布設以後ハ旅人ノ經過全ク絶ハ
往來スルモノハ邊傍商賣ノミトナリタルヲ以テ
軒ヲ連ネタル宿屋モ次第ニ減少シ今ハ普通ノ村
落トナル舊時ハ園部領ニテ
一高百八十九石八升九合 園部領 人家六十戸
旅人宿三戸 半農半商ノモノ多シ(維新ノ際)
古時止波又ハ戸波ト呼ビ又ハ書ケリ上古谿谷壅
ガリ洋々トシテ一大湖ヲ爲セシヤ大山咋命岩石
ヲ切り疏シテ水波山背ノ園ニ注グ此ノ地坡堤ノ
状ヲ爲シタル止波ナリシナラン鳥羽神社ハ式内
ノ止波神ニシテ大山咋命ヲ祭ルモ具ノ因ミナラ

鳥羽
支
志

此ノ地ハ山隘道縁中國部ハ木ノ間ニアリ川流ノ
世木殿田ヨリ来ルモノト園部ヨリスルモノトニ
混合派シテ舟筏湊合スルヲ以テ古来河岸場トシ
テ陸揚舟積スル所ナリ

新古今ニ慈鎮園僧正ノ歌ヲ載ス名所歌枕
ニモ出ヅ

大江山くさね月乃つき夜よのなみみああららりりううね

玉ノ升ハ神子ノ居村トシテ賤視セラル古ハ神明
ニ奉仕スル職トシテ自尊セシモノヲ時移リ勢衰
シテ反對ノ結果ヲ成セシモ是非ナケレ全村譽リ
テ巫節ト云フニハアラテ他村ヨリ斯ク呼ビナセ

シトカヤ他町村ニ神事アレバ之ヲ招クニ一家提
携シテ往キ具ノ支塔装束シテ大鼓ヲ搦テ長男
次男横笛ヲ吹キ婦妻子女ハ白衣紅裳シテ鈴ヲ振
リ舞ヲ演シ一家中ニ樂隊具ハル詣人十二銅ヲ投
スレバ樂隊起コル十二銅トハ鉦錢ヲモ加ヘテ數
十有ニノ通用貨錢ナリ一家ニテ具ハラザレバ同
職人中ニテ相補フ此ノ雇料一定セズ高三百六
十九石六斗六升 園部領

此ノ地ハ山間ニアリテ田地少シ維新前ニ於テハ
餘裕アリシモ今ハ人口ヲ養フテ餘資ナレ一畝金
貳拾圓ノモノ百五十圓マデ騰貴シタリ收穫ハ毎
畝四斗有餘ノ増加セリ

神田高百二十三石五斗 人丘三十階農ナリ
九十八石五斗八升 園部領 二十石菅村淳福寺
領 五石十京高塔婆領 西光寺アルヲ以テ村名
古時ニ高カリシ紀念碑ノ設立近年ニアリ其ノ高
聳シテ人目ニ觸ル、ヲ以テ今復世人ニ知ラル山
隈道ヲ西下スレハ南栗田郡船井郡相界スル所北
川南山逼迫シ而シテ又較平坦ノ所ニ臨ムヤ
乾位ニ當リ長白石標ノ山間樹上ニ露ハル、アリ
テ人目ヲ惹ク是ゾ明治紀念碑ナリ碑高サニ間尖
頭ニシテ上ニテ四角ナル所凡ソ一尺五寸下ノ四
角ナル所凡ソ二尺具ノ下ニ硃アリ又石ヲ疊ンデ
之ヲ持ス此ノ高サ凡ソ一丈五尺ニシテ惣高三間

半上硃ノ周圍ニ百六人ノ姓名ヲ勤ス碑面上ノ五
篆字ハ陸軍大將一品大勲位熾仁親王ノ書ニテ碑
文ハ左ノ如シ

明治十年二月西南之變起 勅發陸海軍兵討之
一屆右栖川熾仁親王實總督之同年九月賊平此
役也府下壯丁從征者凡七百人所向奮戰陣亡一
百有六人矣丹波國船井郡吉富村西光寺住職新
發田元怒來謁曰西南之役戰死者國有常典既被
優恤然未有爲府下死事者特標其事常以爲職本
郡適當府下之中央因與同志者謀樹碑寺中請有
栖川親王篆書明治紀念碑五大字又列記其陣亡
者氏名於硃石歲時設祭則親者油然生忠君愛國

丹波國志

之志而爲之遺族者亦足以少慰其哀也庶幾有益
乎是元怒等之志也請記以傳後世予深傷陣亡之
士今聞元怒之言嘉之因爲記其事云

明治廿四年三月

京都府知事 北垣國道撰并書

西光寺ハ山縣ヲ鉞盛ト呼ブ堂宇頗古ト古額ヲ掲
グ秋ヲぬといひもリ山ヲ江ノふきなり西の光ノ足ヲ
七番トアリ扉面ニ菊紋ヲ刻ス僧院ハ踏側ニアリ
其ノ前ニ小堂ヲ構ヘ額數個ヲ掲ケ亦古畫ナリ此
ノ寺ハ高倉天皇ノ嘉應中ニ慶巖上人ノ開基スル
所ニ係リ二世住持トシテ文覺上人住持ス是レハ
師弟ノ因アリテナリ文覺ハ南來田部保津村ニ生
レタルガ知童トシテ村人ニ忌マレタルヲ以テ出

ダサレ此ノ寺ニ入り慶巖ニ就キ披削シ後ニ山城
ノ高雄ニ登リテ掛錫シ此ノ寺ノ衰弊スルヲ以テ
下リ住ム再興ノ功ヲ竣リ遂ニ高雄山神護寺ノ附
屬トス故ニ古義真言派ニテ中本山ノ資格ヲ有シ
七堂伽藍ノ輪奐アリシモ應仁ノ兵燹ニ燬廢セラ
レ寶器モ亦烏有ニ歸ス昌雄上人來リテ中興セシ
モ承應年中又四祿ノ災ニ罹リ今ハ其ノ一部ヲ存
シ殘端ヲ保フノミ 阿彌陀如來ノ四十八願ニ因
ミテ四十八願所ヲ造レリ時コノ寺ヲ以テ第三
十一番ニ充テ元和五年徳川ニ代將軍秀忠ヨリ神
田ノ米ニ十五石ヲ給シ朱印ヲ載セ以テ寺領タル
ノ證左トス明治元年私領廢格ノ令出デ、朱印朝

町
枝
志

延二収ノラレ寺祿全ク絶、徳川家十一世ノ靈牌
 ノミ依然トレテ堂廡ニ位ヲ陳ヌ十一世トハ名徳
 院ヨリ文照院ニ至ルヲ云フナリ
 正嘉二年北條相模入道時頼詣國行脚ノ際コ、ニ
 滞留シ一字一石ノ濟華経ヲ手寫シ之ヲ栗田郡子
 原村ノ四衢道下ニ埋メ同年二月開眼供養ノ式ヲ
 舉ケルヤ此ノ寺ノ住僧具ノ式ヲ掌リタルヨリ自
 後慣例トナリナ原ノ高率部改造毎ニ往キ茲ムナ
 原ノ部ヲ参看セヨ
 本堂 寺坊 門 觀相堂 辨天堂 境内千六百
 七坪、官有地ニテ田畑山林價格凡三百六十圓
 收入云米十二石 明治二十年

本尊阿彌陀如來 木造立像二尺五寸 弘法大師像
 二尺五寸 同一尺四寸 不動明王立像 一尺二寸
 同一尺五寸 四佛 藥師 一尺五寸 四佛 聖觀音立
 像 二尺 觀音堂ノ本尊 關山像 一尺二寸 釋迦誕
 生像 銅製 涅槃像 一軸大軸 兩男房陀羅 二幅
 八祖像画 八幅 不動像画 一幅 弘法像 一幅
 十二天屏風 一幅 菅原重永筆 駝枳尼天 立像四尺
 辨財天 四寸 佛舍利 一基 火焰形寶鏡 文覺
 太刀 明珍曾 文覺遺品 袈裟女ノ文 一幅
 弘法書般若心經
 境外田七段一畝二十七步 畑七畝十二步 山林
 二町九段四畝

垂枝老櫻一株アリテ花時一簇ノ香雲凝ツテ春色ヲ蒸シ遊賞ノ客ヲ引ク

木原 高二百三十一石四升一合 龜山領

廣垣内 高五十五石八升七合 園部領

崔部 高四十八石二斗一升三合 同

池ノ内 高九十二石七斗一升八合 同

大藪 高二百十石 同

室河原 高百三十三石五斗七升四合 同

明治二十九年ノ水害ハ近年ニ之ナキ巨浸ナリ當村ハ大小十餘ノ部落多ク川端ニアルヲ以テ其ノ害ヲ免ラサル無ク大字鳥羽ハ大堰川ト園部川トノ合流ノ衝ニ當ルヲ以テ大水霖潦ト云ハバ先ヅ

其ノ弊ヲ受ク今回ニ降り續ク雨ノ下ニ川ノ水嵩次第ニ増シニ川ノ水相駭ノ様ハ押シヲ押サレテ碎キワ碎カレテ濁浪堤ヲ越エ激濤岸ヲ崩レアハヤト叫ブ内ニ百七十五戸ハ床上ヲ浸サレタリ字弘垣内ノ根本源之助ハ容易ナラヌ水聲ニ驚キ小兒ニ名ヲ小高キ家ニ伴ヒテ之ヲ托シ家具ヲ取片付ケツ、アリレニ裏キニ當ル所ノ大川堤防エラメタヤ舌百雷ト云ハシカキ雷ト云ハシカノ音シテ衝キ來ル水ニ漂ハサレタルヲ辛クジテ夫婦ハ物ニカ杖木ニカ無找無心ニ取付キ助カリタルモ助カラザリシハ五十八歳ニナル母ノイカト云ハルモノニテ無慘ノ別レヲ爲シタリキ

崔部 古ハ獨立村ニシテ明治初年ニ至ル
天武天皇ノ時ニ崔部ノ臣ニ朝臣ノ姓ヲ賜フ丁國
史ニ見ユ此ノ人ハ此ノ地名モテ尸トモシモノニ
ヤ文覺上人ガ諒親朝ヲ助ケタル功ニヨリ此ノ地
ヲモ勅賞セラレタリ
樵夫久兵衛ノ妻
享保三年十一月廿八日夕時野猪ノ手負ヒタルモ
ノ八木南廣瀬ヲ味リ廻リ山室ヨリ鳥羽ニ至リ農
夫ヲ牙ニ掛ケ尚ホ奮進ス久兵衛年六十薪ヲ負ヒ
歸ルサ之ニ過ヒ衣類ヲ掛ケラレ崖下ニ陥ル偶
妻采リ之ヲ見テ俄ニ袂ヲ以テ猪頭ニ掩ヒコレニ
跨リ擁留シテ救ヲ呼ブ一丈夫刀ニテ刺シ一丈夫芥ニ

テ蹄ヲ折テ之ヲ斃ス久兵衛コレニ因テ免ル、丁
ヲ得タリ領主龜山侯之ヲ聞キ賞スルニ米俵ヲ以
テセリ
廣瀬ハル
ハルハ大藪ノ農廣瀬虎之助ノ妻ニシテ下口人ノ
西田孫太郎ノ妹ナリ嘉永二年七月五日ニ生レ明
治九年三月四日ニ嫁ケ同年十二月男兒ヲ擧ゲ
又常ニ致々トシテ家業ヲ守リ一家和睦シ其日ヲ
送リケルガ素ヨリ資産アリト云フニハアラザル
ニ虎之助ハ殊ニ飲酒ヲ好ミ舅猪兵衛ハ八十歳ノ
老耄ニシテ姑トキハ明治十幾年ノ頃ヨリ難病ニ
罹リ起居ハ更ナリ手足自由ヲ失ヒ處ニハルハ晝

丹波志

夜側ヲ離レズ侍養ヲ盡ス丁六年間一日ノ如クナ
リシニ命數ニヤ姑ハ十八年八月死セリハル悲
哀痛哭シテ飲食喉ヲ下ラザリシ又歎ウタハ早ク
他ニ嫁ヤシニ同六年離婚セラレ後齋疾トナリ家
業ヲ操ルヲ能ハズ羊起羊臥ニ八年ヲ累ネ終ニ十
八年死セリ斯カル不幸ノお續キタルニ加ヘテ
夫モ亦十七年頃ヨリ長病ニ罹リタレバ少シノ家
産モ蕩盡シ負債益々嵩ニ近親姻戚ノ救助ヲ受
ケシモ比年ノ窮迫支フル能ハズ如何トモナシ難
キニ拘ハラズ夫ノ看護ヲ怠ラズ舅ニハ孝養ヲ盡
シ最ト殊勝ナリケレハ閨里其ノ節操ヲ感稱セマ
モノハ無カリシ而シテ夫モ篤疾ノ爲ニ十八年十

二月廿八日死セシタリハルガ嘆キノ甚シキ目ヲ
禁ズル能ハザリシか斯カル上ニ病舅アリ啞歎ア
リ而モ眼力朦朧トシテ職ヲ執ル能ハズ長男ノ多
六ハ幼弱ニシテ餬口ノ道ヲ得ル能ハズ斯ク困窮
ニ陥リ家業ヲ助クル者ナキニハルハ女ノ身一ツ
ニテ舅歎ニ安養ヲ盡シ幼兒ヲ撫育シ日夜電勉職
業ヲ勵ミ一家四人ノ口ヲ餬セシメタリサレバ十
九年十月十六日京都府知事コレヲ嘉賞シタリ其
ノ書付

京都府丹波国船井郡大藪村廣瀬多六母

三十八年五月

姑夫等多年病叅ニ在リし時看護至らざるなく

母史

承教意より十年間一日に如し其乃志行洵に奇
村より依りて其資金壹圓五十銭下賜り奉

明治十九年十月十六日

京都府知事佐佐木俊四郎北垣國道代理

京都府書記友田正任尾越甚備補 印

上和知村 大字 中山 杵谷 市場 大迫 長

瀬 大倉 篠原 塩谷 細谷 西河内 佛主

上乙見 下乙見 上栗野 下栗野

人口 六百九十五戸 三千三百九十六人

明治二十九年

北方ニ於テ北栗田郡何鹿郡ノ両郡ニ挟マレツ、
頭ヲ擡ゲ南方ニ於テ下和知村ニ接シ山間ニ一生
面ヲ開クヲ上和知村トス實ニ郡中ノ最北位ニア
ル所トス和知谷ニ十七村今ヤ二村トナリ上和知
ハ十五舊村ヲ包容ス 山葵ノ名産アリ
大字 杵谷 高八十六石六升七合ニテ園部藩領
タリキ和知川流域ニ二十四間長ノ橋ヲ架ス深谷

上和知村

和知川流域ニ二十四間長ノ橋ヲ架ス深谷

ナルヲ以テ橋勢頗高シ筏ヲノ下ヲ下ル上流岩江
 上ノ瀨ヨリ来ル 釣籠卸ノ名ヲ存ス此ノ橋ノ架
 設セラレガリレ時ニハ行旅懸崖ヲ急下セザル可
 ラズ逕急ナレバナリ故ニ名ツクトカヤ砲銃ノ連
 發ヲツルベホト云フニ同ジト云フ 香魚ノ時期
 ニハ大漁アリレモ今ハ大ニ減不畑子茶玉茶ヲ製
 ス 谷中ニテ筏ヲ次ガ所アリ古来ノ仕来リト云
 フ
 大字 長瀬 高二十九石一斗七升ニテ園部落領
 ナリキ 古時芍薬ノ名産地ナレタリ以テ春季行人
 ノ目ヲ歡ハセシモ漢方ノ薬北ト共ニ漸リノ影ヲ
 失ヘリ

上和知村

大字 中山 高四十五石八斗一升六合ニシテ園
 部落領ナリキ 西北スレバ小幡ヨリシテ山家村
 へ向フベク東北スレバ北東田郡ニ向フベキ岐路
 アリ
 大字 西河内 高百十五石六斗二升ニテ園部落
 領ナリキ 賦ケ嶽ノ戦ニ蜂須賀小六ノ功アルヲ
 賞シ秀吉ヨリ丹波園河内五千石ヲ賜ハリトハ此
 ノ地及ビ上河内ニヤ
 大字 市場 高九十五石二斗一升八合 内六十
 ニ石九斗二升三合 新田高 前同領ナリキ 野
 々村ノ市場ト混同シ易シ
 大字 大倉 五十四戸 農四十八戸アル内養蠶

和知村
 市
 場
 混
 同
 志

スルモノ四十七石アリ栗園十五町ヲ有ス
高八十五石内新田高四十一石九斗二升七合 前
同鏡ナリキ

蠶業共進社 明治二十八年設立 社員十三人四
十二年ニ増シテ二十六人トナル 初年十一圓ノ
積立金四十二年ニハ七百一圓トナル 收穫量^{三九}_四

七〇及二十八
二一ニ一六七一
六一三三七三四一

大倉部落ノ田十二町五段九畝九步 相二十三町
四段廿六步 原野一町七段七畝二十一步 山林
二十六町一段七畝十三步

合計六百七十五町四段四步 地價六千四百
十九圓〇七銭

佛主

正和知村

天田郡横山ノ城主横山大膳和久ノ城主和久長利
ハ何鹿郡ニ本陣ヲ据ヘ山家ニ遷リ其ノ近傍ヲ畧
有シテ此ノ地ニ及ブ之ヲ永祿六年ヨリ以後ノト
トス
和知川 北栗田郡ヨリ流レ来リ長瀬篠原ヲ経テ
弁谷ニ入り高屋川ト合シ下和知ニ下ル
大字 佛主 高四十七石四升九合 文久年 山中ニ
其ノ名モ及對ナル地獄谷アリテ其ノ洞窟ハ古来
コレヲ窺フモノサハ無ク三嶋源之助ナル家ニ秘
載セル古記ニモ左ノ事ヲ記セリ此ノ地ハ弓削庄
桐野ノ奥山ニテ此ノ洞穴ヲ龍門ノ洞ト唱ヘ北栗
田郡ノ部ナリ往昔貴人ニ三兒アリ此ノ洞ノ深淺

丹波志

ヲ探ラレトテ聞ヲ取リタルニ三郎コレニ當リ遂
ニ入りテ窟底ニ達ス之ヲ聞取抽籤ナドノ初メト
ス云々爾後洞窟ハ神秘的託話ヲノミ言ヒ傳ハ誰
一人コレヲ實測スルヲ無カリシニ明治四十二年
養蠶教師藤山春三ナル人之ヲ檢定シ蠶卵紙貯藏
ノ適否ヲ試ミントテ纏モラ身ヲ吊リテ之ニ入り
又一條ノ細繩モテ之ヲ信拜トシ之ヲ引カバ急ニ
引キ上ケ窒息ノ虞ヲ慮リ用意ヲ周到ニシテ下リ
タルニ何ノ異狀モ無カリシ
藤田方とんノ事
延寶ノ頃コノニ藤田猪兵衛ナルモノアリ高二石六
斗六升五合ノ地ヲ有ス園部藩ノ領地トシテ租稅

上知知村

重ク其ノ取リ立テ名目ノ數三十餘ニ昇リ此ノ地
ニ住ムモノ、苦痛年毎ニ増シ領主ヲ怨ムノ聲ヤ
代官ヲ罵レノ辞ハ村中ニ起コリ彼所ニ寄リ合ヒ
此所ニ相謀リ郷訃ヲ起コヤン平一揆ヲ起コヤン
平トマテニ立ケ至リ其ノ日限サヘ内々取リ極ノ
タリ此所ニ猪兵衛ノ妻おこんアリ此ノ事ヲ聞キ
夫ニ尋ヌルニ猪兵衛ハ其ノ一伍一什ヲ打ケ明ケ
諾リ事ヲ起コス限リハ音ガ身モ之レガ為ニ如何
ナル憂目ニ逢フモ知レズ村中モ如何ニ成リ行ケ
ヤ計ラレズ去リトテ此ノ儘ニテハ村中イツレモ
乞食スル外ニ仕方無シトテ其ノ期日ヲモ打ケ明
ケシニツおこんハ大ニ驚キ且悲ニ何トカシテ之

上知知村

之ヲ救ハント考フルニ幸ナル哉巡國使総論以下
 リダセノ此所ヲ通行スル噂アリ由リ夜中一兒ヲ負慶徳ニ出
 一兒ヲ携ヘテ役人ノ旅宿ニ至リ掛込ニ願法度
 事ヲ云ハ願ヲ為シ巡國使ノ聞キ入ル、所トナリテ破
 領主ヘノ訓示トナリ收税ノ事スベテ復舊ニ數十
 日ノ課賦ハ廢止セラルベシトノ内示ヲ得テかこ
 人ハ満心ノ喜悦ヲ以テ其家ニ走セ歸リ背ノ兒
 ヲ哺乳セシト其ノ紐ヲ解キ之レヲ却セハ斯ハ如
 何ニ其ノ兒ノ息ハ已ニ絶ニ居タリ此ノ事領主ニ
 聞コエ入牢言ヒ渡サレ村追放ノ罰トナリテ近村
 親族ヤ懇意ノ家ニ引キ取テ有志者ノ患ヲモ受
 ケ居タルガ延寶年間將軍家綱ノ御臺所顯子ノ方

堯去ニテ天下有罪者ノ赦免減刑ノ令アリかこん
 モ此ノ恩典ニ與リ歸任スルトナリ後年壽ヲ以
 テ終レリ此ノ將軍夫人ハ萬治二年入興延寶四年
 八月五日堯去アリタルナリ當時かこんヨリ幕府
 奉行所へ差出ダシタル書面ノ文言左ノ如シ

差上申書物之事

をこん

私等猶共剛し妻子もて活生々一共在可ニ
 為置ル要子

御國廻リ御奉行様へむさし仕々目目お祈
 指上申ニ付籠舎牢哈コト入ニ仰付々お如こと
 もニ御せいさい刑罰ノ敗ニトテ可々本處ニ今度

母史志

上知村

上知村

洞ハ若狭へ通ズナド云ヒ傳ヘタルモ
實檢ミテ其ノ説破レタリ



龍門ノ洞

窟底直径四間
五間ノ廣リ高サモ
五間位下ニ平地アリ

風穴

御江戸にて

御臺様せいぎよ逝去に遊に二付御報敵とし
て命仰たすけに成難者存存其工在所在所
ヲ啼コサレ此上ハ親子共在而衆りさしつ次第
ニ任むざし何方へも第り申万及段在所
指図をも相そむさ重命悪事前文ノ山コト目
任々いじ如何様ニも曲事罪状ノ云何付べく
ハ為其仍而書物差上ル以上

延寶四年辰十一月廿日

并主村

猪兵衛妻

同セム
万太郎

郡御奉行平井若兵衛様

御代官本ノ書付周ノ様

風穴ハ洞穴ノアル所ヨリ十町許ノ下手ニアリ一
 寸四方位ノ穴ニテ二十餘所モアルハ是ハ四十
 ニ年ノ頃衆ヲ採ル女輩ガ計ラズモ發見シ足元ヨ
 リフー〜ト風カ出ト云ヒ驚キ歸リテ村人ニ語
 リタルニ因リ遂ニ大評判トナリ近傍ノ者マデ舉
 フテ見物ニ出懸ケタリ

大字 塩谷 高二十六石二斗五升四合 大正六年五月二日小見ノ

マフ子遊ヨリ出火シ二十三日ノ内二十一日迄燒失セリ村役場ヨリ一戸ニ付
 ハ疊ト四疊ノ家ヲ建テ奥ヘタリ十五日ニ成リ皆移住ス

小字 小畑 高七十九石二斗四升六合

大字 上栗野 高四十石三斗四升

大字 下栗野 高八十三石二斗五升九合

大字 大迫 高七十七石六斗四升四合

上知村 志

大字 篠原 高六十一石六斗六升一合
 大字 上乙見 高三十九石六斗八合
 大字 下乙見 高三十石八斗三合
 大字 細谷 高七十九石四斗七升三合
 右孰レモ園部藩領ナリキ
 一谷中二十七八町ノ長サ十町乃至二三町ノ幅ナ
 ル所ニ桑樹ヲ列栽シ到ル處蠶利爾益ナラザルハ
 無シ且々經濟ノ十分セテ蠶身ヨリ得 古桑ニシ
 テ三尺廻リノモノ少シトセズ板ニ製シテ美ナレバ
 蠶蝨多クハ恨ムバシ

下和知村

下和知村 大字 本莊 板原 中角 廣瀬 才
 原 大篠 廣野 出野 箱次 安栖里 小畑
 七百三十五石 三千七百十人 明治二十九年
 才原廣野ヲ以テ天田郡ニ接シテ西方ヲ劃シ廣野
 才原及ビ中ト角ト本莊等ヲ以テ上和知村ニ接シ
 北方ヲ界ス南方ニ寶美三ノ宮等ノ村アリ而シテ
 東方又上和知村ニ連ナリ鐵道村内ノ北部ヲ貫通
 ス到ル處山ナラザレバ谷ニテ工事ノ困難ナル全
 線ノ魁タリ
 和知川 上和知ヨリ流下シ来リ日向日代ニ別レ
 何處郡ニ入ル奔流劇瀉シ此桑田郡知井ノ濱手ヲ
 朝ニ出デタヲ待タズシテ福知山ニ達ス水程二十

下和知村
 支
 志

里餘ニシテ一屈一屈伸所太少シ流域中北来田郡
 ハカケテ絶勝ノ風光ヲ推薦スレバ左ノ如シ
 高屋川ノ派合 廻り洲 馬岩 中岩 掛木
 塩ヶ洲 屏風岩 明神 ミツ石 小田ヶ洲
 井壺 四洲 観音滝 胎谷橋洲 榎ノ濱
 清泉掬飲スバカリシ一帯モ知井谷製材ノ鋸屑ニ
 濁化セラレ青山緑水ノ清澗モ今ヤ一夕ノ昔語ト
 ナリ了シ又権現山依然トシテ何鹿郡界ニ聳ニ
 本荘 八十戸 數年ニシテ四十戸ヲ減ジ今ノ數
 トナル 明治二十九年 高百三石八斗三升六合ニシテ園
 部藩領ナリキ免三ツ半ハ一石ニ付キ三斗五升十
 レハ至輕ノ税目ナリ土地ノ饒ナラザル知ルベキ

下和知村

ノミ
 阿止三所神社 郷社ニシテ主神ヲ豊受姬命三穗
 津姫命譽田命ト書ケリ貞觀三年ノ草創ニシテ
 元祿三年ニ改造シ天明八年火災シ寛政十年ヨリ
 十五年ニ至リ再建ノ功ヲ竣ハ今ノ社殿成レルナ
 リ祭日十月十五日農業蠶業ノ神トシテ和知二村
 ノミナラズ近村ヨリノ養者夥シ
 安栖里 元祿高二百五十石八升七合人家百七戸
 アリテ園部領ナリキ年々ノ檢見ニツノ收穫ノ多
 キヲ詔ノ漸次増額シテ三百二十四石トナリ又減
 ジテ定免九十七石トナレリ升ハ荒引多クナレル
 ヨリシテ一定ノ税目ヲ立テ年々ノ檢見ヲ休メタ

下和知村
 史
 志

ルナリ此ノ定免ノ内ニ綿目ト唱ナル米稅ヲ含ム
銀百匁ナリ之ヲ米ニ見積モル外ニ又米稅ノ目ア
リニ石ヲ出ス是亦右ノ定免中ニ在リ維新後地價
壹萬五千圓ニ計上ス
維新後風流ノ事ナドハ之ヲ口古ニ上ス人ノ少カ
リシニ十四年ヲ出デスレテ鎮ニ復舊ノ氣運ニ向
ヒ探景弄勝スル者輩出シ和知谷サハ騷人遊客ノ
來過スルアルニ至ル一日此ノ里ノ家ニテ茶ヲ乞
ヒ烟ヲ喫スル七人ノ同遊アリ所ノ名ヲ問ヒ其ノ
文字ノ奇ナルヲ賞シ一人ガ矢立ノ筆取り出シ
一寐せんあ極筆乃旅路の日長き 丈里ト抑セシ
カバ次ノ男其ノ筆ニテ其ノ紙ハ以テもろくや花

下和知村

けかゝらんさのえりくあせりけ人ハ考多うそと
と通飲トセシニ又次ノ人少くまわあ極筆乃花
の下うまお馬村トス暫アリテ又向フノ人名ふし
おふ安く極ミうる里あきばあせを乃人ハあせり
やハすゝ一喜ト書ク今一人ヲ呼ブ山ノ麓ニテ沉
吟シツ、アリシガ呼ブ聲ニ應ビテ來リ紙ノ裏ハ
經過ス安棲里無家不晏然絲利誰言細今年太去年
北峰ト書ケリ著者ガ其ノ書キタル紙ヲ見タルハ
其ノ人々ガ其ノ家ヲ左チタル二三時間ノ後ナリ
シ
金赤山 七堂具備ノ古蹟ニシテ足利尊氏ノ祈願
所タリキ 七堂中存在スルモノハ角村藥師中村

丹波 和知村 志

ノ阿彌陀 板原ノ毘沙門及此ノ地ノ千手觀音
 トス中山小畑ニモ殿堂アリキ
 小畑 小畑トモ書ク人家七十五戸ニ十九年
 大簾 高八十九石四斗六升九合 免一ツ之ヲ椽
 免ト呼フ實入り一個ヲ意味ス輕キノ至リナリ
 獨立村ニシテアリシ比一年山谷間ノ栗樹枯死シ
 近傍諸村ノ害ヲ被レルニ大簾ノ谷ノニ其ノ害
 ヲ免レシカバ和知谷諸村連合シテ此ノ村ノ栗ニ
 課稅セヨト迫リテ遂ニ之ヲ負ハセ後年和知惣體
 ニテ之ヲ辨償スベシトテ大簾栗役ノ名ヲ以テ出
 稅スルトトセリ諸村ノ帳簿ニ其ノ目アルハ其ノ
 爲ナリ

下和知村

廣野 五十戸 百二十六石一斗七升高ナリキ此
 ノ地比較上田野多シ廣野ノ名虛ニカラス大栗ヲ
 産ス市右衛門ト呼ブモノ一升山盛りニシテ其ノ
 數二十個ヲ出テ女郎ト呼ブモノハ渋皮ノ離レ
 際能シ八木ト呼ブモノ奥手ニテ陸ニ切りテモ碎
 ケガルヲ以テ割烹家ノ歡迎ヲ受ク 此ノ邊り家
 ヲ栗餅ヲ製ス其ノ方栗ヲ煮テ柔ニシ摺リ潰シテ
 餡トシ餅ニ塗リ附ケ牡丹餅ノ如クス砂糖ヲ加ハ
 不塩加減ニテ其ノ味む善シ餅ノ形ハ平匾ニシテ
 長シ其ノ大ナルヲ以テ著者ハ一個クニ竭クス能
 ハズ土人ハ三個ヲ食ヒ了ルト云フ
 稲次 三十戸 百十三石一斗三升高ニテ園部藩

丹波志

領ナリキ此邊皆同領ナレバ一々書サズ
 出野 二十戸 五十五石九斗二升八合高ナリキ
 中 九十三石六斗六升八合 四十戸
 才原 四十餘戸 五十六石八斗一升四合 板原
 七十五石九斗六升六合 角 四十戸 七十五
 石二斗八升三合 廣瀬 六十九石五斗一升六合
 六十戸
 才原石標 (往是東 船井郡下和知村)
 同 側面 (大及雙壺 三十三哩四町 三十三哩三十二町)
 此ノ邊一帶山間溪中ナルヲ以テ産物ヲ運出スル
 二人肩牛背ニ頼レルヲ明治二十二年車道ノ開鑿
 アリテ大ニ輸出ノ便ヲ興ヘ四十五年鐵道成リ産

下和知村

物ノ輸出外所ヨリノ移入大ニ其ノ便ヲ得タリ
 釣橋 往來此ノ大川ニ架セラレタル橋ニシテ流
 失ノ害ヲ免レタルヲアラ不出水ノ穀ト共ニ村人
 ノ輿擧ヲ承セシモノカテ明治四十二年延長二百
 四十尺ノ釣橋ヲ架設セリ此ノ橋ハ籠ヲ福井縣
 ニ采ラシムカ爲ニ人ヲ設縣ニ派シ實檢ヲ經テ着手
 シ同四月十八日渡橋式ヲ行ハリ
 京都鐵道線ノ園部綾部間連絡工事用煉化石供給
 ノ爲ニ明治四十年當所ニ煉化石製造所ヲ設ケタ
 ル以來明媚ナル田園ノ風色モ煤煙ノ蔽フ所トナ
 リ起上テ四十一年五月ニ至リ其當ハ春蠶飼育中
 煉化工場附近ノ桑園ヨリ採收シタル桑葉ヲ給與

ミタル蠶ハ第一齡食桑中ニ病蠶ヲ出シニ眠ニ至
リテ斃蠶續出レ蠶量約三百及ノ蠶兒ヲ放棄スル
トトナリ夏蚕亦同結果トナリタル家比々ナリレ
ナハ府廳ニ申請シ實地調査ヲ乞ヒタルニ烟毒ノ
然ラシメノタルヲ明瞭トナリ蠶業講習所ヨリ錢道
院ニ交渉シ養蚕中其ノ中止ヲ懇請スル所アリ院
亦コレヲ容レラ其ノ期間製造ヲ中止セシカハ次
年ヨリ其ノ蠶兒生育ハ平常ニ復セリ養蚕家ハ注
意スバキナリ
十倉十兵衛 明昭三十七年新嘗祭ノ御供粟奉納
ノ聲譽ヲ荷ヘリ

豹

下和知村

大正六年六月廿九日須磨動物園飼養ノ一大豹脱
檻逃出ス升ハ園丁ガ食事ヲ爲スバク檻鎖ヲ開キ
食事セシメテ檻鎖ヲ急リタル結果ニテ一園丁ガ
檻中ニ豹ノ居ラガハルニ心附キ非常報告ヲ爲シ園
主以下想出シテ検査シタルニ何處ヨリ何如ニシ
テ園外ニ逃出シタルカ之ヲ知ルニ由無ク今ハ桑
ヲ置クベキニ非レバ人ヲ警察署ニ走ラセテ急報
ス警官巡查時刻ヲ移サズ驅ケ附ケタルモ其ノ足
迹ヲ尋ヌル由モ無シ須磨町ノ警誠トナリ近村ノ
驚動トナリ戸々門戸ヲ鎖シ外出スル者速ハナキ
ニ至リ郡村寂寥ノ中ニ在リ往還スルモノハ巡查
ナラガレバ獵夫ノミトナリ四方ヨリ暮ニ應ジテ

丹波志

来ル好獵家ヲテハ射銃ニ心ヲアル除隊兵卒ヲ分
部シテ警官コレガ長トナリ夜トナク晝トナク山
野ヲ巡視スルニ其ノ影ガニ見エズ流言百出レ何
山ニ當リテ吼ニル聲セリ何溪ノ方ニ牛大ノ獸跡
ヲ印セリナド人ノ聞見ヲ驚カスノミニテ實跡無
シ一周日ニシテ疲癯困頓孰レモ氣拔レテ最初ノ
勢アル無シ一説何處ヨリカ風發ス曰ハク大獸ノ
波ヲ破リ海ヲ渡ルヲ見タリト是ニ於テカ淡路島
ノ警誠トナリ播播ノ間ハ警戒少シク緩メテ應
援ノ警官ハ隣縣近郡ニ歸リ豹ノ尊モ立テ消正
較道頻繁ナリシ語新聞紙ニモ其ノ消息ナカリシ
が翌七月三日ニ至リ和知村地内ノ山中ニ一大怪

下和知村

物出現ニタリトノ報知アリテ人心穩ナラザル所
ハ同六日午前六時半頃宇阪原小字栗ノ谷ニ於テ
山家飼養ノ鶏ヲ追フ獸アリ扱ハ彼ノ豹カトテ一
村皆慄ハアカリ戸ヲシメ音ヲ立テ不靜マリ居タ
ルガ又ソノ消息無シ何鹿郡ヨリ急報アリ曰ハク
眞上林村山中ニ出テタリ又一報アリ去ル八日ニ
阪原山中ノ炭小屋ニテ藤田某ガ怪物ノ動クヲ見
タリ去ル十一日ニ宇廣瀬ニ出テ雞ノ臍ヲ拾ヒ
喰ヒ并タリト時々叱吼ノ聲アルモノ、如シ是ニ
於テカ同村ニハ警察署ハ非常射殺ノ出願ナシ其
ノ許可ヲ得テ銃手ヲ募リ壯丁ヲ部署シ出テ来ヨ
目ニ物見セント待攝フ十三日午前六時頃前示栗

下和知村
史

ノ谷ナル谷市太郎ノ便所裏ナル籬舎ニ叫籬ノ聲
ス長男太七驚キ出デントレテ戸隙ヨリ窺ハバ全
身ニ斑點歴々タル怪獸眼光ヲ放テ踏躓スルア
リ太七ハ竊ニ表戸ヨリ出ゲ一部落七戸ニ各報シ
走りテ警官ニ告グ血氣旺盛ノ青年輩我レ社世間
ヲ噪カセル怪物ホ止メ高名マシト市太郎許ハ寄
ヒ来リ屋上ヨリ俯瞰シ谷彦九郎外四名カ携ヘ上
ガリシ銃モテ狙撃シタルニ彦九郎ノ祭チタル一
丸命中シ豹ハ脇腹ニ負傷シテ一間餘ノ崖ヲ躍リ
上カリ逃ケ出デントスレテ他ノ四人ノ乱射九丸
内四丸ハ左肩眉間頸部等ニ命中シ差シモ瘡猛ナ
ル豹モ一大悲鳴ト共ニ赤チ斃レタリ

トハ云ハ本邦無類ノ獸ニテ世評高カリシモノト
テ誰レシモ側ハハ近寄ラズ遠ク責メニシテ耳タ
ルカ其少シモ勤カヌ様ヲ見テ人々奇寄り見ルニ
曩日須磨ニテ一発ヲ受ケタリト云フ所ノ箇所乎
左肩ニ創痕ノ古キアリテ毛皮剥脱シテ又扱具
ノ屍體處分ニ付京都府保安課ニ於テ研窮中ナル
カ逃走シタル家畜ト云フナラバ之ニ對スル取扱
アレド豹ハ家畜ト曰フヲ得ズ民法第一百九十五
條ノ條文ヲ適用レテ其ノ屍體ハ射殺者ノ手ニ歸
ス下キモノナリトノ説有カナリ

下和知村



西本梅村 大字 大谷 埴生 南八田 大河内

法京 天引

本村ハ北方摩氣村ニ接シテ園部ニ通シ南方山嶽
 童々半國山ヲ負ヒ西方ハ摂津國豊能郡ニ續キ東
 方山谷相連ナリ昔時龜山田今、龜ヨリ篠山ニ赴ク
 ノ官道ナリキ埴生南八田天引等孰レモ獨立村驛
 トシテ代官所アリ庄屋アリ宿屋アリ番人等アリ
 キ 町村制施行ニ際シ村ヲ合併シテ一村トナシ
 人家三百三十三 人口一十九百二人ヲ算ス
 埴生 高六百十三石五斗七升 内二十五石上賀茂
 社領 八石下鴨社領 四石等持院 十三石 延光院
 五百六十三石五斗七升 園部藩領 小村ニシテ五

領主アリ細税ニ付キ施政ニ付キ煩冗ヲ極ム
野口驛ノ名延喜式ニ出ヅ古來此ノ邊ノ丁ナルベ
シト云フ多紀郡福住ノ一分タル小野ヲ經テ長柄
ニ向テ道程ニシテ古ノ山陰道ナリトカヤ 要衝
ノ地ナルヲ以テ天下ニ事アレハ領主園部侯ヨリ
番所ヲ設ケ番兵ヲ置キ往來ヲ看督ス 安政以降
天下騷然タルヲ以テ幕命ヲ奉ジ浮浪人ノ監察ヲ
嚴ニス慶應四年ノ正月幕軍伏見烏羽ニ敗レ官軍
將ニ來ラントスルヤ昨日迄勤王家ノ浪士ヲ抑留
拘禁シタル番兵ガ今日ハ幕軍方ノ敗兵又ハ其ノ
黨與ヲ捕縛拘禁セヨトノ命ヲ受ケタル豹變ノ速
キニ一驚ヲ喫シタリトハ此ノ地在往ノ故老ガ語

リタル話

千代姫ノ清水 埴生本道ノ北方ケシク下手ナル
所ニテ舊道ノ間ニ泝リ路人ノ夏日旅行ニ渴ヲ醫
スルモノトス若森普濟寺中興ノ女僧俗名千代姫
ガ茶所ヲ設ケ此ノ泉ヲ煮テ行人ニ施與シタルヨ
リ名ヲ得タリ姫ハ足利尊氏ノ姪妹ニシテ得度シ
タルモノノ普濟寺ノ紀文ニ見ユ參看スベシ此ノ泉
溢レテ今ハ數町ノ田養水トナレリ
大字 大谷 高二百四十八石四斗七升五合
此ノ邊ヨリ薪炭ヲ産出シ龜山城下ハ賣出ス丁夥
シク墮ラテ薪炭ノ營業ヲ爲スモノ増加シ龜山ノ
薪炭相場ヲ左右スル迄ニ立至リ次第ニ其ノ價ヲ

西本梅村

丹波志

高騰セシメタルヨリ龜山城下ノ薪炭管業者一同
申合ハセ當所ニ産スルモノ及ビ近傍能勢谷産出
ノモノ、直下ゲ談判ヲ行ヒ従前ノ代價ニテハ取
引セズ他所ニ産スルモノヲ購買スベシトノ事ト
ナリタルヨリ當所及ビ近傍ト能勢谷一圓同業者
ノ相談ニテ直下ゲ中ハ龜山ハ持チ行ク可ラズト
ノ約定ヲ盾シ犯スモノアラハ相當ノ罰則ニ處ス
ル迄ノ規則ヲ設ケ同年十二月十六日ヨリ薪炭類
一切ノ搬出ヲ止メシカバ城下ノ薪炭一時ニ減少
シ之ヲ他所ヨリ仰ガントスレドモ俄ニ供給ノ道
ヲ得不城中所要ノ薪炭ヨリ町家ニ至ルノ需要逼
迫シ上下ノ困難言ハシ方無キヨリ同廿四日代官

西本梅村

集数人ノ下役等出張シ一方ハ設計シテ説諭シ一
方ハ穩容ヲ入レ番人ヲ差出シテ強迫ヲ加ヘ同廿
八日ニ至リ宮川驛ニ於テ詠製造人高業者ノ引見
トナリ吏命ヲ奉ズルモノ屬々出デ来リ是ニ於テ
城下商人ト折シ合トナリ従前ノ如ク其ノ翌日
ヨリ一荷ニ荷一駄ニ駄ト相續キテ城下ニ入ルヨ
リ町内ノモノ擧リ初メテ愁眉ヲ開クヲ得テ皆云
フ是レハ此ノ御正月モ暖ニ祝ハマス
大字 天引 上天引高百二石九斗五升 下天引
同 園部領
園部ノ學校ニ残レル天引話
維新ノ後數年後マデモ四方八方塞ガリノ地トテ

質素純朴ノ人ノミナリシカ今ハ此處アタリモ交
 通ノ便開ケ看荷モ往來シ洋服ノ影モ往來シ月ニ
 一度ハ豆腐カ膳ニ上ル丁モアリ法事ノ外ニハソ
 レサハ見ル丁褌ナリシ當地モ寺子屋ハ止ニ園部
 ニ學校ト云フ者カ始マリテ少年幼者カ通フト
 ナリ當地ヨリ家々ノ小供カ入學ヲスルニ付キ其
 ノ父等カ連レテ校長ノ前ハ出ル校長ハ懇々ト學
 問ノ必要ヨリ學校創立ノ趣旨ヲ言聞カセ講堂ヨ
 リ教室等ノ参考ヲ了リ食堂ニ導キ生徒喫飯ノ様
 ヲモ見セ儉約ヲ守ラスルノ趣意ヲ示サントテ豆
 腐汁ト漬物ノ外ハ菜無シビヤト言ハバ一父老聳
 頤シテ曰フ彼ニ十物ヲ給バサ、レテハ困リマス

校長曰ハク學生ニハ彼レ位テ好イ大切ナ息子デ
 ハ有ラフカ粗食サセラ勉強サ、ネバナラヌ今カ
 ラ飲食ニ驕ラセテハ成ラヌ父老コレヲ聞キケバ
 シテ親シテ曰ハク彼ノ様ニ御馳走デハ家ハ歸ツ
 テ御菜ニ小言ヲ言ヒ奢ヲ習フテ却テ迷惑ヲシセ
 ストテ其ノ子ノ入學ヲ断リサツサト連レ歸ツク
 殿谷 高二百五十九石ニ斗六升 園部領
 植村園女ハ幼時ツノ母ニ離レ父兵藏ニ奉、孝養
 ス八田村ノ嘉助ヲ贅婿トシテ共ニ養老ニ腐心シ
 四隣ヲシテ感動セシメ又然ルニ嘉助不沼ノ病ニ
 罹リテヨリハ園女一人カヨハキ腕ニテ夫ヲモ看
 護分抱シ加フルニ四兒ノ養育ニモ心ヲ傾ケカヲ

西本梅村
 史
 志

竭シ晝トナク夜トナク拮据電勉シタル甲斐ニ無
 ク貧窮ノ上ニ夫ノ死ヲ以テス國女三十二歳ニ
 シテ寡婦トナリ家産ヲ賣リテ醫藥雜費ノ償却ニ
 當テ自後雇女トナリテ生計ヲ達ワ或ル者勸メテ
 後夫ヲ容レシムルモ國女應セ不且備償ニ且自耕
 シテ小兒ヲ成長セシメテ稚奉公ニ出ダスモ有リ
 家ニ在リテ母ノ耕耘ヲ助ケルモ有リ遂ニハ前年
 賣却シタル文ノ私財ヲ作ルニ至レリ長男長女ハ
 世話スル者アリテ他家ニ入り次男ヲノ家名ヲ継
 ギ四子ハ夫死ス後年宮内省御出版ノ明治孝節録
 中ニ蒐輯セラレ惶々モ乙夜ノ敵覽ニ入レルゾ目
 出度ケレ

和丹郡第六區殿岩村植村三印母
 之に

千方事知事ナリ而母ニ敬礼父名所存生才孝養ニ
 志堅ク又嘉印ハハ身節ニ依ル所應節一居ク交
 ナ一息ハ所嘉印ナク病氣ヲ受テ臥床中ノ人ニ
 少兒と抱クテ晝夜手厥倦者之護ニ力ヲ盡クセモ
 終死を以テ母死シ地衣所存手拂病中ノ醫費借
 成シ借却シテ身ハ老衰ニ至ル在在自白ク生計を立
 上存シテも少少ニ困窮苦達スルニ他ナク兄兼後ヲ
 之と連レ保シ可ク稼働中初メテ其ノ所ノ所
 節ニ至リ晝日傭者ナリ其心出稼務ニ達スル所
 万事長ク活イテ公事ナリ其志一當時ニ及ビ御乃因

西本梅村

和丹郡志

溪ノ第一関ヲ鳴瀧ト言フ十餘間ノ瀑懸カル巨巖
磊々トシテ千秋ノ苔氣ニ鋪ビ老松偃蹇シテ飛龍
ノ姿ヲ呈ス圓クシテ坐スル坊主岩ハ十疊席ヲ設
ケ布クバク一名和尚岩佛頂國師カ来リ坐シ風景
ヲ愛玩シタル迹ト云フ不動岩ハ突起シテ四方ヲ
睥睨ス逕路細シト雖險ナラズ丸木橋ヲ架シ小石
岩ヲ連ネテ途トス林ニ入り林ヲ出テ渴蚪澗ニ達
ス澗ハ藥研形ヲ爲シ水激シテ白馬ヲ跳ラセ巨岩
ノ水ニ浴スルハ枯渴ヲ醫セントスルノ叫龍ト看
ルバク小鳥其ノ傍ニ渙ルハ吞却セラレントスル
者ノ如シ夏日ニハ石斛苔蘚ト共ニ生ヒ小簾具ノ
間ヲ横行連歩ス螢ヲ宿セル白沫ハ低下セル柳梢

西本梅村

ニ點綴シテ長汀ニ垂レ人ヲシテ暮夜ノ看光ヲ想
ハシム行キ寒シテ踏下リ溪ニ入ル今ハ此ノ路
無シト云フ水蒼ク
シテ深ク兩岸緩ヤカニ合ヒ水湛ヘテ遊魚隊ヲ爲
ス名ツケテ妖ガ淵トス深溪白玉ノ簾ヲ懸ク連不
紅躑躅花ノ間ヲ落ツ之ヲ絹織ノ瀑ト呼ブ具色ノ
紅化スル時ハ綿織トヤ呼バン之ヲ右ニシテ進ノ
ハ會仙岩ニ達ス之ヲ溪景ノ白眉トス岩ノ大サ十
數丈ヲノ上ニ數客ヲ會飲并舞ヒシムベク兩岸神
鑿鬼斧ノ痕歷々たり是レ古時太守カ曲水ノ宴ヲ
開キシ處番後復風流領主無ク數十年此ノ風光ヲ
シテ僻土ニ埋没セシメたり今ヤ文化大ニ興コリ
探勝スル者年一年ヨリ多キハ溪福トヤ言ハム

町
史
志

絹織瀑



園部ヨリ南八田ニテ二里餘人カ車ヲ通ズ南八田ヨリ此ノ溪ニテ二
 十七所亀岡ヨリ自動車通ズ賃金一圓五十錢南八田ニ旅館
 アリ

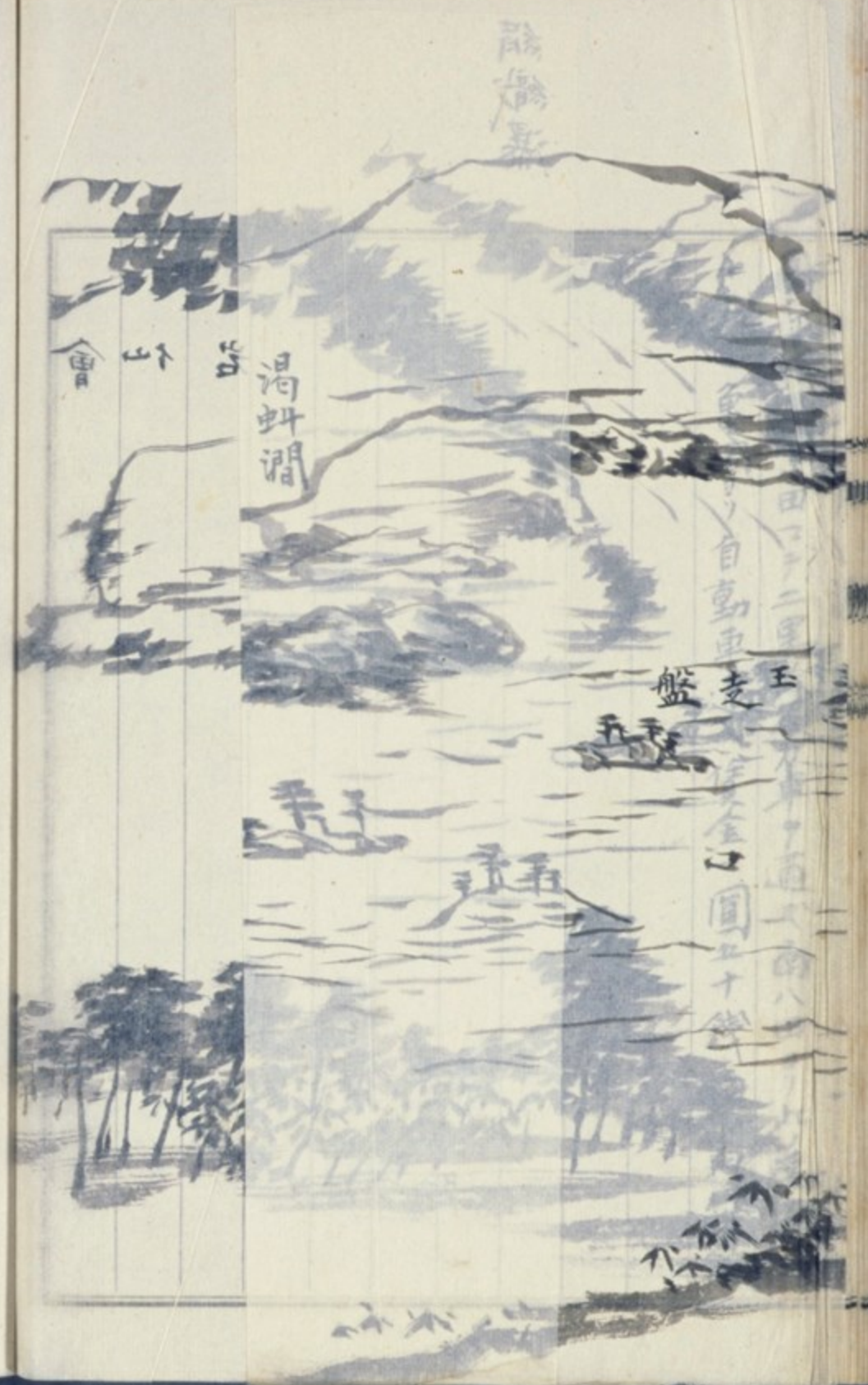


京都府立総合資料館所蔵

西本梅村

此ノ景色ハ領主觀覽ノ場トナリ領主ノ一世一行
 ノ所トス幕府ノ制度太ク嚴ニシテ大名ハ他領ニ
 赴クヲ得ズ公役ノ外他所ニ滯留スルヲ許サズ故
 ニ琴ノ瀑布アレドモ園部候コレヲ見ル可ク不滑
 ノ風景アルモ龜山候之ニ臨ム能ハズ自家領地夕
 リト雖モ一世ニ一行ヨリ多キヲ容サヌトハ究屈
 ノトナラヌヤ
 當時紅葉ニ好キヲ以テ領主ノ未賞ハ秋晩冬初ニ
 テアリキ楓樹ハ一トシテ尤幹ナラサルハ無ク槎
 楸璫踞ノ状アリテ古栢長杉ノ際ニ錦繡ヲ晒シ夕
 ルモ維新ノ施政方針ハ舊物破壊ニアルヲ以テ一
 朝コレヲノモノヲ斬伐シ可惜ヲ佐保姫ヲシテ裸

西本梅村
 史
 志



々ナラシメタリ下流園部川トナル
 寛永年間伊預國師カ九山ハ谷ノ勝地ヲトスルガ
 爲ニ屢々コ、ニ節ヲ駐メ愛敬シタルモ寺廟ヲ置
 クノ地ナキヲ以テ果サバキ領主君臣モ屢来リ
 訪ヒタルモ漢ノ光榮ヲ奈揚スルニ至ラザリシ今
 ヤ文明ノ餘澤ノ僻陬ニ及ビ奇ハ稱セラレ匡ニ、
 ハ顯ハレ南摩綱紀ノ詩トナリテ名ヲ四方ニ傳ヘ
 知所モ来レバ騷客モ至リ或ハ稱揚シテ豊ノ耶馬
 漢ニ比シ備ノ豪谷ニ較マ以テ遜色無シトマデ云
 フニ至レリ其ノ新名瑠璃溪ハ郡宰三宅榎陰カ三
 十八年十月ニ命ゼシモノ會仙岩玉走盤渴叶瀾ハ
 上野盤山ノ下セシ名ニシテ千秋潭ハ榎陰ノ命ス

ル所而シテ鳴瀑ハ古来ノ傳稱スルモノ四十年十
 一月志賀知川来遊シ溪中ノ小亭ニ題シテ珊々閣
 トス四十二年五月櫻井桂村来リテ錦繡岩生禪石
 蟠踞泉雙龍洲水昌蓐爛柯石ノ大勝ヲ加テ明治四
 十年初夏皇太子殿下山隈行啓ノ際写真ヲ奉リ翌
 年秋近衛大瀧習ノ際ニモ撮影シテ恭ク天覽ニ供
 じ奉リ

瑠璃溪の写真

天覽あらせられしころ

御歌所主事 阪 正臣

うつしとくさひまうをなす乃水とを切け玉のみましよ

東宮侍講 本居 豊親

瑠璃溪の山ありおのれいさくさききよんこのたうせよ

西本梅村

丹波志

予くこととて初め初くあれはうたもさあはあうちして

あつちう後すうの用くこれいはとをぬきまてあをひたる

うたけつと男ふれを岩窟にすくしうあつち水のいさうふ

臨陽の字をこそ男ふことをいふ 文子傳 村正辭

世のちをこそくくして御つものあつちさうやけさうの谷風

あつちさうの谷風とあれはうたもさあはあうちして

親臨陽 東京傳 教

因卷耳車心目奪奪流花溪陽巖岫夢魂一夜冷如水
身立臨陽上り

寄臨陽陰序 土屋弘

旭川上流曰琉璃溪發源於振丹界捨嶺南達巖麓
為國部川下入嵐峽溪屬丹波船井郡西本梅村有

鳴瀑渴叫潤玉走盤會仙巖昇之勝暮春之候韻士
往々爲曲水流觴之娛夏日則樹陰垂釣或吟風嘯
月而至兩岸楓松曬錦秋陽則奇觀不可言要之其
絕勝不讓嵐峽云竹内清齋用馬真機寫實况遠寄
索題詠因賦贈明治丙午暮之秋

東京本郷東畔迂史 土屋 弘

捨嶺之南沂旭川錦雲兩岸關秋妍雨過絕壁奔雷激
湍急層巖飛空旋盤石平鋪流碧玉蚪潭澄澈鑑青天
何當吟履攬奇勝嵐峽琉璃溪論後先

寄題琉璃溪 東京 福井學圃

會仙巖

瑠璃溪水碧巖面似床平每夜仙靈會天風廣樂鳥

西本梅村

鳴瀑

測々漁陽鼓冷々相靈瑟四顧不見人萬巖流泉疾

渴蚪澗

一水自天落夕陽濛欲烟渴蚪飲不盡碧澗長莖然

千秋潭

水匯峭岩關鏡查明蕪空漁翁何所樂吹動釣絲風

玉走盤

如彈丸脫手如珠玉走盤磨之語言妙流水下回灘

遊瑠璃溪

會仙鳴瀑渴蚪澗先輩題名寧可刪小子吾曹無一句

小書小閣兩冊々

寄顯瑠璃溪

東京

結城蓄堂

會仙巖

萬笏排空聳谿壑吹滿衿夜深靈起月照會仙巖

玉走盤

石堆春水滑苑如玉奔盤如此清幽處流觴可以歡

渴蚪澗

殘楓色猶絢一夜空滿山渴蚪來飲澗○躍玉珊々

鳴瀑布

餘暉翻峭壁霜葉燥然明危瀑在何處雲深不碍聲

瑠璃溪記文小品

京都

櫻井桂村

鳴瀑布

飛流懸巖水烟四迸比之巨虛亦或可乎但

愧詩才讓李太白不知其幾籌

西本梅村

錦繡岩

賜無一片錦繡 寧能加粗飾 石之怒氣 吹沫如

坐禪石

而 獨縮頭瞪若其後 樹下石上 冷心如雲 孤影臨水 參禪三味 固

蟬竦泉

師解脫之遺風 自然躍出 夕陽與水光相映發 虹彩燦爛 忽橫碧空 奇勝

渴蚪澗

變幻 不亦一幅活畫乎哉 煩渴之叫 向澗奔騰 怒聲如虎 勢不可當 或

之過失

雙龍澗

水流經而添勢 跳巖碎石 一雙驪龍 爭擢大玉 出沒深澗 具壯觀足盛騷人之氣象矣

玉走盤

一大石成盤樣 千萬之珠玉 宛轉陸離 如飛如 走 亦是仙境之遊樂哉

水晶簾

水晶簾子 珊珊成聲 高掛之絕壁 一鯨一咏 蘭亭之興趣 聊將擬焉

爛柯石

平坦石面 宛然碁局 群仙時來 閑鳥驚獸 其

西本梅村

樂不知經幾千萬年 傍觀爛柯亦不知幾千萬客

會仙巖

瑠璃世界 群仙所會 千奇萬勝 不可枚舉 一朝付與人間 以容誘引 騷人韻士 文化波及仙境 是豈莫昇平奎運之駸々 進步者乎哉

寄題 瑠璃溪

京都

福原周峰

地是山陰道 瑠璃屬僻鄉 攀躋難避險 應接不禁忙 勝概詩朴富 風煙畫趣長 人乘白雲至 仙境破天荒

遊 瑠璃溪

富岡 鐵齋

叫巖喝石塞 屏巖巖躡躡 身爲往還 恠得怒雷震脚底 審聞激水濺溪山

山尺蒼巖翠 四圍一條懸水向天飛 幾回欲寫無成效 恰入寶山空手歸

遊 瑠璃溪

同

生駒 膽山

幽徑穿山幾 轉回水聲導我討 奇來溪流一道三十步 盤石層々滑似苔

題 瑠璃溪

同

大竹 蔣運

溪路幽深境是仙 雲根落落水濺々 吟窓昨夜探奇夢 飛度瑠璃一碧天

寄 瑠璃溪圖

同

木村 擇堂

叫潭仙石倚雲梯 一碧瑠璃數曲溪 滑水跳奔盤上玉 飛泉噴出樹間霓 休言丹國偏取境 須識 青宮入御 題昨夜此圖 天外落山靈 引夢々頻迷

西本梅村

西本梅村

與生駒膽山寺所愛山竹內清齋語元同遊玩
瑤溪因次韻時峯南摩翁寄題諸韻

同 杉本頑石

溪上巉巖極在奇
虎踞龍蟠各弄姿
澗水為潭又為瀑
淙淙洗身與世離
岸楓飽霜樹欹斜
碧潭倒映錦繡枝
嵐峽之奇常見慣
此溪在時今始知
南翁未到寄題在
我行豈獨可無詩
竹氏囊闡山靈秘
更向世人欲為之
遠迎吾曹若遊跡
半日逍遙白雲湄

遊瑤溪

同 寺所愛山

列峙巖障天造奇
恍見飛舞袖仙姿
水是瑤山錦繡
楓紅柏翠秋陸離
駭龍奔逸渴蚪怒
餘沫亂灑夕陽枝
東道主人元伯在
厚意難忝抵舊知
就亭傾酒聽仙樂

巖瀑千秋洗惡詩
如此勝概世罕匹
誰懸佳句且酬之
醉遊盡日興難盡
回頭幾立暮溪湄

寄題瑤溪

同 遠藤丹溪

奇峰夾水戴層巖
樹影雲色也不凡
莫是神仙幽隱地
洞天深處碧巖巖

寄題瑤溪

結方南秋

丹北仙區世未知
琉璃溪勝近聞奇
山靈也似趁時勢
今代始開神秘來

琉璃溪四景

同

會仙巖

溪間水奏琴巖上雲為幄
想見會群仙悠揚送天樂

玉走盤

西本梅村

激流奔石上咫尺作奇觀飛沫多於雨珊珊玉走盤

渴蚪澗

巖陰水幾竿無復架雲棧知有渴蚪潛夜深來飲澗

鳴瀑

峭壁屹然立恍聽山怒辯奔雷不知處飛瀑隔雲高

寄題玩琉璃

大阪

田部苔園

截山奔瀑捲飛濤洞裏乾坤氣象豪奇景一從經覽碧琉璃帶瑞雲高

遊玩溪會仙巖

常陸

若生園榮

楓樹千株舞似錦溪流一道綠於藍吾來坐會仙巖上
半日閑忘塵外談

玩琉璃題詩次可峰先生韻

越中

松長立西

千尺蒼崑圍爲奇水聲激石洗天姿神鏡鬼削造化秘
雲錦屏風光陸離矧伊青女黃點漆楓葉千枝復萬枝
映水乾似開明鏡雲掩屏幃愧世知韻客騷士尋景到
風光續々登畫詩好是勝區絕景外明月清風又補之
自疑此間天地別可插天下琉璃湄

同

同

片口江東

竹氏頻說琉璃溪奇詩畫併見江山姿南翁題詩最俊
逸佳句天來光陸離奇勝埋沒千萬古關出發秘筆一
枝譬如山陽於耶馬依君勝區天下知奔湍爲瀑崑崙
虎拮嶠或以長舌詩霜枝絢爛秋殊好語家金玉描盡
之何時同袖攬勝景魂飛雲白水碧湄

題琉璃溪圖

仔藤虛堂

西本梅村

丹波

古溪遠與人間隔疑是神龍上天迹巖麓渣流無點塵
潭光碧似琉璃碧

寄題琉璃溪園

播磨 八木 天川

琴聲石澗水屈曲為奔泉溪樹花織錦危崖松倒懸如
此好詩如此景變絕應有天下傳

題琉璃溪

美作 小澤 看山

溪日琉璃名已奇無山無水不清奇懸崖之下鳴瀑響
雲影嵐光相映奇怪品起伏詭序態急湍奔騰勢尤奇
霜後楓林殊堪賞葉々皆紅色々奇如此勝境不顯世
少靈由來秘具奇此勝一上名士筆袋秘白々巧吐奇
果誠琉璃溪之名勝江湖喧傳至稱奇何處佳勝可以比
唯有鎮西馬溪奇我亦欲做名士咏才拙詩句未能奇

恍然一夜幽窓夢探遍琉璃山水奇

五遊琉璃溪賦所感

丹波 三宅 擬陰

丹州有幽境名曰琉璃溪連亘十八町自南北低巖平
鋪全面質潤滑行泥百泉繞上下透明如玉犀兩崖楓
樹鬱徑通行不送老儒姓上野呵筆作詩題上謂會仙
巖氣爽絕寸壑具次玉走盤細鱗掠玻璃又次渴蚪澗
水擊掣虹霓最下謂鳴瀑怪岩似狡狴潭是溪中觀酒
茶宜相携距京程不遠僅在十里西何故人到少空處
猿鹿栖古來賢良士經綸時俗賸貽晦不求聞或與此
溪齊

千秋潭記

同

丹波國琉璃溪之語部由變幻奇觀可以賞咏不盡也

西本梅村

丹波國志

各有命題曰會仙岩曰玉走盤曰渴蚪澗曰鳴瀑
乃溪口而距渴蚪澗殆七八町其間九景無復可以賞
咏不盡也然瀑之上有一小潭幅員僅十二三步碧
水瀟漫玲瓏明徹淺深不以易測焉巨岩怪石圍繞其
上下獅兒如蹲蟒蛇如蟠危峰千尺壁立其側面翠苔
點綴杉檜穿房藤蘿纏綿倒影漾々虹霓一吐其變幻
奇觀與他語部曲相伯仲可以賞咏是不盡也予以爲
夫會仙岩也乾遂坤閣玉走盤也滑轉跳珠皆清泉之
所瀉々下之勢奔逸百丈激擊諸巖吼哮蜿蜒其快恰
似蚪之渴而搜飲也歟故所以名題謂渴蚪澗也歟若
其然則蚪之昇降必渴々必飲々必此潭々之水也可
以千秋飲不盡也歟因私名題曰千秋潭矣然不問牽

強附會以招識者之誇議也遂記之

珊々閣 丹波 上野盤山

懸檐峰影枕流湍簾幙風清石氣寒深夜應疑仙珮過
珊々閣外水珊々

玉走盤

淙々緩々響出叢低處水聲高處風到此爭流石如砥
明珠萬斛走盤中

渴蚪澗

山光瀟淡洞雲歸耳底淙々冷濕衣疑是渴蚪降飲澗
奔泉傾瀉劈巖飛

遊琉璃溪

遠登幽谷氣愈清溪水斜々石有聲况復丹楓幾千樹

丹波 上野 志

夕陽欲促照眼明

遊琉璃溪次羽峯先生瑤韻 再跋 竹內清齋

琉璃之岳林最奇水石峯壑競姿一自翁著題咏琉璃
光彩忽陸離錦繡岩兮端竦泉掩映兩崖萬楓枝紅雲
堆裏涼々響流碎錦奇可知蹤客韻士未相賞怪巖
奇石入新詩々々傳寫播遠通々々人車珍藏之我亦
漫欲就驥尾推歐立盡仙巖湄

瑤溪次羽峯南摩先生韵二首

吉川江村

名區何論剡中奇三山肯領尋仙姿瑤溪溪頭峯岬岨
琪樹瑤草俱離々抱朴抱真少人到仙鶴高巢掛雲枝
維石巖々流瀨々未往惟有樵夫知誰寄倪迂高脫筆

併得江湖百家詩吾儕未醫烟霞癩探奇直欲齋糧之

吟詩展畫百不足一夜夢繞溪之湄

磻研合皆溪壑奇孱癯高列仙娥姿烟雲襲積悶勝境
有時瑤闕光陸離居然山勢萬馬奔百里壑蔓將峰枝
便是天然活圖畫只須巨筆風光知碩人闡幽跋涉後
也尋書札檢贈詩以文爲詩々爲文胸中却怪快吐之
吾曹長往是何日傾蓋同賞瑤瑤湄

南摩羽峯ノ詩ハ左ノ如シ

岩石崔嵬奇更奇披麻斧劈競逸姿一水屈曲未激怒
危瀑爲湍合或離飽霜岸樹相照綴雲錦掩映千萬枝
如此佳勝世所少山靈深秘人未知竹氏 竹内 一朝發
其秘遠什驛使畫與詩々所不及画寫出畫所不至詩

丹波
志

補之晴窓吟詩又讀画恍然自在玩溪湄
 此ノ溪間ノ小景ニ於テ遊者賞者ノ春秋ニ多クシ
 テ夏季ニ鮮ク冬期ニ絶無ナルハ慨クバシ詩文ニ
 歌俳ニ一語半句ノ雪時ニ及ホサハルハ嘆クバシ
 雪後結氷スルヤ東溪岩間ノ滴々氷結シテ水晶簾
 ヲ横披スル處斜日之ヲ照映シテ光彩アル紫帳ヲ
 張ル如キ得モ言ハレマ佳趣アリ微雪残雪又可ナ
 リ只惜ムラクハ地僻ニシテ景小ニ未世人ノ耳目
 ニ及映セガルナリ

摩氣村 大字 口人 口司 半田 大西

船枝 下新江 竹井 穴人

此ノ村邑ハ本郡ノ西位ニアリテ篠山街道線中ニ
 アリ三方ハ山谷之ヲ繞リ東方園部ニ通ル所ニ
 差ク平地アリ以テ耕耨スバシ口人ニ上中下ノ舊
 三村アリ口司ニ上口人絹掛ノ小字アリ十五六年
 ノ頃一村トナリシモノ大西ハ西山大坪ノ舊ニ村
 ヲリ成ル大字ナリ竹井ハ摩氣篠田今井辻ヨリ成
 ル之ヲ上新江トシ又改メテ竹井村トセシガ今ハ
 摩氣ノ大字トナレリ

五百五十四戸 三千百六十五人 明治二十九年 文
 久高二百五十八并七合 園部鎮

摩氣村

摩氣村志

園部町ヲ出テ東南ニ行キ園部村ヲ過ギ小坂アリ
 高杭峠ト云フ蛟涎ニテ上下シ一野ニ出ヅ其幅半
 町乃至一町有餘ニシテ長サハ十町ニ到ル人家蘭
 田米田ノ間ニ點綴ス冬季麥作ニ適セズ田産以テ
 人口ヲ養フニ足ラズ山ニ稼ヒテ具ノ款ヲ補フ此
 ノ一小地ハ山ヲ隔テ、摩氣ニ交ル東方ノ一山コ
 レヲ右越スレバ大内ニ達スバク之ヲ左行スレバ
 八木ノ嶋ニ至ルヲ得山路頗ル險シ山皆禿ス一ノ
 高戸無シ柴薪ヲ輸出シテ園部ニ粥ギ必需品ヲ買
 フテ歸ル大古ヨリ此ノ如シト云フ
 麻氣神社ハ摩氣ニアリ式内ニシテ名神ナリ丹波
 道主命ヲ祭ルト云ヒシガ今奉祀スル所ヲ聞ケバ

摩氣村

御食津彦御食津媛ナリ名神トハ社ヲ指シテ云フ
 稲ナリ明神ト混同ス可ラズ明神トハ神ヲ指シテ
 云フ稲ナリ而シテ又其ノ宮地ノ主神ト勸請ノ神
 トヲ分タンガ爲ノ稲ナリ故ニ明神トハ其ノ宮地
 ノ主宰神ナリト知ルベシ
 舊祭式ニハ田植ノトアリ巫コレヲ行フ又古梳ニ
 飯ヲ大盛りシテ供スルトアリ神名ニ因ミテ稻ガ
 爲セシナラシ舊曆八月晦日ヲ以テ之ヲ舉行セシ
 ガ維新後十月十五日一郡一般ノ祭日ニ編入セラ
 レタリ
 一説ニ丹波國造ノ祖先ナル天照國照彦火明命ヲ
 祭ルト云フ當國ニ於テハ最古神社ノ部ニ入ルモ

丹波國志
 摩氣村

ノトス門前ノ石牌ニ延喜式内摩氣大社ノ八字ヲ
 鐫ル本社ニ殿之ヲ一棟ノ下ニ收ム茅屋ノ樓門高
 ク簷ハ左右ニ開キアリ其内ハ空位ナリ檢非違使
 ヲ置キレモノカ然ラズンバ兩部ノ時ニ仁王ヲ安
 キレナラシ
 文徳天皇仁壽三年地震アルヲ以テ奉幣ノ式アリ
 朝廷ヨリ勅使来リシナリ貞觀元年加後五位下麻
 氣神社從五位上ノ文モ見ユ
 披松明ハ穴人ノ堂前ニ行ヘル盆ノ古式ナルガ明
 治六七年頃ヨリ無クナレリ松ヲ立ツル高廿五六
 間ソノ上ニ麻桿ヲ縛シ之ヲ下ヨリ焚キ立ツルナ
 リ慶応山ニ供スル爲トゾ舊曆七月二十四日ノ下

トス
 新江穴人ノ産米ハ上等ナリ
 穴人ノ風穴ハ埴生新田ニ卦ク途中ニアリ道南ニ
 アリ其ノ標示ナキヲ以テ行人往々コレヲ知ラズ
 ニテ過ガルハ惜ムマシ
 大彦命ノ裔ヲ穴人朝臣ト云フ穴人ノ地名珍ラシ
 其ノ人ノ封邑カ
 穴人 高二百七石一斗九升 園部領

摩氣村
 史記
 志

穴、類
 風穴、邊郡初
 加賀國江沼郡勅
 使村ニ花山法皇ノ
 古迹ニカク亂ノ穴
 小名附テシタル洞
 穴アリ且レハ古人カ
 流ラシタル所トカ
 ヤ
 摩氣村

中央兩崖ニ夾テ、長方形ノ孔穴ト左方斜ニ上
 ナル不等角ノ小孔ハ即チ風穴ニシテ一ハ長サ四
 尺幅一尺許具ノ小ナルモハ四五寸四方ナリ冬
 時ハ温風ヲ噴キ夏時ハ冷風ヲ吹ク外氣ノ稀濃ニ
 ヲリ差アリ温冷ヲ感スルハ外氣ノ寒熱コレヲシ
 テ然ラシムルハ物理学氣象學ニテ知リ得ベシ發
 見也他國ニテ似タル所ハ備後比婆郡久代村宇河
 内湯ノ設山ノ麓ニアリ盛夏ト雖ソノ内ニ氷アリ
 今ハ蠶種紙貯藏所トナル 近江國犬上郡芥谷村河原ノマナリ
 腰掛石ソノ前ニ横ルヲ以テ夏時行旅コレニ凭リ
 涼ヲ納レ忽地身心ノ爽快ヲ覺ヘ復タ夏ナルヲ知
 ラス惜ムラクハ地僻ニシテ人ノ知ル少キヲ

摩氣村
 地僻ニシテ人ノ知ル少キヲ

氷上郡五個野ニモ亦之アリ和泉國和泉郡ノ牛瀧
 山ヤ甲斐國身延山麓谷題目堂ノ傍ニモ亦コレア
 リ形状景況大差ナシ理亦同シ
 船坂ハ園部ノ西ニ里弱ニ在リ二百八十九石五斗
 九升五合園部領足利氏ノ時ニハ招下嘉兵衛之綱
 ノ領地 豊臣秀吉ノ幼時遠江ニ之キ土豪招下嘉
 兵衛ノ家ニ寄食ス秀吉ノ強大ナルニ及ビ之綱已
 ニ没ス其子右兵衛ニ舟坂ノ田三千石ヲ賜フテ相
 伴衆ニ列セシメ從五位下石見守トス天正十八年
 ニ至リ久能城一万六千石ニ改封セラル嘉兵衛一
 ニ加兵衛ニ作ル或ハ云フ秀吉或ル時之綱ヲ召シ
 テ丹波ニテ三千石關東ニテ七千石ヲ賜フテ曰ハ

是ハ汝ノ金ヲ攘シテ償ヒノ料ナリト蓋シ秀吉
 カ其家ヲ出ル時旅費ヲ盗シテ奔シテアル故トゲ
 九岳寺ハ船坂小字大門ニアリ嶋尾山ト云フ鐘銘
 ニハ鷲ノ字ヲ以テ嶋ノ字ニ換ヘタリ本山ハ京都
 ノ西御室仁和寺ニシテ古義真言宗而シテ此ノ寺
 ハ中本山ノ寺格ナリ皇子覺行法親王ノ御墓アル
 テ以テ宮内省ノ保護アリ 今ハ御陵ト共ニ寺ト
 別ニトナル御陵トハ白河法皇御分骨ノ所ヲ云フ
 ナリ
 本尊 三面千手観音 木立像五尺二寸八分 誓
 文會誓主歎ノ作トス年代不詳
 脇士 十一面観音 同作 不動尊 弘法大師ノ

作共ニ立像五尺ノ長
 開山 弘法大師 年紀 嵯峨天皇ノ弘仁元年
 再建 白河天皇ノ永保年中 伽藍七堂建立寺鎮
 船井郡一圓 鎮守神 摩氣神社ヲ以テ當ツ 本
 坊 或孰坊中坊真坊池ノ坊上坊アリ 覺行法親
 王ハ白河天皇ノ皇子ナリ天皇ノ八皇子ソノ六僧
 トナリ玉ヲ法親王ノ始メナリ覺行ハ其ノ弟三永
 保三年仁和寺ニテ御得度アリ御年十一康和元年
 親王トナリ此寺ニ任職シ長治二年酉十月十八日
 遷化アリ御年三十一仁和寺ニ於テ三世而シテ當
 寺ニテ中興タリ
 永正享保ノ間兵火ニ罹リ烏有トナル幸ニシテ本

摩氣村

尊兩取士ノ回祿ヲ免レタルヲ以テ昔ノ份ヲ倍ブ
 ニ足ル天正年間ニハ五百石ノ寺封アリシヲ明智
 惟任氏ニ押收セラレ沉淪シタリ仁王門具ノ災ヲ
 免レテ存ス
 元和九年銀玉小出吉次候ニヨリテ修理セラレテ少
 シク舊規ニ復シ慶安三年九月小出吉親候ニ由リ
 テ本堂再建仁王門修繕ノヲアリ且ツ境内ノ高三
 斗八升七合ヲ免稅セラル 地域八百三十七坪
 田地價格一千三十五圓此ノ收入ニ十七石 祠堂
 金二百三十圓ヲ利殖シ修繕費トス 無檀
 本堂二王門 參籠所 持佛堂 鐘樓 庫裏此ニ茅
 寶藏土藏 隱寮 長屋門等アリ 門外ニ丹波團

内三十三所ノ第ニ番觀音札所アリ七月十日千日参り群集ス

大觀書體本邦古凡

隨求菩薩 木坐像三寸五分 弘法大師 木坐像一尺二寸

阿彌陀 惠心作 木坐像三尺一寸 觀音 惠心作 勢至

惠心作 二王 雲慶作 九尺五寸 不動画 鳥羽借正

十六善神 覺行法親王遺愛品 辨財天 灰像 五寸二分 護摩ノ灰ニテ作ルト云、弘

法大師作 冷泉爲村卿和歌 仙人鳥花

三幅對狩野常信

境外所有地 二町六畝十四步 畑一段三畝十九

步 山林一町二段一畝二十七步 宅五畝二畝十

步

偏易子書千
龍安齋制之密

九 羽 寺

步 藪二段十六步

御陵御墓地 周圍二十六間八分 木柵ヲ以テ環

ラシ 古石塔二基 一、三尺計 一、二尺餘 柵外ニ

表示杭アリ覺行法親王御墓北城原標ト書ス制札

アリ 一猥ニ城內ニ立入ルヲ 一鳥獸等ヲ捕ム

ヲ 一竹木ヲ伐ムヲ 右令禁止者也 明治二十

五年三月 官 内省

多紀郡曾我部庄畑村八百里ニ住セル畑七郎左衛

門、下シタル波多野元秀ノ感狀 多紀郡
参考者

舟并九品方分同多我谷ノ由奥分ヲ奉為合力進

ム一々獲宰た下中波ハ上々誇ル

摩氣村

弘治廿十月廿二日

孫四郎 元秀

知七郎 辰次郎

半田 南ト西トノ小部落アリ南半田ノ舊高百三十七石 文久度百六十三石七斗七升六合 龜山領西半田百五十石 國部領 文久古高同 此内新平民十二戸半田住民六十三戸 龜山領國部領相錯ハル 是レハ維新ノ當時ノ丁

地勢西側ノ山脈ニ狭ノテ南北ニ洞通スルノ長サ二十町幅半町乃至一町ノ所ニアリテ南ハ口人ニ接シ北ハ大坪ニ交ハル 稲田藺田相屬ス上田一段地價四十圓實價具ノ三倍ニ昇ル 是レ二十五六年ノ丁ナリ

摩氣村

下新江 高三百石九斗四升 國部領 上口人 高二百二十九石 中口人 二百三十七石 下口人 高百六十三石 文久度龜山領百九十三石二升 下口人 三百十三石九斗五升 上口人 二百八十四石五斗六升六合 上新江 百七十八石七斗七升九合 國部領

小字大坪 百五十四石一斗七升四合 國部領

尋常小學 生徒百五十名 教師二名 実人ニモ下新江ニモアリ 陋隘ナリ

産物 疊表 婦人冬期ノ内職トシテ製出ス一人ニテ一日ニ五枚ヲ編ムベシ五枚ノ相場二十錢七八年ノ時價七十錢藺及ビ絲ノ原料凡具ノ半價故

摩氣村志

ニ手間賃ノミニテ三十五銭ヲ得
半田ノ澤田ハ山名陸奥守氏清ガ後檢ナル小林修
理亮時直ヨリ出テ天正七國迄ハ小林民部少輔重
永同修理進重範等將軍家昵近ノ臣ニテアリシカ
山名氏丹波ニ守護タルヨリ應仁ノ乱ニ至ル迄ニ
山名小林共ニ中絶セラルヲ七頭ノ内ナルヲ以テ再
興シ第五陣ノ座トナリ又波多野七後澤田平左衛
門子平太夫共ニ藤堂佐渡守高虎ニ臣事ス 陣座
ノトハ多紀郡村雲村ノ部ニ出ス
日魯戰役全勝紀念ノ爲ニ林業基礎經營ノ丁起リ
此ノ村ハ諸村ニ先立ツテ之ヲ計畫セルモ一時ニ
實行スル丁ノ困難ナル事情アルヲ以テ之ヲ五期

ニ分チ第一期第二期ハ山林八町歩第三期以後ハ
同十町歩ゾ、ヲ合併スルトトナシ諸部落ヨリ差
出ヌ振議ニ整令明治四十二年第一期ノ實行ヲ爲
セリ但各期ノ期間ハ之ヲ三年ト定ム是レ本郡ニ
於テ第一着手ニ依ルモノトス

龍穩寺 曹洞宗 開山 北嶽省春禪師 大徳ノ
僧ナリ末寺十餘アリ

長命村ノ老人會 船升郡摩氣村ハ総戸數五百六
十戸ノ村ナルガ珍ラシクモソノ内ニ七十歳以上
ノ高齡者實ニ百二十六名アリ何レモ強健ニテ約
九十名ハ今尚相當農事ニ従ヒ一家ノ經濟ヲ補ヒ
ツ、アル由ナリ山村々長ハ二十日同村ノ學校ニ

摩氣村

丹波志

古稀以上ノ高齢者會ヲ催シ兒童ノ演技學藝品等
 ヲ觀覽セシメタル後老人ノ追憶談ヲ聽キ大場郡
 長其他有志ハ所感ヲ述ベ誠ニ日出夕クモ趣味ア
 ル會合ヲ催シタリ由來同村ハ長命村トシテ名高
 ク數年前迄ハ百歳以上ノ者ニ名アリ目下モ九十
 歳以上ノ者七名アリト

川邊村 大字 熊原 大戸 高屋 船岡 越方

佐切

古時霧ノ庄ト云ヘルハ此所等邊ヲト云フ一ニ桐
 ノ庄ニ作ル而シテ今ヤ桐ノ庄ハ隣村ノ名トナレ

二百八十七戸 一千五百三十二人 明治二十九年

大戸ハ旗下瀧川彦五郎領 佐切越方ハ 仙洞御
 領 熊原高屋船岡ハ 園部藩領

仙洞トハ湊皇上皇ノ御所ニシテ當時御所ノ内ト
 稱スル今ノ御苑中日ノ門前通り東南ニアリテ東

ハ寺町ニ接ス此ノ御領ハ京都ニ在任スル幕府ノ
 代官ナルモノ代ヲテ支配シ上納ノ米ハ二條城内

川邊村

二牧ノ時ヲ以テ仙洞御所ニ輸リ又ハ賣却シテ金
 納トモスルナリ名ハ御領主ナレドモ實ハ無シ領
 地ヨリ直納スルヲアリト雖ヤハリ代官ノ命ナケ
 レバ之ヲ爲ス不能ハズ
 産物米實中等薪炭林木松茸ヲ多ク出ス麻ハ河内
 ニ出ヅ高屋ノ米ハ美ナリ
 村内大堰川ノ上ニアリテ川添村内ヲ貫キ東方ニ
 佐切越方アリ西ニ大戸熊原高屋船岡松尾アリ
 船岡小字横谷ノ地ハ田野アリテ實ノリ悪シク而
 シテ領主ハ租ヲ徴シ賦ヲ課スルヲ以テ之ガ所有
 主タルモノハ年々領主ニ請ヒ檢見ヲ要求ス代官
 ノ出張ニハ又失費多キヲ以テ得ソノ失ヲ償ハズ

川邊村

之ヲ廢田トセシニモ許サレズ已ムヲ得ズ他人ニ
 讓與セントスルモ應ズルモノ無シ所有主疲弊シ
 到底持テ切レヌトスレバ酒三升ヲ添ヘ他ノ有力
 ナル名主ニ懇願シテ其ノ所有者タラシテヲ求ム
 其ノ名主モ迷惑ナルハ知レドモ情實上已ムヲ得
 ズ之ヲ諾スルヲ常トシ横谷ノ地トシ云ハバ名主
 ノ厄トナシタルモノモ今ハ百有餘圓ノ價ニ昇
 シリ二十四五年ノ差ニシテ斯ノ如キ變遷アリタ
 リ今ヨリ數年ヲ経バ又更ニ騰昂センモ知レズ明治
 二十五年八月記ス
 地價七萬七千〇二十五圓餘 廿九年ノ水害ニテ
 三分ノ一ヲ減ズ

川邊村
 志

文政元年主基首和歌十八首ノ内

朝倉山早歌集

右ツ轉正位下 藤原朝臣隆光

白たうらうほ代のしと朝倉あまのくみまひ早うけま

山椒 朝倉谷ニ産スルモノ枝ニ刺戟ナク其ノ味
辛辣ノ氣少キヲ以テ世人ノ歡迎ヲ買丹波ノ大名
六藩ソノ幕府ニ献止物トシテ捧ガル物ハ各異ナ
ルモ一トシテ山椒ノ之ナキハ無シ其ノ大粒ナル
モノヲ撰リ黒實ヲ去リ壺ニ收メテ送ル幕府モ多
量ノ辛味品ヲ如何ニトモ爲ス能ハズ之ヲ臣下ニ
分賜シ残余ハ献残屋ニ投賣リスルナリ節用集伊
呂波字引ノ類ニ蜀椒トカキ和訓ニあさくらさく
しようとアル蜀椒ハ支那ノ蜀州産ノ椒ヲ云フ

朝倉や木乃丸つふ乃高山椒

菱友

近頃外國ノモ輸出ス外國ニテハ *Japan Bell Pepper*

日本胡椒ノ名モテ香料ノ一トセリ揮發油及ビ脂

肪アリテ香氣佳良味辛烈ナレバナリ 子ノ小ナ

ルモノヲビンシヨウト呼ベリ

城址高屋ニアリ

金輪岩 河内ニアリ

河内ヨリ市森ニ通スル山路アリ一路ハ市森ノ瀑

上ニ出テ其ノ水源ヲ見ルベシ船井郡須知村市森

ノ部ニ出ス

賤ヶ嶽ノ戦ニ蜂須賀小六正勝ノ功アリシヲ賞シ

秀吉ヨリ河内ノ田五千石ヲ給ストアリ此ノ邊リ

川邊村

河内志

ベシ

尋常小學ハ河内ニアリ

製絲場大戸ニアリニ十九年ノ創始ニテ五十人機

械ヲ居ウ

一貫文 丹波國山田莊高屋村 佐竹和泉守殿山

田千次郎殿小倭十郎殿村上芳万丸殿錢ノ重康正

二年造内引有ニ見エ 山田莊トハ何處ニカ

孝女 垣内童ハ宇船岡ノ飲食店垣村九十郎ノ長

女ナリ父ノ家ハ資産祐ナリシガ明治二十六年市

町村制發布以前ニ戸長トナツラヨリ身代表ハ飲

食店ニマテ成リ下リタリ之ヲ挽回セント七十歳

ノ實母及ビ妻ト儀三郎七五郎童貞吉ノ四子ヲ家

ニ残シ大坂差シテ出掛ケ古鐵匠ノ雇ハレ人トナ

リ一身ノ餬口ハ成シ得ルモ故郷ハノ仕送りハ望

ニ任セズ一同貧困ニ迫リシ上ニ儀三郎ハ肺病ニ

罹リ十九歳ニテ没シ又母ハ之ヲ悲ニ嘆キ仕事モ

年ニ附カズスルヲ童女時ニ十一歳ナル手弱キ働

モテ母ヲ助ケツ慰メツ其ノ日ノ送ル内ニ母

ノ目ニ薄霧カ、リ星サハ入りタレバ童ノ嘆ハ一

方ナラズ母ニハ夫レト亦明カサズ己獨リ心配シ

色々トノ工面ニテ 殿ノ腸ヤ猿ノ肝ナド目薬ニナ

レトシ聞ケバ具ノ物ヲ手ニ入レテ羞メタルモ甲

斐ナキヨリ一里モアル國部ノ醫者許手ヲ曳キ行

キ通ヒタリ醫者ハ手後レナリトテ應セズ童ハ此

川邊村

丹波志

ノ上ハ神佛ニ歸依祈禱スルヨリ仕方ナシト村ノ
 社ヤ寺ニ日参夜参ソノ甲斐ナク母ハ終ニ盲トナ
 レリ童ノ悲嘆ハ世ノ常ナラズ今ハ身ヲ殺シテモ
 母ノ明ヲ祈ラント立壁ト云ヘル見ルモ恐コシキ
 涙ニ至リ身ヲ躍ラシテ入水センモノト神明佛陀
 ニ心ヲ籠メテ祈リ已ニカフヨト岸ニ立テ忽然一
 考シテ思ヘラク身死シテ母ノ眼癒エサレバ徒ニ
 祖母ヤ母ヲ苦シムルナリト乃チ家ニ歸リ細脈モ
 テ煮焚キヨリ掃除ソノ他家事一切ヲ身ニ引受ケ
 旅客ノモテナシハ申ニ及バズ村ノ道著詣ニモ鉄
 ヲ擔ゲテ出テケルニゾ母ハ聲迎ヘントスルモ應
 ゼズ祖母二年ノ者病ヲモ爲シテ人年ニ掛ケズ四

川島村

十一年八十ニニテ死シ父ノ九十郎ハ中風ニテ危
 シトノ報ニ接シ急ニ旅費ヲ辦ジ大阪ニ赴キ人ノ
 助費ヲ得テ病院ニ入レ少々快方ニ赴キテレハ携
 ハテ郷里ニ歸リ病父盲母ヲ看護スルトハ今ノ世
 ニ珍ラシキ孝女ナリ 四十三年八月十五日京都府知事ヨリ
 大正一組ト褒書ヲ下ス
 文政元年十月十一日主基方丹改四御屏風六帖和
 歌十八首ノ内

高屋村夜静月清明 右ツ舞正五位下藤原朝臣隆光

君く代ハ高き山乃おもとたもきく苗代の種も産させ

大戸村 高四百七十三石八升八合

内 武百二十二石四斗九升三合 御代官所

武百五十石五斗九升五合 澁川源八知行所

川島村志

佐切村 高六十九石四斗六升 仙洞御所御料
 高屋村 高百五十九石五斗九合 澁川源八知行所
 熊原村 高九十二石二斗六升二合 園部藩領

高野 春日神社 南北朝時代ノ作り 一部明和ノ修理ニテ悪化セリトシテ
 時代ノ遺風ヲ存ス 蛙股其ノ他彫刻外欄間ノ手法等一致シテ精妙秀麗ナリ

梅田村 大字 坂井 東又 水原 上大久保
 下大久保 録谷下 録谷中 録谷奥
 人戸 四百八十戸 二千三百五十九人 三十九年
 遠見岩 強盜岩 ナドアリ 中古此ノ邊ハ盜窟ナ
 リシト云フ
 産物 朝倉山椒多シ ボンシヨウト云フ 品ハ實細
 ナリ 朝倉ノ方ハ刺少ク ボンシヨウニハ多シ
 船井郡鼓市郷ハ和名抄ニ見ユ 或ル人ノ云フ 梅田
 アタリノ古稱ナリト此ノ地ニ産スル粟ヲ鼓打粟
 ト云ヒ 訛リテテ、ウチ粟ト云ヒ 其ノ意ヲ年ノ内
 粟トスルハ非ナリトモ云ヘリ
 田原郷ノ古名ハ和名抄ニ出ヅ 此ノ邊リニヤ

梅田村

丹波
 志

梅田村

丹波志

一百七十四石八升二合	同	下村
一百四十二石九斗一升四合九勺	柴田知行所	坂井村
一百八十四石一升	龜山領	鎌谷村

六人部川ノ源ニアリ地勢天田ニ属スト雖本郡ノ地トナル郡界ハ梅田菟原ノ間ニ定メラル

梅田神社 宇三原ナル梅田橋畔ニアリ 至神

春日大明神 別祠 猿田考命 庚申ノ日参詣多シ

高帳寫

一 貳百三十九石五斗八升八合二勺	代官所支配	下大久保村
一 四百十三石三斗八升五合七勺	水野知行所	上大久保村
一 貳百五十六石七斗八升	龜山領	東又村
一 四百一十一石八斗六升七合七勺	同	水原村
一 貳百四十八石三斗	同	奥村
一 貳百六十四石一斗六升一合	同	中村

檜山村

檜山村	大字	橋爪	和田	井脇	中臺	大朴
井尻	八田	小野	檜山			
四百四十八戸	二千三百五十九人	明治三十九年調査				
區裁判所	村役場	小學校	警察署	郵便局		
旅人宿	雜貨店	寺	檜山ニアリ			
舊領主	柴田七九郎陣屋	檜山ニアリ	高五百二十			
五石ノ旗	下士ニシテ幕府直轄地ヲ支配シ氷上郡					
ニハ到ル	處管轄村落アリテ公儀御代官ノ名ヲ以					
テ稱令	ニ頓權勢ヲ施セリ					
中臺野	字中臺ニアリ一名四引野ト呼ブ其ノ小					
字四引ニ涉ルヲ以テナリ	東西十八町南北二町餘					
聚落具ノ間ニ散布ス	大ノ字山アリ盆ニハ火ヲ					

檜山志

焚キタルモ維新ノ際之ヲ廢絶ス升ハ當時實利ノ
 ナキモノハ遠慮會釋モ無ク打破シタルニ因リ是
 モ亦ソノ渦中ニ投ゼラレタルナリ山城ノ東山ニ
 毎年盆ニ大ノ宇ヲ點火スルノ壯觀アルニ模擬シ
 タルモノトス山ノ凹處ニ薪柴ヲ埋メ大字形ヲ爲
 サシノ夜ニ入り其レニ火ヲ點ナルナリ 大朴ノ
 冒山ニ於ケル高屋ノ十ノ宇等同ジ諸生ニハ火點
 レ岩アリ何レモ生靈ヲ迎ヘタルノ送り火トシテ
 十六夜ニ點火シタル習慣ニテ僧侶ノ勸誘ニヨリ
 テ初マリシモノト想ハル

和泉式部ノ著クテ西岸寺門前ノ山寺
 之ノ一尊トシテ又地爲ニ十一坪ノ宇五層ニ
 霜ヲ經タリ和國小字ノ
 モ傳フ傳フニハ
 スレドモ
 温泉
 迎リ
 養々
 岸寺ノ
 盆
 其西
 大
 火
 但對ノ
 意急ニ
 富富シ瘰
 其ノ間西
 取除キテ
 一四五〇年

京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵

和泉式部ノ墓 中臺小字櫻桃西岸寺門前ノ山手
 ニアリ卯塔高サ七尺地面ニ十一坪アリ正曆三年
 之コニ葬ルト云ハ今明治三十年迄九百十五星
 霜ヲ経タリ和田小字鮫ノ阪墓地内ニアルモノト
 モ傳フ傳ニ云ベリ式部女史痼疾ニ罹リ醫療百方
 スレドモ效ヲ奏セズ故ヲ以テ京都ヲ出デ但馬ノ
 温泉ニ浴セントテ此ノ地マデ来レルニ病患急ニ
 迫リ進退谷マルヲ以テ當所ノ伊藤某ニ寄寓シ療
 養セシニ本復ノ期ナク在再コ、ニ死ス具ノ間西
 岸寺ノ本尊ニ祈誓ヒタル縁ニヨリ屍ヲコ、ニ埋
 ム墓前ニ下馬牌アリレガ維新ノ際ニ取除カレタ
 リ 法名念稱專意比丘尼 正曆四年己年三月廿一日正午死

梅田村志

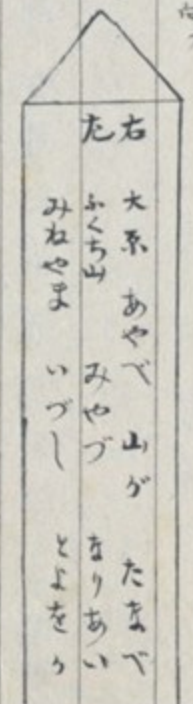


京都一條ノ北小川ノ誠心院ニ葬レリトモ云フ誓
 願寺ノ隣ニアリ誓願寺ガ三條ニ移ル時誠心院
 モ共ニ移リ墓ニ斬端ノ梅モ移サレ今ハ誓願寺ノ
 内ニアリト云フ
 天下橋ハ大字檜山ノ東端ニアリ幅一間半長二間ノ
 土橋ノミ何ヲ以テ此ノ名アル當時幕府ヲ天下ト
 唱ハ將軍ヲ天下様ト云ヒシカバ幕府建立ノ橋ナ
 ル故斯ク名ツタルナリ領主ニテ支辨ニ難キ程
 ノ建造修繕ハ幕府コレヲ直轄スルヲ今ノ國庫支
 辨ノ如シ此ノ一ハ橋何故天下普請タリヒヤ由緒
 詳ナラズ領主柴田ハ幕府ノ代官ヲ勤ムルヲ以テ
 之ヲ隨意處分スルノ権能ヲ有セリ他領ナラシニ

檜山村

ハ幕府ノ更復未往レ賦外ノ賦ヲ徴シ領主土民具
 ノ煩ニ耐ハサルナリ新道路開ケテヨリ此ノ橋ハ
 舊道ト共ニ草菜中ヲノ遺址ヲ留ム
 西岸寺 元ハ淨土宗ニテ誓願寺ト稱セシヲ寛永
 十年本郡胡麻ノ龍潭寺第ニ世龍礼和尚ヲ開山ト
 シ普洞宗ニ改ム往昔ハ勅願寺ニテ天智天皇ニ御
 由緒アリト言ヒ傳フ本尊阿彌陀如來ハ春日ノ作
 トカヤ境内ニ觀音堂不動堂アリ

大字檜山ノ岐路ニ善身ノ路標石アリ東南ニ向フ
 右側面ニ 江戸日本橋石町米屋久右衛門刻シ
 左側面ニ 文久ニ丁巳十二月日ト刻ス



新路程記 距京都市元標 十四里七町五十二間五分 距

六所ニ分テ學理實際ヲ施行ス
柴田七九郎源康忠小傳

七九郎初名孫七郎世々參河ニ住シ農間ニアリ父
御左衛門政之士氣アリ出テ、領主徳川家ニ仕ヘ
射道ノ堪能ト勇敢ノ氣概トヲ賞セラレ家康ノ眷
顧ヲ受ケ其ノ甲信間ニ戰フヤ射ル所皆中リ中ル
所皆徹ル敵軍ツノ弓勢ノ急且エナルニ驚キ其ノ
箭ヲ檢スルニ一々其ノ姓名ヲ刻ス敵共相顧ミテ
嘻キ戰ノ熄ムヲ待テ其ノ矢ヲ集メ命中セタル所
ノ士卒ノ姓名ヲ注シ鮮血淋漓タルカ儘コレヲ返
與ス之ヲ受ケ數ハ六十三枝ニ至ル家康コレヲ聞
キ大ニ嘉ミレ康ノ字ヲ賜ヒ六十三ノ三六字ヲ書

檜山村

シ特賜ス且ツノ名ヲ改メ七九郎トス六十三ノ算
辭ナリ康忠コレヲ以テ紋章トシテ旗ニ書シ常ニ
掲ゲテ軍ニ從フ三方ヶ原ノ戰ニ石川數正ノ隊ニ
在リテ甲州軍ヲ拒止シ長篠ノ戰ニ亦先鋒ニアリ
テ拒戰シ共ニ切アリ真田攻ノ役ニ進撃シ丸子ニ
テ諸將ト合議シ物見着ヲ定ム康忠當直ノ夜敵急
襲スルヲ逆撃シ敵卒ヲ獲ル夥シ信濃佐久郡蘆田
小屋等ノ大小戰ニハ常ニ典カレリ織田信長ノ憂
死アルヤ甲信ノ領地動搖ス北條氏ノ軍機ヲ昏テ
入ル徳川氏ノ軍亦入ル大久保七郎右衛門忠世ヲ
召シ之ヲ謀ル忠世進言ス信濃ノ舊將依田右衛門
尉(信蕃ノ)去ニシ年駿河國ニアリテ御方ニ召サル

母
成
志

、丁度々ニ及バドモ参ラズ主人(武田勝頼ヲ云フナリ)ノ行衛
 覺東無シトテ甲斐ニ歸ヒリ武田ガ將士多キガ中
 ニ從レガ忠ヲ存ゼレモ入モ候ハズ臣ガニ候田中
 ノ兩城ヲ彼レノ手ヨリ受ケ取りタル事ノ候ハバ
 聊ノ所縁ニ引カレ此ノ程ニ候城ニ迎ヘ取りテ候
 ヒ又柴田七九郎罪蒙リテ年久シ(前年勅命ニ)アハ
 レ御免ノ仰ウナテ依田ト共ニ信濃ニ出向ハバ依
 田ガ家ノ子郎徒走セ集マリ國人押寄セ一攻メ
 拒カハ彼ノ圍ヲ鎮メン一御勢ヲ向ケラル、程ノ
 丁モ候ハジト即日忠世ノ申ス如クニ命ヲ下シ天
 正三年十一月柴田ノ軍共信濃ニ入り前山城ヲ取
 リ高槻小田井ノ城々風靡シテ落城ス便テ信蕃ニ

舊諱ヲ賜ヒ復任セレメ七九郎ヲシテ忠世ト共ニ
 止マリテ二國ノ丁ヲ處分セシム六月ノ終ヨリ十
 二月迄ニ甲信二州全ク徳川氏ニ属ス武田ノ地五
 千石ヲ賜ヒ之ヲ賞セラル文祿二年五月廿六日卒
 ス年五十六子康長ニ代將軍秀忠ニ事ハ庚子ノ役
 ニ從軍シ冬役ニモ從軍ス寛永三年三千石ヲ加ヘ
 テレ二年歩卒長トナリ三年書院番頭トナリ九年
 三代將軍ニ事ハ前職ヲ續ヤ勤メ七百石ヲ賜フ又
 小姓組頭トナリ上方代官トナリ金貳百兩ヲ貸與
 テラル同年六月廿二日没ス年五十子筑後守康久
 子康利等相継ギ明治ニ至ル

高原村

高原村 六百十九戸 三千四百八十六人 二十九年
 大字 實勢 豊田 富山 下山
 小字 黒瀬 知野部 坪井 紅 新宮 白土
 尾長野 蕨 高屋 木ノ芽 新町
 大字 實勢 或ハ十勢ニ作ル上下二部ニ分カル高五
 百二十四石文久度改七百八十一石六斗七升八合
 嶋彌左衛門知行所
 大字 下山 小字 黒瀬 蕨 尾長野 白土 木ノ芽 ヲリ 成
 ル 黒瀬 高四十一石七斗九合 蕨 高七十一石二
 斗八合 尾長野 高四十石三斗六合 白土 高六十
 八石二斗九升 木ノ芽 無 高屋 高六百二十五石
 二斗七升七合 内九十七石八斗九升七合 以上皆

園部領 内五百二十七石三斗文ハ武田知行 紅高
貳百五十九石六斗一升七合柴田知行

紅 初夏ノ交ニ此處ヨリ須知ニ通スル一大原野
ナル蒲生野ヲ經シニハ滿日躑躅花ノ色ニ醉ニ紅
ノ名ノ仇ナラザルヲ知ラシ古人ガ名ヲ命ケタル
ハ此ノ花ヨリスルカ將又別ニ謂アルカ
文政元年十一月十一日主基方丹波國御屏風六帖
和歌十八首ノ内

右少辨正五位下藤原朝臣隆光

吹く風とのよけきまを梅の花まくり久しに紅のむら

藤塩草ニ出テタル匡房ノ歌ハ

てあらしを巻ハてける鈴のけしき梅のくれあむる村

西北紀行ニ紅といふ所あり名所ふり藤塩草ニと
出たり此邊桑種多く田子澤瀉をうえて利と古
トアリ 澤瀉ハ音讀ヒテ藥名トナル此ノ草ノ根
ナリ

大福光寺ハ山跡ヲ雲清トス下山ノ小宇岩ノ上ニ
アリ仁和寺末ニヒテ古義真言宗ナリ由緒アルヲ
以テ一等格タリ延暦年間峰延法師開基シ嘉暦年
間即心上人中興シタリ

本尊 毘沙門天王立像三尺 眠立 吉祥天二
尺二寸 禪二師童子二尺二寸

大日如來ニ尺二寸 源信作 同像ニ尺 同人作
聖觀世音坐像一尺二寸 弘法作 仁王執金剛士

高京村志

第四
其塔
写真

雲清山大福光寺宝塔



八尺
運慶作

丹波
誠

板額ニ青銅ニテ
大福光寺ノ四字ヲ
箴々古風書體ニテ
今人ノ書ニ得ザル所ニモ

大福光寺



第二圖
概況



長七間
廣二間
四隅寶鐸
古雅

本堂	寶塔	鐘樓	等ハ	足利尊氏ノ	建立	金胎
曼陀羅	画二幅	八祖大師像	八幅			
檀家	百二十餘戶	<small>二十九年調査</small>	田六畝	五畝	四步	
畑	四畝	九畝	二十九步	宅地	一畝	七畝
官有地	第四種ニ	属スルモ	ノ	四百六十二坪	民有	
地	第一種ニ	属スルモ	ノ	五百三十一坪	收入高	
米	六石五斗餘	領主園部藩侯ノ	寄贈物品	之	アリ	
塔	前示尊氏ノ	建造ト	云ヒ	一説ニ	ハ	ヨリ古キモ
ノ	ニテ	山上ニ	アリ	レラ	今ノ	處ハ移シタルガ
氏	テ	アルト	モ	云フ	東面	ニテ立ツ小杉叢中ニ
アリ	杉相ノ	常様ナ	ラザル	彫刻ノ	雅様ナル	古色

母皮志

楠スベシ 惜ムベシ 建造ノ由緒傳ハラズ風侵
雨蝕天爲ニ任ス
毘沙門堂ト云フ即チ真ノ大福光寺ナリ本尊毘沙
門天ハ通常式ニアラス寶塔ヲ持タズシテ片手ノ
ノ腰ヲ押ス故ニ之ヲ腰押毘沙門ノ名ヲ呼ブ山城
國鞍馬寺ノモノト同作ナリト云フ堂ト塔トハ何
ノ幸ゾ暴將明智氏ノ一炬ヲ免レ後生余カ如キ好
古者ノ眼底ニ寫シ出サル、ヲ得タリ別ニ一小寺
アリ亦大福光寺ト云フ住僧堂塔ヲ管理ス丹波西
國札所タリ 所藏少カラズ賀茂長明ノ方丈記ヤ
淡海公ノ書卷十元信ノ画虎ヤ是レガ最タリ
大古刹ノ西念寺モ今ヤ亡シ領地三千石ヲ有シタ

高京村

ル者ナルカ其ノ創設ヲ詳ニセズ大福光寺ト並峙
シタル所大福光寺ハ有檀ニシテ存シ西念寺ハ祈
願所ニシテ無檀ナルヲ以テ亡ス大福光寺ノ僧ヲ
ノ有名無實ノ寺ヲ兼務ス
滅罪寺ノ址ヲ葦野ニ訪フテ得逢ハズ聖武天皇ノ
御宇ニ當リ佛法大ニ興サレ天下ニ令シ一國ニ二
箇寺ヲ創建セシメ一ヲ金光明四天王護國寺トシ
二十ノ僧侶ヲ住セシメ一ヲ法華滅罪ノ寺トシテ
女僧一十人ヲ定住セシメ又其ノ勅旨ヲ問ハバ寺
辨コレヲ證明ス世人ハ畧シテ護國寺滅罪寺ト呼
ブ法華經ニ女人ト雖フノ罪ヲ免レ成佛スルノ教
アルヲ以テ尼寺トハナセルナリ

丹波志

巖野 移住民六戸アルヲ視ルニ十九年原野ノ開墾
 ニ從事ス 大原野東西一里南北五町アリ小野原
 ニ人家五戸アリ竹エヲ兼ヌ同年
 士族ノ開拓事業ハ國部藩ニテ試ミタルガ成功セ
 不却ラ其ノ資ヲ併セテ七失シ漂泊ノ士々ヲシム
 閩ムバシ移住ノ數二百五戸中残留セルモノ四五
 戸ノミニ十九年 左ニ其ノ一話ヲ載ス
 廢藩ト云フ噂カ何處ト無ク傳ハリ殿様ハ如何ニ
 御成リナサル、我等臣下ハ如何ニナリ行クモノ
 カ杯取々ノ噂ガ一番只迂路々々スル計リ スル
 ト御頭主ハ華族トナリテ東京御住居トナルトカ
 矢張り藩知事ノ御身分テ御領地住居テアルトカ

高原村

言フテ平ル内ニ又重臣ハ上大夫中大夫下大夫ト
 ナリ中分ニハ上士中士下士ノ別カ立テ足輕ハ卒
 族トナルナド噂カアル スルト元ノ御家老ニテ
 大参事ヨリノ達ニカアル 三代相恩ノ輩ハ一般
 朝臣トナル舊臣トハ縁カ切レル 禄高相應ニ扶持
 米ヲ下ヤル、自今帯刀ハ禁止セラル、高工業又
 ハ農業ニ從事スル丁面々ノ隨意ナルベシ等ノ丁
 望ニノ者ニハ禄高ニ應シ公債證書ヲ下サル望ミ
 ニ應シテハ金札ニテモ下サル朝廷ノ御趣意ヲ取
 違ハヌ様 コレヲ以テ子孫永遠ノ謀ヲ建ツベシ
 トノ丁モアル 是迄ハ一番何事ニモ一致ノ勵ヲ
 爲シ来リタルガ各人各意トナリ自由行動トナリ

場畜牧部京立創年五治明



中ニハ暴進粗行ヲ敢ラヌル者ヲ出カシ御家老モ
 無クレバ足輕モ無ク一様ノ士族トナリ昨日マデ
 土下座ラシク者トサセタ者ト途中ノ行キ合ヒニ
 知ラヌ顔シテ通り過キル腰ノ両カラ一時ニ取リ
 兼マル者ハ小カケケヲ佩ビル思ヒ切ワク者ハ大
 キナ天立テニ換ハ算盤ヲ懐ニ入レテ往來スル
 家ヲ賣ル相談スル者アレバ鏡兜馬具坐敷道具茶
 器ヲ賣ル一時ニ嵩ム賣物ニ道具屋カラ断ハルニ
 足三文ニ手離スナドノ滑稽ヲ演シタ

府立種畜場 宇豊田 蒲生野ノ一部 須知町ヲ
 北ニ距ル二十町許
 面積五町餘歩 建物敷地一段三畝歩
堆肥舎 隔畜舎
 運動場五段歩 雜用地栽培地要用開墾地三町
 餘歩
 植村正直が京都府知事タルヤ目ラ此ノ船井郡原
 野ニ注ケ専ツノ遺利ヲ拾收セント企テ米人ウイ
 ドヲ聘シテ從事セシメタル下ハ須知町蒲生野ノ
 記事ニテ語レルガ如シ爾後施政者立派者實業者
 ノ念頭ニ懸カリテ遺忘セラレズ明治三十九年ニ
 至リ此ノ新設ヲ看ル事業漸ク遂クテ進ミ四十一

町 坂 志

京都府種畜場



年ニ和種牝牛十一頭同牝牛二頭洋種牝牛六頭同
 牝牛四頭雜種牝牛二頭同牝牛二頭 合計二十七
 頭ナリシカ四十二年ニハホルスタインフリート
 ヤシ種十三頭エーアシヤ種六頭 合計三十九頭
 トナル 飼糧作物ニハ牧草燕麥蜀黍稗
 小宇下山ハ大字實勢ニアリ八番地ノ一原野中ニ
 アル狐塚ヨリ掘シ物アリ神前ノ供物臺ニ使用ス
 ル如キ土器十二個ト純金ノ小環二個ト金屬製ノ
 鍔盾ニタル用器ニシテ不分明ナルモノ數點ナリ
 該舊塚ハ何等ノ由緒ヲモ存セズ故先ノ談ニ依レ
 バ血ノ原ト呼ビ戰場タリトカヤ
 今回ノ掘出シ物ハ國部護部間ノ鐵道布設中開鑿

高原村

ニタル際ニ得タル所ニラ宮内省ハ差シ上グル筈
 ニテ京都府廳ハ出セリ 四十二年
 高屋川ハ紅川ノ北派スルモノ
 高屋アガハ古來ノ良産品ナリレガ米價ノ好機配
 ニ際當ヒラレテ蘭田ハ減退ス
 紀事一則 明治二十九年初冬ノ旅路日記中ノ一
 節
 著者ハ曉方白土ノ宿リヲ出デ大福光寺見シトテ
 片山院ニト共ニ巖本道ヨリ巖野ニ向ヒタルニ朝
 霧深カリシ處ニ案内者モ路ヲ失ヒ何時シカ細キ
 樵路ニ分ケ入り十餘所ト間キタル途ノ半里計モ
 来フルニ猶達セズ磁石ヲ出シテ方向ヲ定メ高キ

ニ登リ昇キニ下リ岩角ヲ攀テ木枝ニ縁リ卒フシ
テ一蹊ヲ得兩人ホツト息ツク所只ナラズ地響シ
テアリケレバ訝リツ、進ム〜ニツレテ響愈〜
大ニ今ハ小溪ノサ、流レ一筋ノアナタ小篠ノ中
ニアルヲ知リ不思議ニ心ヲおタレナガラ其處横
切リ漸〜ノ麓ニ出フル時手籠提ケ手拭モテ頬
蒙リセル一婦人ノ登リ来ルヲ見テ彼ノ響ハト聞
クニ婦人ノ顔ハ俄ニ變ハリ聲顛ハセテ言フ升ハ
猪ガノ夕チツナリ能クモ危ヤ所ヲ過ギラレタル
モノヨ猪ガノ夕チツ最中ハ夢中ニナルモノ故通
行人アルニ氣附カザリシナリ今日ハ村ノ祭エヘ
相耳トテヒトテ此處マデハ来リシモ怖ロシケレ

バ返ラントテ逸足出シテ下リ行ク兩人顔見合ハ
マテ恙ナカリシヲ祝ヒフ、婦人ノ後ヲ逐フテ本
道へ出テ別レタリ猪ガノ夕チツ云フテハ嘗テ
聞キタルトナルガ今コレヲ實地ニ聞キタルハ思
ヒヨテヌトト書キ置ク是ハ此ノ邊界ニ回ノ探報
ナリ悦ミハ炮兵大尉ニテ馬路ノ産ナリ著者ノ舊
門下ニアリキ

九千神社 本殿棟瓦ニ記スル所ニ因リ明應七年ノ再建ヲ知 蛙股ニ梵字アリ
手挾彫刻勾欄アリ 神體底部ノ銘文ニテ神俣混淆時代ノ遺風ヲ語

質美村

質美村

船井郡西部ノ中央ニアリ 国部ノ西四里二十七

町 役場 字上野

面積 壹方里八分三厘六毛

廣袤東西 一里十町四十間 南北一里 周圍

四里二十九町

境界東西 高屋村大字下山 南面 同村大字豊

田 西面 檜山村 西面 三ノ宮村大字妙樂寺 北

面 下和知村 東北 上和知村

山脈四方ヲ鎖シ屏風畫裡ノ一聚落ノ如ク而シテ

屏風タルノ山ハ四面ニ聳ハ人工ヲ待ヲ始メテ

路ヲ通ビタルナリ中央僅ニ平野アリ其ノ道路ハ

丹波志

村ヲ貫ク綾部街道アリ三ノ宮ヨリ采リ高原村ヨ
 リ采リ舞鶴街道ニ接續ス一水三峠山麓ヨリ流
 レ中央部ノ小平野ヲ潤シ諸溪水ヲ集メ高野川ニ
 入ル
 地質 腐植質粘土ナル所ハ田作ニ適シ 腐化岩
 土質ナル高地ハ畑作ニ適ス
 氣候 八月中旬最高ニ十七度五 最低十二月下
 旬六度七
 初霜 十一月上旬 終霜 四月末 初雪 十一月
 下旬 終雪 三月下旬
 結氷 十一月下旬 終氷 三月中旬 風 北風多シ
 四五月ハ南又ハ東南風

生産 農業 林業 産物 米麥豆茶繭 家禽
 薪 炭 枳苺 蔬菜 枲
 運輸 牛馬ト人肩ニ由ル 車通セカ 郵便 一日
 一便檜山村ヨリス
 人口 男六百七十八人 女五百九十三人 合計
 一千二百七十一人 四十一年末
 戸數 二百十五戸 家造リ 茅葺ヲ多シトス
 醫師ノ必要無ク 警察事故無シ
 閑院宮御家領年貢米三百三十八石二斗七分 延
 寶六年ヨリ天領トナル
 天領即チ幕府直轄地 京都代官小堀數馬支配年
 貢米三百三十一石七斗二分

丹波
 志

延寶六年改正檢地奉行相平九十郎所定高千。七
 十一石五斗五升九合六勺 悉皆天領トナル
 享保六年改五百九十六石八斗四升二合 上村分
 四百三十一石一斗五升七合九勺 下村分 四十
 三石五斗五升九合七勺 北久保分ノ三村ニ分々
 ル
 天保十四年三村通ニテ高七百四十八石一升七勺
 ヲ水野壹岐守領トシ三百二十三石五斗四升八合
 九勺ヲ天領小堀支配トス維新廢藩置縣ニ際シ明
 治二年丹後ノ久美濱縣支配トナリ翌三年篠山縣
 ニ轉シ同五年京都府管轄トナル
 明治五年戸長ヲ置ク六年區制ヲ布キ質美富田豊

田實勢下山ノ五村ヲ一區トシ區長一名村々ノ戸
 長ヲ管轄ス十二年保井谷附近ト組合一區域トナ
 ル區長廢セリ戸長ハ故ノ如シ
 十四年戸長役場ヲ田中ト云フ地ニ置ク二十二年
 町村制施行セラレ改メテ村役場トナリ村長其ノ
 長タリ茲ニ獨村ノ一村トナル
 文久度高 千七十一石五斗五升九合九勺

御代官所

丹波
 志

質美和田神社ノ横ニル古堂

七間四面 丸柱三十三個

古建造ニテ柱楹腐蝕レ傾斜シテ

頽トセントス

土人云ク下山嶺ノ毘沙門堂下同

時ノ建立ナリト

拜殿ト稱スレドモ左ニアハルヘシ神社

様ノモノトモ思ハレバ 膳男木ヨリ 两部

ノ時ソノ用ニ供セシモノカトモ想ハル



桐庄村

桐庄村 大字 木崎 瓜生野 内林 曾我谷
 千妻 岡田 新堂 熊崎
 戸數合四百〇〇 人口二千八百二十八 明治二十八年
 南方ハ園部町園部村ニ界レ北方ハ觀音峠ヲ以テ
 竹野村ノ水戸ニ界ス往々此ノ邊ヲ呼レテ霧ノ庄
 トス何時ノ頃ヨリカ桐ノ庄トナレリ川邊村ノ其
 ノ名稱ノ下ニ屬シタルモノ、如シ今又數村合併
 ノ上コノ名ニ復セリ桐野庄トモ書キタルニヤ一
 休和尚ノ居士タル嵯川新右衛門尉親當ノ玄孫ナ
 ル新右衛門尉親世ハ大將軍義輝ニ奉ハ丹波桐野
 ラ領スト此ノ桐ノ庄ナルニヤ嵯川ハ親長ヨリ五
 世ヲ経テ親世トナリ具ノ子ヲ親當トシ新右衛門

桐庄村志

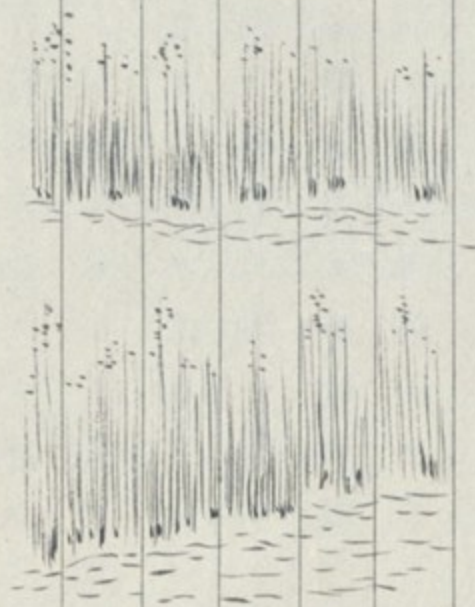


尉ヲ名乗ルモノ六人アリ此ノ世系ニヨレハ前示
 口碑傳ノル所ト踞語セリ親直蜷川姓ヲ冒シテヨ
 リ室西政所ノ人トナリ伊勢々々守ノ被官トナレ
 リ蜷川家傳ニハ左ノ如ク云ヘリ蜷川親長ハ親世
 ノ子姓ハ物部宮道長ニシテ山城ノ人ナリ遠祖親
 直初ノテ族ヲ蜷川トス親直ノ八世親當ハ足利義
 詮ニ事ハテ政所公役トナル和歌ヲ善クス親當ノ
 玄孫ハ即親長ノ父親世ナリ將軍義輝ニ事ハテ丹
 波ノ桐野河内ノ蟠根寺等ノ邑ヲ領ス
 曾我谷ノ人千妻ノ人ハ鰻ヲ食ハス膏ニ之ヲ食ハ
 サル而已ナラス之ヲ手ニ觸ル、トヲサハ忌ム如
 シ之ヲ食ハバ目前疾病ニ罹ルトテ之ヲ顧ミテ故

ヲ以テ池ニ漚ニ生鰻大少トナク遊泳シ人ヲ怖レ
 不池漚浚深ノ擧アレバ己ムトヲ得不一旦之ヲ捕
 ハテ桶ニ入レ車竣ルヲ待ツテ更ニ之ヲ原池原溝
 ノ水ニ放流ス而シテ他ノ水族ハ割烹ノ慘ヲ免レ
 不曰ハク鰻ハ虚空藏菩薩ノ愛使物ナレハナリト
 其ノ許細シ流下シテ隣村他部ニ入ルヤ人之ヲ捉
 ハテ去ル
 式内城崎神社 往昔ハ金碧陸煌タル大社ナリシ
 カ今ヤ木崎ノ小字内林ニアリテ昔ノ仰モ無キ姿
 ニ更ハレリ
 主神 春日明神
 疊表 木崎ニ産スルヲ此ノ地産物ノ根源トス今

丹波
 史
 志

ハ近傍諸村ニ廣カリタリ備後産ニ對シ丹波表ノ
 名アリ近傍ニテハ木崎表ト呼ブ木崎ニ亞ク所ハ
 瓜生野トス以下漸低ス藁ト席ニ至リテモ赤斯ノ
 如キ等級ヲ相爲ス近來蘭田漸次減耗シテ米田ト
 ナルハ米價ノ騰貴コレヲシテ然ラシムルナリ



○ 蘭の花やほよよころゝ宮のる 敏
 ○ 畫もすく回詠うおや蘭田のる 室外

蘭作一畝歩ニ付

出 六圓 苗代 四十五圓 肥料 五圓 諸税

四十圓 人夫 一人四十錢 合九十六圓

入 長蘭 七十斤 六蘭 十五斤ヨリナ斤 トホ蘭 十斤

合百二十圓

右差額利金二十四圓 明治三十年

蘭利ハ一村ノモノナリシガ今ハ一郡ノ利中ニ數
 ハラレ年々數百圓金ヲ博シ得ルモ石川縣ニ比ス
 レハ等級遙ニ下レテ如何ンセシ該縣四十三年ノ
 計上ニ四十一萬餘圓ヲ記載セリ

丹波志

長蘭ハ三尺以上ノ長ニ達スルモノ三貫目ヲ一斤
 トス 六蘭ニ尺五寸以上三尺ニ寸以下ノモノハ
 六貫目ヲ以テ一斤トス トボ蘭ニ尺以上ニ尺五
 寸以下ノモノハ四貫目ヲ以テ一斤トス
 丹波産ハ色澤ニ於テ劣リ茶褐色ヲ顯ハス丁早シ
 性質ハ剛靱ナルヲ以テ一利トス其ノ短クシテ細
 キ故皆ソノ半ヲ縫キ折目六十六疋ナリ江州産ハ
 長クシテ中縫ニ織目六十疋ナリ等級ニ於ケル品
 質ハ備後ヲ最上トシ備中備前コレニ亞ギ江州ト
 ナリ丹波トナル
 蘭ハ植物學上燈心草科ナリ 冬植エテ夏刈リ刈
 リタルヲ乾燥シ白泥ニテ染メ干シテ着色ス 冬

植ハ可成晚ク植ケルニ利アリ永ヲ割リツ、植ウ
 ルハ其ノ故ナリ
 麻畑アリ蘭作ノ副作ナリ春季ニ下種シ夏ノ土用
 ニ根引シテ風呂ニテ蒸シ皮ヲ剥ギ離シ織絲トシ
 テ畳表ヲ織ルニ用ユ
 米實中等木材薪炭枳苧ヲ出ス 若狹街道アリ東
 北ニ岐ル
 復知ハ卦クニハ水戸野峠三里半ノ路程アリ車馬ヲ
 通スバシ舊道ハ二里ニシテ險ナリ
 峠ノ觀音堂ハ涌出觀音堂ト呼ブ此ノ觀音大士ハ
 弘法大師ノ加持ニテ磐石上ニ現出シタルカ久敷
 山中ニ埋没セリ或時馬下アリテ馬鞋ヲ抛却シ

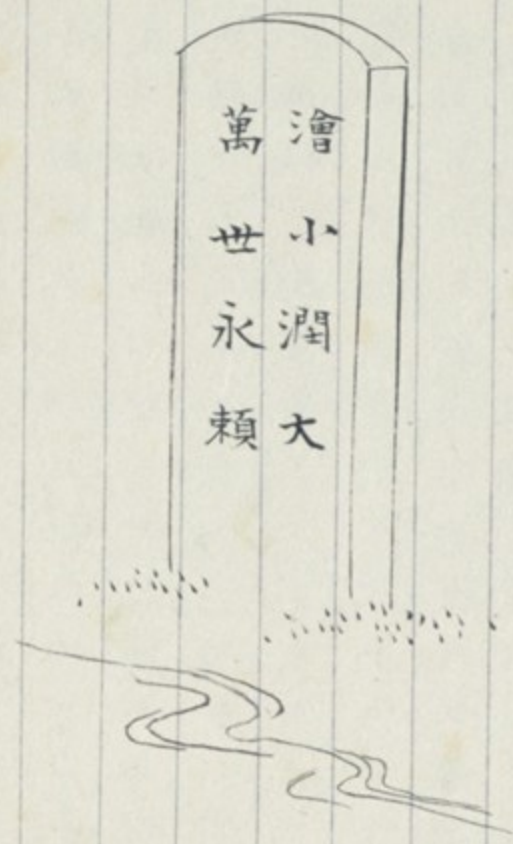
丹波志

タリニ身體忽地ニ麻痺萎縮ニテ動ク能ハズ傍ニ
アル一馬丁之ヲ見テ大ニ驚キ馬鞋ノ在ル處ヲ索
ムレバ路下溪間ノ一石上ニ懸レリ之ヲ熟視スレ
バ石ニ刻ミタル佛形アリ乃チ代拜シテ罪ヲ謝ス
ルヤ馬丁ノ麻痺頓ニ治セラ元ノ如シ則チ更ニ新
馬鞋ヲ以テ石上ニ加ヘ置キケルニ石佛馬鞋ト共
ニ高ク地上ニ湧出スルヲ見ル是レ其ノ名ノ起因
トブ元祿十二年本堂建創セラレ真言宗ナリシヲ
普洞ニ改宗セリ往時園部候病ム佛ノ告アリ湧出
觀音ニ歸依セシム候其ノ言ノ如ク遙拜祈願ニテ
治癒ヲ得タリ自後何レノ候モ園ニアル時ハ拜趨
スルノ例アリ齒痛ニ苦ムモノハ祈願ニテ往々效

驗アリ齒磨楊枝ヲ缺シテ報慶ス
園庭内ノ百日紅ハ三百年以上ノ古株ニシテ花時
紅雲院内ニ業ル樹皮ノ剝脫スルヲ以テ之ヲ問ハ
ハ堂僧ノ云フ様コノ皮ヲ身ニ帶アルモノハ道途
ニ死セズ故ニ行旅ノ持チ去ルナリト
觀音池ハ南麓ニアリ古時賽銭ノ饒多ニシテ使途
ナキヲ以テ池ヲ穿ツノ費ニ充テ農用水源ヲ得タ
リ自後毎年秘寶アルノ田數町ヲ得タルヲ以テ名
ツク
村内北部モ赤早換地ナリシヲ河内村ノ内藤良助
ト此ノ村ノ大字内林農戶川利兵衛トノ祭祀ニテ
河内ヨリ木嶋ノ南端大堰川ニ落ツルノ一小溝ヲ

河内志

改良渡礫レ幅ヲ大ニシ流量ヲ増シ灌溉ニ資ス後
人其ノ利ヲ享ク因部舊藩人之ヲ嘉賞シ一碑ヲ溝
側ニ建ツ藩士長瀬五郎之ニ書ヌ時明治二十三年
一月ナリ碑高ナ四尺幅卅尺裏面ニ年月ヲ刻ス



文久年中高帳 園部領

一百九十五石七升	千妻村
三百七石八升三合	曾我谷村
一百九十石七斗四升	臥生野村
三百八十一石三斗三升六合	熊崎村
三百十七石一斗二升六合	上木崎村
三百十三石五升六合	下木崎村
二百二十五石九斗五升五合	新堂村
一百四十七石八斗三升四勺	岡田村
岡田村内園部領百二石五斗四升九合	四
十五石二斗八升一合四勺	代官所
一百四十五石一斗四升	内林村 園部領

一三百十三石五升六合 下木崎村 園部領

五個莊村

新村	同七十二石二升八合	同
吉野邊村	同十六石三斗九升七合	同
海老谷村	同五十五石四斗九升四合	同
佐々江村	同百三十四石一升四合	同
東谷村	同八十五石五斗九合	同
殿村	古高百三石四斗一升五合	園部領
十リ具ノ村	名ハ此地ノ舊稱ヲ用ヒタルナリ	
村トナレリ土地ハ郡ノ東北ニ位シテ山間ノ僻邑		
佐々江四ノ谷田原ノ三個トナリ更ニ五個莊ノ一		
村四ノ谷村佐々江村吉野邊村ノ九區分アリタルモ		
舊村名ニハ和田村片野村新村田原村大谷村東谷		
五個莊村	大字	佐々江 四ツ谷 田原

丹波志

大谷村同四十一石三斗六升八合 国部領
明治二十九年ノ戸數合四百七十五 人口二千五百二十

式内 多治神社 治ノ字音讀セズバ田原ニ近シ
田原神社 ナラシト云フ説アリ中古ヨリ多沼ト
書キ来レルヲ今ノ名ニ書キ改メラレタルハ延喜
式神名帳ニ據リタル所トカヤ境内古木五七株其
ノ蕭條タル秋ノ夕暮ニ著者ハ詣テ又式内ノ古祠
何處モ同ジ感ニホタレタリ小祠數基アリ大宮雷
殿ト云ヒ二宮雷殿ト云ヒ氣比王子ト云ヒ剝行子
ト云ヒ早尾聖女ト云ヒ八王子ト云ヒ客人八王子
ト云フ著者カ耳目ニハ慣レヌ神名ノ多カルニ尋

シ
ネバヤト邊リ見レ氏神官ノ住居モ無ク人影モ無
シ
四ッ谷ヨリ京都ハ九里 国部ハ五里十二町 周山
ハ四里
鏡岩 田原ノ片野ニ光澤ヲ保テ石アリ著者来
遊ノ時ニハ葛蘿庭ニ纏ハリ秋霜ニ飽キ一顧スベ
キ景色ヲ具ハタリ 此ノ邊ヨリ北東ニ向フノ路
傍山谷ニ栗實多ク佐々江ノ野ニ烟草ヲ産ス 北
東田郡界ハ海老坂ノ上頭ニ在リ
筏路アリ諸溪ヲ流シ下ス滴々ノ泉ヲ貯ヘ堰キ留
メテ時日ヲ期シ村々戸々ヨリ木材ヲ運ビ溪中ニ
テ筏ニ縛シ其ノ皆水上ニ併ヒ浮ブラ待テ堰ヲ切

京都府立総合資料館所蔵

リ水ヲ落トセバ梓枝相逐ニ相追フテ下ルナリ
 那復與市宗高カ扁ノ的ヲ射タル勅賞ニ五個莊ト
 信濃ノ角鹿若狹ノ東宮原武藏ノ太田備中ノ繪原
 等ノ莊ヲ賜ハル
 源三位頼政ノ子仲綱ノ玄孫資國攝津守ニ任ジ五
 個莊ヲ賜フ太田郷ニ居リ太田ヲ姓トス道灌五世
 ノ祖トス 扁谷上杉宗家ノ臣ナリ資清太田郷ノ
 地頭職ヲ襲フ上杉持朝ニ事ハ軍功アリ執事職ト
 ナル康正三年入直ヲシテ道真ト稱ス長祿元年河
 越ニ移ルト云フ 資國—資治—資兼—資房—資清
 入道道真 道灌
 東鑑文治二年源藏人太夫頼兼徳申丹波五個莊事

二品可令執申京都之由及所沙汰是入道源三位卿
 頼政家領也治承四年有事之後屋嶋前内府知行之
 前文ニ因リ之ヲ見レバ頼政ノ領地ナリレカ頼政
 ハ高倉ノ宮ニ加擔シテ治承年中ニ亡ビ平家継キ
 領シタルカ如シ
 海老坂ハ險ナリ北粟田郡ノ木材ニシテ板橋地方
 ニ集合セルモノハ此ノ坂路ヲ越エテ佐々江ニ運
 バレ筏ニ組ミ之ヲ大堰川ニ下ス是等大小ノ木材
 ヲ人肩ニテ下シタルガ明治初年道路修繕ノ後ハ
 牛背ニテ送り出ストトハナレリ開化ノ進ミハ領
 テ僻地ニ及ビ二十年ニハ車道ヲ開キ鞆々轆々ノ
 響ヲ山間ニ聞キ復入カラ勞セザルニ至レリ

京都府立総合資料館所蔵

四ツ谷ノ愛郷心家ナル寺尾篤七郎ハ幼ニシテ實
 業界ノ巨人タラントシ十二歳ニシテ奮然トシテ
 御關ヲ出デ大阪ニ赴キ商家ニ入り浮沈スルヲ數
 十年辛辛萬苦ニシテ素志ヲ達シ巨萬ノ財ヲ積ニ綿
 絲布高トレテ名聲ヲ海内ニ馳セ立志傳ノ第一頁
 ヲ飾ル人トハナレリ
 大正九年先帝陛下勅語煥發ノ三十年ニ當ルヲ以
 テ記念トシ五個莊村小學校及ビ教育基金トシテ
 金壹萬圓ヲ寄附シ氏神岡安神社、金五千圓ヲ寄
 附セリ
 海老坂ノ地藏堂 八百比丘尼
 本堂ハ坂ノ南ニアリテ坂路ノ傍ニ建テラレタリ

五個莊村

現今明治年間ヨリ溯リ數フレバ一千又餘年ヲ經テ
 ル者ニシテ再建後ノ殿堂ハ往昔ノ面影ヲ同フ可ク
 ハ有テサレトモ山間ノ一地藏堂トシテハ一頭地ヲ
 抽ンデ由緒アリゲニ視エルモ其ノ由縁無クシハ非
 カ就キテハ小説的傳説ヲ掲載スル尤ノ如シ
 日本唯一ノ不老長生傳説保持者ナル八百比丘尼ハ
 百姫遺迹ハ若狹國小濱町字男山町後瀨山空印寺ノ
 總門ヲ入り突當タリノ山麓絶壁赤褐色ノ洞窟ナリ
 當寺六世前ノ住僧某コノ洞窟ヲ探リ三日ヲ經テ丹
 波ノ山中ニ出テタリトノ説ハ諸國里人談ニモ出テ
 人口ニモ膾炙セラル、奇話ニテ此ノ穴コソ尼ガハ
 百餘歳ノ高齡ヲ養ヒタル所ト云ヒ又ハ其ノ入定ノ

叫
 坡
 志

安樂塲トモ云フ其ノ入定ノ際ニ椿ノ一枝ヲ洞口ニ
挿ミ植テ、曰ヒケルハ此ノ椿ノ枯レヌ間ハ己モ亦
死ナズト爾後其ノ枝繁茂シテ根株ヲ張り年々白花
ヲ叢開ス屋ノ一名ヲ白比丘ト曰フハ是レニ因ノル
ニヤ
西津村ノ小松原ニ住ノル漁人ニ道満ト呼ベル者ア
リ根來村鷄川ノ邊ニ住ノル頃一女子ヲ生育シ之レ
ヲ鍾愛シ魚菜ヲ賣リ餘錢アレバ女子所好ノモノヲ
齎シ歸リ之レヲ與ヘ其ノ喜色ヲ見テ以テ樂トセリ
道満一日深山ニ入り四五名ノ村人ト採蕪シ居タル
ガ一偉人ニ遇ヒ偉人ニ招カレ林叢中ニ飲食ス其ノ
中ニ美品佳味ナル奇草アリ道満コレヲ恠ミ竊ニ其

ノ一片ヲ持テ歸リ其ノ始終ヲ妻ニ語り棚ノ上ニ置
ケリ白姫コレヲ見聞シテ取り却シ試食スルニ美味
ニシテ口舌ニ適シ悉皆喰ヒ了レ尼ガ後日語ル所ニ
由レバ是レゾ人魚ノ肉ニシテ一食一千年ノ齡ヲ獲
ル靈藥ナリ白姫年長ズルニ從ヒ種々ノ奇瑞アリ最
佛縁ニ深ク父ニ乞ヒ佛縁ヲ索メテ獨行シテ丹波ニ
入り氷上郡エ久下村ノ寺ニ老僧ヲ尋ネコレニ就キ
テ得度シ此所ニ住シテ佛道ヲ修行スル年マリ播磨
國寺前村大字比延ノ住尼トナリ惠日寺ヲ再興シ感
ズル所アリテ其ノ寺ノ地藏尊像ヲ布片ニ包ミ之レ
ヲ脊ニシテ丹波ヲ出テ六十餘州ヲ遍歴勸化シ難行
苦業ノ後又丹波ニ入り氷上郡ニ入ラントシテ此所

ヲ過グルヤ佛體俄ニ重ク復行ク可ラズ便コレヲ却
シ路傍ノ岩上ニ置キ暫シテ之ヲ揚ゲントスルニ
岩石ニ固着シ動カス可クモ有ラズ尼思フ此所ゾ佛
心相應ノ地ナラントテ佛像ト共ニ露天ニ起卧シ香
花ヲ供シテ讀經解テ山下ノ村民傳へ聞キ尼ノ志
ヲ助ケ假ニ一少艸菴ヲ結ビ居ラシメ飲食ヲ與フ此
ノ尊暫時ニシテ四方ニ傳播シ信仰信施次第ニ加ハ
リ毎年孟蘭盆會ヲ開キ會スル者萬數遂ニ一大殿堂
ヲ建ツルニ至リ尼ノ願望成就シ了レリ
尼ガ常ニ容色ヲ持レテ衰へザルヲ見テ其ノ年齢ヲ
尋テル者アレバ出生ハ雄略天皇御宇ノ當時ナリト
答へ源平戦争ヲモ目撃シタリトテ其ノ大畧ヲ語レ

リ幾歳ゾト問へハ生年八百ト言フ又曰フ一千年生
キル筈ナルガ二百年ノ残りヲバ領主ニ奉ルノ志ナ
リ云々當時關東ニモ尼比丘尼アリ後花園天皇御即
位二十一年日寶徳元年五月兩尼相會話シ九百八十
年目ニ小濱ノ石垣所ト富田所ト分界スル橋ヲ過ギ
先脚行度ヲ失シ轉墜シテ橋下ニ倒ル之レヲ尼ノ臨
終トス明徳元年トモ云フ村人之レヲ厚ク葬リ八百
姫明神ト稱ス白椿ノ二株親椿子椿ハ空印寺ニ在リ
能登ニモ白椿ノ縁起ヲ傳へ武藏國足立郡水波田村
慈眼寺仁王門ノ傍ニ在ル栝榎ノ切株ニ丈餘莖六枚
モ敷カル者アリ是ノ木ハ尼ノ手栽ニ係カル所ト
云フ天化元年武藏ニ在位シタリトカヤ佐渡國ノ傳

説ニ由レバ同國羽茂村大字大石ノ出生ニテ若狹ニ
移住シタルモノト云フ

三ノ宮村 大字 三ノ宮 質志 戸津川 猪鼻

保井谷 栗野 妙樂寺 水呑

戸數四百四 人口二千九 明治二十年調査四百四十二戸

二千四百二十一人ヨリ減ハス

地勢ハ郡ノ西邊ニアリテ天田郡ニ界ス園部ヨリ
綾部ニ通ル一路貫穿ス村外村内山地ナラザル
無ク質志ヨリスル一水源アリ天田郡ニ入り福知
川トナル

大字質志 綾部藩領ニテ高百十三石三斗六升

地勢傾斜ニシテ一町ヲ闊テ、三家ニ町ヲ隔テ、
五家一道ノ溪流潺々トシテ三ノ宮祠前ニ下ル溪
邊掌大ノ水田モ四十二年 明治ノ洪水ニ蝕ノ去ラ

三ノ宮村

三ノ宮村
質志

レテ飲坂ヲ爲シ居民ヲレテ失業セシメタリ實志
 谷極マル所ニ榎峠アリテ榎茂レリ峠ノ西北ニ榎
 盆底ノ所ニ四十二戸ノ部落アリ之ヲ戸津川トス
 同一村ニシテ實志ハ需要供給ヲ須知ニ於テレ戸
 津川ハ綾部ニ於テス 此ノ邊ノ人荷物ヲ運搬ス
 ルヤ之ヲ脊ニ負テテ高ク積ムカニウト名ヅク京
 都迄迄ヲ通シ上下ス體格極強ノモノ多シ
 路標ニ曰ハク綾部ハ四里四町十間七分 京都元
 標ハ十六里七町五十二間五分 大原社ハ一里八
 町四十二間 三ノ宮字三ノ宮ハ十六町二十五間八
 分
 栗野路標ニ曰ハク 右山家左大原綾部 綾部五

里四町十間七分字三ノ宮十九町二十四間二分
 大字三ノ宮高二百五十五石一斗四升六合四勺内五
 十一石二斗嶋福左衛門知行 旗下士ナリ二百三石九
 斗四升六合四勺 綾部領
 城山 山内家祖先山内孫太郎藤原久豊ノ居レリ
 シ所ト云フ山内三郎兵衛ノ宅後ニアリテ所々ニ
 石垣ノ跡トモ見ルベキモノ水ノ手ヲシテ井戸モ
 見ユ貝原益軒ノ西北紀行ニ曰ハク
 山内村あり是土依守山内氏乃祖先の住めりし
 所なりと云ふ此乃邊茶種多し澤瀉を田こうる
 て利とす
 茶園ハ少クアレドモ澤瀉ハ見ユ澤瀉ハ漢藥ナ

ルヲ以テ漢方醫ト共ニ不用ニ歸セシナルベシ
山内土佐守一豊ノ出生地ハ尾張國丹羽郡岩倉町
ニシテ其ノ父盛豊ノ領地黒田村其ノ所ヲ同フス
此ノ黒田ヨリシテ多紀郡南河内村ノ黒田ヲ以テ
一豊ノ出生地トスル話モ起コレリトカヤ左ニ一
豊ノ小傳ヲ出カス

姓ハ藤原氏鎮守府將軍秀卿十四世ノ孫首藤義通
ニ至リ山内ヲ氏トス義通九世盛豊但馬守ト稱ス
丹波ヨリ尾張ニ移リ織田信長ニ事ハ黒田城ニ居
ル弘治三年岩倉ノ戦ニ子十郎ト共ニ忠死ス一豊
ハ盛豊ノ次子ニシテ初名猪右衛門父兄忠死ノ時
ニ年十三出仕ノ命アリ木下秀吉ニ隸ス元龜元年

四月金崎ノ戦ニ敵箭ニ創ツク其ノ箭ヲ抜カズシ
テ進ミ其ノ射手ヲ斬リ而シテ後ニ之ヲ抜ク流血
淋漓タルモ屈スル色無シ信長視テ感賞シ手ヅカ
テ藥ヲ與ハ之ヲ貼セシム六年三木攻城ノ賞トシ
テ祿五百石ニ食ニ安土城下ノ居ヲ賜フ偶々陸
奥ヨリ駿馬ヲ辱キ来リ之ヲ售ル價頗貴シ士衆遂
巡シ買ハントスルノ無シ一豊切至懇望ナルモ計
ノ出ヅル無ク鬱々樂マズ妻恠ニ其ノ故ヲ問フ一
豊曰ハク汝聞カスヤ頃日駿馬ヲ賣ルモノアリ找
コレヲ得テ切ヲ立テント欲スレドモカ能ハズ世
ニ謂フ所ノ貧ハ諸道ノ妨ナリト嗟嘆スル久シ妻
又問フ馬價幾許ヤ曰ハク黄金十枚妻曰ハク請

丹波 記
フ之ヲ調達セシ疾ヲ求メ玉ハト立ツテ鏡奩ヲ執
リ之ヲ開キ鏡下ニ藏ムル所ノ黄金ヲ夫ノ前ニ捧
ク一豊且喜ヒ且驚キ金ノ出處ヲ問フ答ハテ曰ハ
ク妾ガ父妾ヲ誡メテ曰ヘル様ハ大節ニ臨ミ夫婿
ニ資セヨト一豊曰ハク財用常ニ足ラズ汝何故吾
ガ常日苦悶スルヲ視ナカラ救ハザリシゾト怒言
頗嚴ナリ曰ハク貧ハ士ノ常ナレバ未以テ大節ト
スルニ足ラズ飢寒ハ忍ブベシ故ニ之ヲ奉ラザリ
シナリ妾聞ク今年君候京都ニ於テ士人ノ馬揃ア
リト是レゾ天下ノ人ノ目ニ觸ル、所ニシテ士々
ルモノ、良馬持ツバキ時ナレ妾ガ父ヨリ預レル
金ハ以テ良人ノ首途ヲ祝スル、折ニコソト一豊

感泣シテ去リ意氣揚々トシテ駿馬ヲ引キ歸リ日
夜愛養至ラサル無シ一豊ノ舅氏ヤ誰ソ辺江半園ノ
主浅井氏ノ臣若宮友興ツノ人ナリ既ニシテ京都
ニ馬揃アリ信長巨細ト無ク諸士ノ乗馬ヲ點檢ス
ルニ差セル相異モ無シ一豊ノモノヲ一瞥スルヤ
誰ガ衆ゾト問フ左右對ヘテ曰ハク猪右衛門ノ馬
ニテ候フ信長驚キテ曰ハク猪右衛門如何ンゾ此
ノ如キ逸物ヲ得ン左右ノ曰ク先日奥州ヨリ牽キ
参リテ候フガ價ノ高キガ爲ニ買人ノ附キ申サズ
候フヲ猪右衛門具ノ元直ニテ買フテ候ト言上シ
ケレバ信長ノ曰ハク善馬ト知レド價ノ高キガ故
ニ當城内ニ買人無シト有ツテハ此ノ信長ノ耻ト

モナルラ猪右衛門善クモ買ヒケルヨナ猪右ハ身
貧シト聞クガ如何ニシテ其ノ金アリツルゾ武ヲ
嗜ムノ志厚キニヨリテ斯ヘタルナラシテ不断ノ心
掛一設感心スト是ヨリ待遇大ニ重ク征討必從ハ
シム從ハバ必功ヲ奏シ十一年高濱城ヲ賜ヒ小濱
ニ移リ十三年長濱ニ移リ對馬守ト呼バレ從五位
下ニ叙セラレ十八年掛川ニ移ル食邑五萬石徳川
將軍ガ會津征討トシテノ先鋒トナリ宇津宮ニ至
ルヤ石田三成裏切ノ風説頻至シ軍氣沮喪ス一豊
ノ妻大阪ニ在リテ石田方ニ抱擁セラレテ質トナ
ル妻具ノ爲ス可ラザルヲ知ルヤ事情ヲ細書シテ
更ニ勞キ糾ヲテ笠ノ紐トシ之ヲ一卒田中孫作ニ

附シテ寧告戒コレヲ東報セシム途中屢次敵兵ノ
間糾ヲ経トドモ幸ニ恠マレズシテ達スルヲ得タ
リ將軍ヲ始トシテ之ヲ聞見スルモノ具ノ用心ノ
綴密ナルト人ヲ知ルノ明アルトニ股ス一豊コレ
ヲ解カズ本多正統ニ由リ以テ敵ス將軍具ノ笠糾
ヲ一豊ニ返シテ曰ハク山内ノ忠誠ナルハ我能ク
知ル見ザルモ見タルニ同ジト一豊愈具ノ雅量ニ
服シ一意東軍ニ嚮フ一豊笠糾ヲ解キ片々相集メ
之ヲ連讀シテ西軍ノ情實ヲ略知スルヲ得テ之ヲ
將軍ニ陳ス東軍ガ西軍ノ動靜ヲ知ルハ實ニ之ヲ
以テ具ノ發端トスト云フ斯クテ將軍ヨリ命アリ
大名小名ノ志念ヲ叙フベシト福嶋左衛門大夫列

丹波
志

坐ノ中ニアリ進ミ出テ一意味方ニ與スト曰フニ
グ一豊續キ進ミ云ヘル様某カ領セル城ハ海道ニ
アリ速ニ御勢ヲ籠ノラルヤシ年頃貯ヘ置ケル兵
糧モ乏シカラズ某カ家族郎等ヲ取纏メ吉田ノ城
ニ参ラヌベシ人質トレテ召シ置カルベキモノ乎
某ハ軍兵ヲ率ヒ先陣ヲ承ルベシト端坐皆二人ノ
言ニ感ジ天下ノ大勢業已ニ決ス當時吉田城ハ池
田輝政ノ領スル所ニシテ輝政ハ徳川ノ壻タレバ
斯クコソハ言ヒタルナレ塙尾信濃守忠氏ハ年若
ナレド才知アルモノカラ一豊常ニ交ハリ家事大
小コレニ謀レリ故ニ即日其ノ陣所ニ之キ其ノ意
ヲ問フテ其ノ教ニ從ヒ同道ヒテ徳川ノ本陣ニ赴

キニ會議ノ始レルニフ福島ニ次ギ發言シタル
ナリ將軍大ニ欣ビ急ニ諸將ノ部署ヲ定ム二人相
携ヘテ歸途ニ就ク忠氏曰ハク貴殿日頃ノ律義ニ
似ズ拙者ノ言フベキ所ヲ横取セラレタリトテ笑
ヒシカバ一豊曰ハク左ナリトテ亦大笑ス自
後每戦功ヲ積ミ賞ヲ重ネ土佐守トナリテ土佐ニ
入ル入部ノ悅申サントテ將軍ニ謁スルヤ祖額ヲ
尋ネテ凡ク貳拾萬二千六百石ト申ス丁ニテ候
フト答フ將軍曰フ扱ハ思フニモ似ズ小國カナ長
曾我部ノ家ノ販ヒ又太閤カ彼ノ家ニ臨マレタル
時ノ元親ノ設ケ方ナド想ヘバ百萬石モヤ有ラン
トテ賜ヘリシモノヲト言ハル、ヲ聞キ一豊感激

措カ不遂ニ從四位ニ叙シ主正坊ト云ハル銘登ノ
 茶入ヲ賜フ將軍養女ヲ以テ一豊ノ子ニ嫁セシメ
 招平ヲ氏トシ徳川ノ支家ニ準テ慶長十年九月廿
 日一豊卒ス年六十一
 山内三郎兵衛 前記山内家ハ門閥アルノ富農ニ
 シテ世々其ノ人ニ乏シカラズ今ノ主人亦能ク先
 世ノ遺風ヲ承ケ温厚篤實遠近邑ノ模範ト爲リ
 領主九鬼家ヨリ恩典ヲ蒙ルテ屢次ソノ概畧ハ左
 ノ賞狀ニテ一斑ヲ知ルベシ

船井郡第五區三宮村山内三郎兵衛
三十三

其方俊者養子志厚く兼而濟貧恤窮之志趣を空
 人ト区内乃細氏之救恤し貧寒困厄する者を救助

し小学校保護方有校長方有身富貴の家ニあり
 多かり平素節候を旨とし衣食ニ侈らず家業を
 勵ミ近隣生業資力ニ乏シき者トハ年々爲利を
 以テ金穀を貸借し慈愛に情厚く且六年以前母
 病象ニ亦多忍り看護し一昨年耳ハ十歳ノ老
 父病象ノ際も僻村爲り不自由ニ中ずり種々力
 を尽し百方醫薬を求め接摩温涼不怠加之先代
 より善良の家風引致り孝行如堂ニ敬水病人之
 を福考し孤お守へ長持する事ニ依り爲り賞屋
 功園五十銭下御由事

明治十年一月四日 京都府

道徳心ノ深キモ由ル来ル所アリ同年一月十五日

京都府立総合資料館所蔵

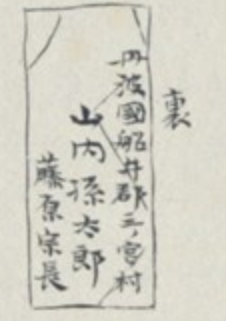
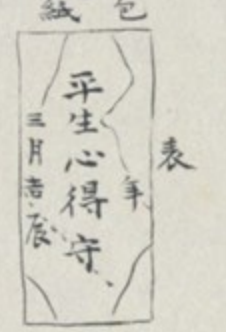
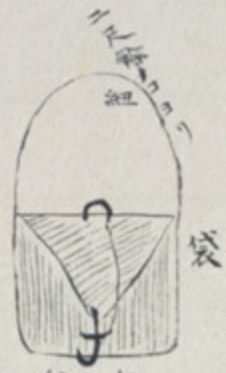
氏ガ參倚小學ニ於テ談話シタル中ニ左ノ言アリ
曰ハク

余ハ性未記憶力ニ乏シク師父ノ前ニ於テ赤面
スルヲ甚多カリキ故ニ一日師ニ向ヒテ記憶力
ヲ增長スル所以ヲ問ヘリ師曰ハク記憶力ノ弱
キハ憂フルニ足ラズ假令ヘバ磁石ニテ又物ヲ
磨クカ如ク勉メテ止マザレバ年ト共ニ自然ニ
覺エ得ル様ニナルベシ又書物ノミ讀ミタリト
テ實行ナケレバ何ノ効カアランヤ古語ニ孝ハ
百行ノ本ナリト云ヒ又孝ハ徳ノ本ナリ故ノ由
リテ生スル所ナリトモ云ヘリ左レバ親ニ孝行
サハスレバ如何ナル善事モ成レ得ラレベシ畢

竟學問ヲ爲スノ要ハ身ヲ修メ人ノ道ヲ行フニ
在リ而シテ其ノ身ヲ修ムルノ本ハ即孝行ナリ
故ニ孝ノ一字ヲ能ク記憶シ此ノ孝ノ磁石ヲ以
テ研磨スレバ百行皆善トナル左レバ文字ノ讀
メザル位ハ憂モ耻グルニ足ラズ汝今ヨリ偏ニ
心ヲ孝道ニ盡クシ以テ善ク勉ムル時ハ記憶力
モ亦増進シ来ルベシト余之ヲ聞キ大ニ感悟シ
日夜心ヲ孝道ニ注ギ遂ニ孝道ヲ盡クスノ一方
策ヲ案シ斯ノ如キ守札ヲ製シ日夜肌ヲ離サズ
今年唯今マテ大切ニ纏携シ居レリ云々懐中ヨ
リ木綿端ノ燈袋様ノモノヲ出シ示シ語リテ曰
ハク是レハ余ガ十四歳ノ時ノトニシテ爾來ニ

丹波志

十年間人ニ知ラサズ掛ケ居リシが其ノ間ニ袋
 ヲ更フルニ度紐ニ至リテハ其ノ幾度ナルヲ知
 ラズ此ノ袋ハ母ノ手作ナレバ母ノ死後ハ形見
 ト思ヒ破損スレドモ更ニ改メズ妻ヲシテ其ノ
 外袋ヲ製セシメテ之ヲ頸ニ掛ケ居ルナリ斯様
 ノモノヲ頸ニ掛ケ居ラハ随分邪魔ニナル併
 シ其ノ邪魔ニナル所か即我ガ内心ヲ刺撃シテ
 警發セシムルノ媒トナリ憤怒怠慢等ヲ制スル
 所以ニシテ親ノ心ニモ大ニ忤ノ事無キ様ニナ
 リタル效驗アリタルモノ云々



包紐表紙ノ年号破レ不分明ナリ
 夫ニ忘レシ由ナレドモ夫ガ十四歳ノ時
 ナリシヲ以テ推セバ安政五年ナルベシ

正直
 孝行
 慈悲
 父母ノ孝行
 父ノ恩ニ高山母徳ニ深海
 君ノ忠儀 敬白
 平生心得ノ守也
 右守護ノ所勿忘失

勘仁堪忍ノ誤 儀ノ義ノ誤
 夫ハ小兒ノ時ノ誤記ナリト云ヘリ
 孫太郎ハ夫ノ幼名

氏ノ傳行ハ家訓ヨリ養成セラル 祖父三郎兵衛
ハ慈善家ナリ村中ノ貧者ニ金穀ヲ施與スルヲ樂
ム其ノ施與スルヤ貧者ヲシテ負債者タラシメ其
ノ義務ヲ知り勤勉自營ノ志ヲ起サシメ以テ依
頼心ヲ絶テ機ヲ昏テ券ヲ燒キ或ハ返却ス其ノ怠惰
ニシテ自辨スル能ハザル者責メテ改悛セシム貧
者中米麥ヲ高買ヨリ買フアレバ何故我カ許ニ米
ヲ買ハザルヤト云フ升ハ平常村民ニ約シ正直者
ニハ米穀ヲ賤賣スベシト言ハリシニ由ル一村大
抵貧農ナリシカバ其ノ惠與ヲ被ラザル者無キニ
領主ヨリノ問ニ對シサルヲ嘗テ無シト答ヘ屢賞
ノ途ヲ預社セリ 天明年間米價暴騰シ貧民飢ニ

瀬スルヤ所々強訴トテ百姓一揆起コリ豪農富商
造釀ヲ崩壊シテ各村ヲ荒ラシ廻ハリタルモ此ノ
邊ハ之ヲ免レヌ其ノ初メ七百許リノ暴徒村境ニ
臨ムト聞クヤ三郎兵衛衣服ヲ嚴シ威儀ヲ正フシ
テ群到スルノ暴徒ニ對シ從容云ヘラク本村ハ貧
民多クシテ一家ノ暮ラシ方ニサヘ差支ヘル程ナ
リ我ソノ庄屋村長ト爲リ乍ラ之ヲ救フ能ハズ由
リテ我が一家有テユルモノヲ以テ諸君ノ使用ニ
任サシ不足ナレドモ何卒ソレ文ニテ濟マセ貧家
ヲ助ケヨト精神面ニ溢レシカバ殘忍ナル一揆モ
其ノ誠實ヲ感認シテ異口同音ニ云フ此ノ平常篤
實ニシテ施與ヲ好ム檀那ヲ苦ムルハ吾等ノ趣旨

ニアラズ此ノ村ニテハ一人モ働ク^{乱妨ヲ}ナカレ
ト戒ノ聲ニ通行シ隣村ヘ向ヒタリ
氏ノ行動其ノ祖ニ遜ラズ大事ニ逢着セザルヲ以
テ頭ハレザルノミ其ノ勤慎勉業慈惠ナド年ヲ逐
フテ濃厚ニ父ノ病ニ晝夜其ノ傍ヲ離レザル躬
糸紐ヲ操リ婢僕ト勞ヲ分チル學事ヲ獎勵セシ
ムル人ノ善ヲ言ヒ人ノ惡ヲ語ラザル一家和
氣ニ満テタル等記載ニ違アラズ村内ニ美服ヲ
纏フモノ氏ニ逢ヘハ匿ル近郷ニ至ルマデ之ヲ
以テ模範トスルモノ出デ来ル
著者丹波誌ヲ編輯スルニ毎年地方ヲ歴訪ス其ノ
綾部ニ赴クノ際此ノ家ヲ訪フ三郎兵衛氏庭ニ立

丹波志

子奴ノ米ヲ量ルヲ檢ス予ハ予ガ名ヲ通ジ此ノ村
ノ小學教員果ハ予ノ門人ノ子ナルヲ告ゲ紹
々ニ代フ氏其ノ家族ニ命ジ予ヲ延キ席ニ請セシ
△南向四席頗廣シ坐スル頃時氏服ヲ換ヘテ來ル
新詰敷時其ノ人ト爲リ聞ク所ニ符ス一モ其ノ長
所ヲ口ニセズ問フモノヲシテ啞然タラシム己ニ
シテ食饌至ル氏云フ吾ガ家ハ祖先ヨリ三年前ノ
米ヲ常食トス恐クハ先生ノ口ニ適ハサルベシ新
米ヲ炊カントスルニハ時間ヲ要スレバ午飯丈ハ
此レニテ辛抱アリタシト予ハ却テ其ノ家憲ニ副
ハント欲シ相對シテ之ヲ喫スルヲ欣賞セリ飯茶
褐色少臭味ヲ帶フ煮蔬燒枯魚平煮ノ儉想フベシ

氏早ク妻ヲ喪フテ復娶ラズ子婦能ク其ノ儉薄ニ
耐フ亦感ズベシ家藏ノ甲冑一領九鬼侯ヨリ拜
賜セルモノ頗貴重美飾ノモノタリ毎元日之ヲ床
間ニ置キ鏡餅ヲ供スルヲ例トシ舊主ヲ慕フノ情
厚シ予ハ由ツテ携フル所ノ九鬼隆備ノ寫真一葉
ヲ出タシ之ヲ贈ツテ曰ハク予ガ今度ノ行ハ綾部
ヲ探ルニアリ綾部ノ舊藩主隆備ハ京都華族會館
ニ於ケル予ガ生徒ナルヲ以テ此ノ寫真アル所以
ナリ數葉ヲ携フル所以ハ之ヲ綾部ニアル舊臣某
々ニ與ヘシカ爲ナリト氏恭敷ク之ヲ承ケ曰ハク
以テ家寶トセント翌年々頭狀至ル舊主ヨリ拜領
ノ甲冑ヲ祭り惠マレタル寫真ヲ併セ列ネタリト

丹波志

保井谷村栗野村合高七百石六斗三分四合	文久
年度改	嶋彌左衛門知行
妙樂寺村高四百七十八石五斗七合	文久年度改
嶋彌左衛門	
猪ノ鼻村高百六十四石六斗二勺	内百十四石三
斗二升二勺	柴田河内守五十石二斗八升
河野	
仁十郎知行	
水吞村高百八十一石八斗三分七合七勺	水野壹
岐守知行	六十八石七斗二升
河野	仁十郎知行
右熟トモ徳川旗下士	
戸津川村高五十石	等持院

◎ 丹波育兒院一斑

(大正六年十二月末調査)

創立

明治四十年六月廿七日

位置

京都府丹波國船井郡三ノ宮村

組織

個人經營

代表

創立者、院長、辻原光昭

目的

汎く無告ノ孤兒及之ト事情ヲ等レクスル児童ヲ救済教育シ自立自治ノ道ヲ啓セシム

職員

院長一名、主婦一名、雜務二名、

維持

賛助會員、募金、音聲演藝會ノ收入、有志家ノ寄附、院內勤勞ノ收益

入院

十二歳以下ニシテ扶養者ナキモノハ市町村長學校長警察官吏特志家ノ紹介ヨリ取調ノ上入院セシム

教育

家庭ニ於テハ院長主事等凡テ児童ノ寢食ヲ共ニシテ親子ノ愛情ヲ保フヲ主トシ學藝中ハ村立小學校ニ通シテ國算及教育ヲ施シ又十歳以上ノ児童ニハ家庭ノ勤勞農事ノ手助けヲナサシメテ勞働ノ習慣ヲ養フ且ツ日曜學校児童圖書館ニヨリテ精神教育ニ勉メ休日ヲ利用ヒテ娛樂ヲ供フ

退院

児童二十歳以上ニ達シ自治ノ道立タルモノハ退院セシム退院後ハ情誼ヲ存スルモ義務ク履ハシメズ

三日月 城下 柳本ノ臣安藤八郎 即能登ヲ出云 城ノ置キ名倉為 七郎之副ノ城 代トス 天正年間ニ宇津某 方軍士ヲ入レ置ケル ヲ光泰ノ千ニテ攻 落スニ攻落ス

八斗一合 上世木村百八十一石九斗四分一合
 上木住村百四石六斗五分七合 下木住村八十五
 石七斗九分 園部領
 船井郡ヲ以テ凸字形トセン 宇比ノ地勢ハ具ノ突
 出ノ中央ニ當リ新莊ト五個莊ト具ノ左右ニ羅列
 シ以テ突出ノ頭トナル
 弓削川北京田郡ヨリ来リ山角丘嘴ヲ縫ヒツ、西
 下ス之レニ沿フ所ノ地ハ肥沃ナリ然レドモ具ノ
 野ハ長衍シテ幅曠無ク耕耘スルノ餘餘ナキヲ以
 テ一村ノ食ヲ足ス能ハズ是ニ於テ山ニ樵シ川ニ
 筏スルモノ過半ナリ川ノ賜モ、大ナリシモ近歲
 渙利ヲ逐フモノ益々多ク副産ノ利次第ニ減耗

世木村

ス
 封建時代ノ納租率ニ於テハ免セツ羊即チ十石ノ
 産米ニ對スル七石半ノ上納ニテ園部藩領中最重
 極高ノ負擔地タリキ人民ガ如何ニシテ此ノ重任
 ニ耐エタル乎粟作ノ麥類ニ依レル乎否々麥作ハ
 此ノ寒地ニ敵セズ左ニ具ノ理由ヲ摘記セン
 具ノ一ハ浮木ノ利多キト一ハ金差即チ金銀貨率
 紙幣時價ノ差ヲ考ヘテ利ヲ得ルナリ具ノ方嗟峨
 京都ノ金銀兩本位ヲ立テ紙幣ヲ用ヒズ園部札
 ヲ携ヘ至ルモ之ヲ省ルモノ無シ園部ニテ金壹兩
 ヲ以テ藩札ニ引キ換ヘンニハ百三十匁ノ札ヲ供
 ス藩ニ於テハ百匁ヲ以テ金壹兩ニ當ラントスル

丹波志

毛不換紙幣ナルヲ以テ時價下向シ金ニ對スルノ
 倍額ニ垂ントス故ニ當所ノ棧差ハ嵯峨ニテ仕切
 ラ得歸リ具ノ金壹兩ヲ園部札ニ引換ヘ之ヲ園部
 ニ納租ス具ノ地ノ米穀ニ乏キヲ知レル藩廳ハ銀
 納トシテ紙納ヲ許可セザル可ラズ且ソノ銀札表
 面ニ百匁ヲ以テ金壹兩ニ換フルノ明文アルヲ以
 テ實價壹兩ノ百三十匁ナルヲ知ルトハ云ヘ札面
 ノ明文ニ由リ百匁ヲ以テ壹兩トシテ收納セザル
 ラ得ズ是ニ於テ納稅者手中毎壹兩ニ三十匁ツ、
 ノ隱利アリ是レソノ苛稅ニ耐フル所以ナリ
 田園少キヲ以テ農者モ亦少シ耕耘スル者アルニ
 純業ニアラズ米穀ノ故欠ハ人口ノ増殖ニ從フテ

之ヲ外ニ仰ガザルヲ得ズ船井郡ノ近村ト並來田
 郡ノ神吉ハコレガ供給ヲナス
 生計ノ度ハ殿田ノ外大ニ下ル只一山脈ヲ間ラタ
 ルノミニシテ山隈道沿邊ノ村落ト大ニ差違ヲ爲
 ス 年貢ハ檢見取ナリシヲ京都府管轄後幾年實
 取年貢トセリ
 世木殿田ヨリ保津川ニ通ズルノ棧路ハ保津川ト
 同ジク角倉氏ノ創開スル所ニシテ保津川通棧ノ
 成效後數年ニ成レリ
 曲瀨 天若ヨリスル一川木住ヨリスル一川八幡
 社前ニ繪シテ曲瀨トナリ數大ノ碧潭ト無數ノ怪
 岩ト相待ワテ一奇景ヲ畫ク香魚ノ發刺ハ釣魚家

京都府立総合資料館所蔵

ノ来遊ヲ噉ス
八幡神社 尾塔神社ト呼ブ應神天皇ヲ主神トシ
仲哀天皇神功皇后ヲ副位トス弘仁三年山城高尾
ノ平岡ヨリノ勸請ニシテ今ノ神殿ハ同時ノ建造
ニ係カル武内宿禰ノ社アリ疫神社ト稱シ厄除ノ
爲ニ參詣スルモノ舊暦正月十九日ニ群賽ス神符
ヲ出カシ祈禱ヲ爲ス
笛吹山 殿田ヨリ木住ニ達スルノ路ニ沿フノ山
ナリ山麓ニ笛吹神社アリ老杉一株三文五尺ノ周
圍ニシテ數十間ノ高サアリ五百年ヲ経過シタル
モノト云フ 和漢三才圖繪ニ千年山富ノ小山ト
此ノ山ヲ譽ゲ丹波ノ三景トス山中ノ大楓樹ハ年

毎ニ人見ヲ所ノ秋ヲ彩ルゾ哀レナル大江匡房ノ
歌アリ夫木集ニ出ヅ

足引の留吹山のかひあつてもうつせり秋の久きをま控

念佛寺 中世木ニアリ堂宇ノ木材多ク明智光秀
ノ刻印アリ升ハ維任瓦ガ龜山周山ニ城建築ノ餘
材モテ建築シタルニ由ルトカヤ
経塚 牧山ニアリ海石ヲ疊ニ五輪ノ塔ニ基ヲ立
ツ里人恐レテ近ヅカズ彫刻ノ文字ハ讀ミ難シ傳
ハ云フ鎌倉幕府ノ時ニ西明寺時頼入道行脚シテ
此所ニ至リ留錫スル月アリ其ノ間ニ一字一石ノ
法華經ヲ轉寫シ之ヲ埋藏シタルナリト南牟田郡
千代川村千原ノ高牟塔婆ノ條下ニ出カス文ヲ考

天草七景

猿飛漢業

櫻堂 野尻 巖

山公攀樹嘯雲飛真個猿飛名不遠
遼水奔流秋九月溪鮮無數滿梁歸

大場浮筏

溪筏千乘集大場去來棹子立昏黃
紛紛白雪粘裳望恰似鸞兒翻野塘

貞任古塚

東陸豪族若何緣古塚淒々八百年
香火到今猶不絕勇名長與此山長

天若茅亭

春寒買醉管絃稀村婦媯然見鳥歸
不羨市城樓閣美茅亭終歲木綿衣

樂川碧瀨

山峽漸過水漸平碧流三里濯吾纒
誰知此地香魚美休說吳江鱸膾羹

帝釋山廟

陰森古廟午猶寒神釵有威除百難
珍滅藕絲孔中賊一天晴甫我心安

殿田漁笛

山驛從來車馬稀只看日夕野牛歸
文明忽破千年夢瀛笛聲々繞岫飛

切明々滿俺 宇木任ニアリ本邦上等マシカンヲ

京都府立総合資料館所蔵

稱スルニ切明ノ二字ヲ冠ラシムルニ至ル惜ムベシ
 近來產出漸耗ス
 大字殿田 高二百五十一石ニ斗一升一合 文久改
 此ノ地ハ郡中北部ノ山間ニアル要地ニシテ商店
 農工ヲ交ヘニ百戸計リノ小市街ヲ形造リ以テ近
 村ノ需要ヲ待ツ旅店六戸宿客常ニ充リ壯丁ノ勞
 勤ハ夏ニ車レ冬ニ棧ス角倉了意が大堰川系舟筏
 ヲ管理スルニ當リ此所ニ新渡舟十隻ヲ浮ブルノ
 許可ヲ與ヘ今日ニ至ルノ利ヲ基セリ
 車一輛荷重二十貫因部迄ノ賃錢金二十錢 明治二十
 リニカ今廿四十貫ノ賃四十錢近來道路ノ修繕
 其ノ効ヲ養シ積量ノ増加ヲ爲ス

産物 木材 薪 炭 醬油 酒 米酒 栗 柿

松茸 鮎

山ノ幸ハ往古ヨリシテ此ノ地方人民ヲ利ス人民
 亦造林ノ業ニ熟シ古人ノ伐採ソノマ、ニセズ伐
 採後植栽シ利途ノ絶滅セザル注意ヲ拂フ故ニ山
 ノ禿スル無ク林ノ鬱スルヲ見テ他郷ノ旅客往々
 無盡載ノ山林ト目ス
 鮎ノ輸出年一年ニ盛ニシテ濫漁ノ弊一時鮎種
 ヲシテ皆無ナラシメシカト怖レシメシモ近年漁
 汰制限ソノ効ヲ顕シ一夏利金千圓以上ニ昇ル
 里程 因部二里 神吉一里 峠路三里 筏路四
 里 北桑田郡往來

京都府立総合資料館所蔵

上蕚生村高百石下蕚生村八十一石八斗八升 上
 蕚生ハ梅若知行他ハ多ク園部藩領
 競美石ハ風景ノ地ナリ 逆葉ノ竹實ハ逆枝ノ竹
 ナリ枝ノ垂ル、か爲ニ葉ノ下向クナリ 傳説ニ
 因レバ旅客が携へ来レル竹杖ヲ不用ナリトテ逆
 ニ地ハツキサシタルが領ヲ芽ヲ出シタルナリト
 ゴ
 蚊ノ居ラヌ家 殿田ヨリ一里半許西北吉田實次
 方ニハ夏日蚊帳ヲ下ケヌト云フ習慣ナリ 加
 近來少々ツ、来ルトゴ 地名牧山 傳説例ノ弘治大
 師トク何上人トカバ蚊ヲ封シタルナリトゴ

逆葉ノ竹



山口関助畧傳 殿田 日吉神社ニモ関助ノ佩刀
 ヲ納ム 殿田ノ山口紋次郎ハ子孫ナリ
 殿村ニ一奇兒ヲ産ヌ身軀偉大十八歳ニシテ長六
 尺三寸力量数人ヲ兼テ慶安年間領主園部侯御行
 シテ村邑ヲ巡視ス山左川右ソノ道極メテ細キ所
 ニ至リ米ヲ背ニスル牛ニ逢フ先導ノ士ソノ牛ヲ
 除ケシム能ハズ驚リ且叱ス牛ヲ追テ若者曰ハ
 ク暫ク待ツテ居ナサレ通アル様ニセント領テ
 両手ニテ牛ノ前足ニ本ト後足ニ本トヲ合ハセ持
 テ高ク差シ上ケ此ノ下通リ給ヘト云フ至從八九
 名ノ過ヤ了ルヲ見テ其ノ牛ヲ地上ニ卸シ後ヲモ
 顧ミズ牛ヲ逐ヒ行ク主徑ソノ非凡ノ力量ト態度

丹波志

石馬土子内無カリ
此ノ人モアナガシ長
高キ人カトシ其ノ
名ヲ爾等歸リ言ハ
馬トアリテ其ノ者セ
文トアリテ其ノ者セ
ヒキ鬼ノ様トシ其
向キカトシ其ノ
ルヲ聞キ歸リ言ハ
タルニ其ノ者ヨト
リテ庭上ニ入ル文
尺許ノ良シ鬼
後アリ云々

橋詰兄ノ九世梅津兵庫頭友時從五位下大和國七
萬石ノ領至ハ仁和四年ニ卒ス其ノ二十七世若狹
守安久ノ妻一夜眠中猿樂ノ假面ヲ得テ感シ夢覺
ノテ之ヲ夫ニ告ケ共ニ奇異ノ思ヲ寓ス月立チ男
兒生マレル名ヲ景久ト命ズ長ジテ叙任シ兵庫頭ト
ナリ京ニ入ル京ニ觀世阿彌アリ猿樂ノ一座トシ
テ技藝ニ堪能ナリ景久一見ヒテ大ニ矐ビ之レト
交リ其ノ技ヲ考究習熟シ技術老成ノ域ニ入り幾
許ナラズシテ名聲大ニ馳カリ文明十三年正月宮
中ノ御能ニ徵サレテ蘆雁ヲ演シ後土御門天皇ノ
睿賞ヲ博シ姓ヲ梅若ト賜フ時ニ年齒十六梅若ト
ハ梅津ニ任スル若者ト云フ意トカヤ景久當時洛

西梅津ノ里ニ住居スルニ由ル爾來刻苦勵精斯道
ニ盡瘁シ諸家衆疏ノ長ヲ采リ短ヲ棄テ遂ニ一派
ヲ立テ名ツケテ梅若流ト曰フ是ニ於テ梅若太夫
ノ名海内ヲ映スルニ至ル享祿二年七月十三日歿
ス子清久家久アリ清久後ニ直久ト改ム家久ハ織
田信長ニ仕ヘテ世木莊五百石ヲ賜ハル信長ノ此
ノ藝ニ入ル家久ノ誘導ソノ多キニ居リ興至レバ
必舞ヲ彼ノ桶狹間殿擊前ニ乱舞シテ將士ヲ鼓舞
シタルニテモ知ラル家久死後子廣長父ノ名ヲ嗣
キ家久トシ明智ノ乱ニ其ノ黨與トナリ秀吉ノ爲
ニ領地ヲ沒收セラレ又是レ恐ラク廣長ノ素志ナ
ラズ明智軍ガ丹波ニ入ルニ當リ之ニ抗スル能ハ

丹波志

ガリシハ梅若氏ノミニ非ス地侍往々然リシナリ
 或ハ云フ廣長戦死シ幼子アリ氏盛ト名ヅク母之
 レヲ携ヘテ四方ニ流寓ス長シテ家傳ノ法ヲ得テ
 名アリ諸兄三十一世ノ孫梅若氏盛ト稱シテ自ラ
 售ル大阪ノ役東軍持久弱敵ノ計ヲ立テ文學技藝
 ノ士ヲ四徴シ之ヲ幕中ニ集收スルヤ氏盛興カル
 茶臼山御能ノ席ニ於テ祖先創始ノ技ヲ演ス賞賜
 セラレテ舊地高百石ヲ給フ命アリ爾後親世連役
 トナリ親世流者タラシム由リテ以耒梅若流ノ名
 ハ無クナリ四十世氏好ハ將軍家治ニ事ハ技名ヲ
 掃ケ蒸世中ノ傑物ト呼ハル文政元年歿ス年七十
 五ノ孫六郎氏暁天性磊落家産ヲ蕩盡ス安政元

九年十一月六日ニ没ス年七十九養子六郎辛ヲシ
 テ續ガテ得タリ江戸八町堀ノ賜郎相傳ヘテ三
 百年ニ殆ントス
 徳川家四座能樂 親世太夫 喜多太夫 寶生太
 夫 全春太夫
 次ノ三家 金剛日吉梅若 此外ニ極嘯ハ教大鼓笛等各專
 門アリ
 梅若家世系 梅津友時二十八世景久ヲ高祖トス
 初メテ梅若大夫ヲ名乗ル
 景久 清久 直久ト改ム 家久 廣長 父ノ名ヲ嗣キ家久
 トナル
 氏盛 氏好 氏童 氏興 氏知 氏啟 氏喜
 氏賴 氏好 七世ノ祖ト
 名ヲ同フス 氏亘 氏暁 氏實 養子ナリ
 初名六郎
後ニ實ノ一字
 名トス 氏演 後ニ親世清之
 ト呼ブ 六郎 氏實ノ子 萬三郎

京都府立総合資料館所蔵

美雄 龍雄等各自藝名アリ 一説景久 清久

直久ト改ム 直久 家久 廣長 家久ト改ム 氏盛 氏久 氏

重 氏好 氏興 氏知 氏啟 氏喜 氏賴

氏好 氏直 氏暁 氏實 後ニ實ト改ム 氏演 後ニ觀世清

六郎 氏實ノ子

邸地ハ旭山ニアリ領地上蔭田百石 明治二十年

祖先ノ千年祭ヲ修ス累世ノ墓所ニ一碑ヲ立テ從

五位下梅津兵庫頭友時ノ碑トス

文久年間ノ書上ニ申レバ本支合計十家アリテ親

世疏ニ屬ス只梅若仁兵衛ハ實生ニ屬ス

梅若六郎 梅若孫七郎 梅若助四郎 梅若幸

次郎 梅若助兵衛 梅若與五郎 梅若新吉

梅若新十郎 梅若次郎兵衛 梅若與五郎 梅

若仁兵衛 梅若龜之

大正六年十月二十七日大阪博物館ニテ

木賊 萬三郎



京都府立総合資料館所蔵

東京梅若能樂堂工費十六萬圓大正八年九月落生
今ヤ能五流觀世寶生金春喜多ノ四流ニ梅若ヲ加

鉢ノ木 六郎



フルトナレリ

萬三郎ハ兄ニシテ六郎ハ弟ナリ六郎本宗トナレル

ヲ以テ九月二十一日ノ祝能ニモ兄ニ先タリテ翁

養老ヲ勤メ萬三郎ハ石橋大獅子(半能)ヲ勤ム看者

萬三郎ノ謙讓ヲ稱ス

實ノ小傳

實ハ文政十一年四月十三日江戸日本橋本銀町ニ

生マレ知名龜次郎後ニ梅若六郎ノ養子トナリ六

之亟ト改稱ス天保十年八月家督ヲ襲ギ六郎ト名

乗リ氏實ト呼ブ技藝上達シ弘化二年五月十八日

幕府御表徒移ノ祝能ニ祝言岩舟ヲ勤メタルヲ始

トシ嘉永四年本丸御用ヲ命ゼラレ西丸奥詰トナ

リ將軍ノ相争ニ百サル王政維新トナリテ祿ニ離
レ斯道ノ關係者ハ多ク離散シ觀世大夫ノ如キモ
一時駿府ノ隱退セシカ實ハ苦心慘境ノ裡ニ技藝
ヲ捨テガリキ明治四年舊篠山藩主ナル青山家ヨ
リ能舞臺ヲ譲リ受テ藏前ノ居宅内ニ設置シ同年
十一月二十六日初メテ舞臺開キ能ヲ催シ其ノ後
裝束面等ヲ新調シ絶ハズ斯業ヲ續興シ九年四月
四日岩倉從一位邸ニ行幸ノ際能樂天覽アリシ際
三番ノ能ヲ勤メテ一世ノ光榮ヲ加ヘタリ同十一
年青山御所ニ御能舞臺ノ御新築アリテ御舞臺開
ニ正尊起證文ヲ仰テ付ケラレ又石橋道成寺等ヲ
英照皇太后ノ御覽ニ供シテ御感ニ預カリ十四年

十二月十六日御好ニニテ鉢ノ木ヲ勤メタリ岩倉
右府始メ朝野紳士ノ盡カニテ能樂復興セラレ十
三年中ニハ芝山内ニ能樂堂ノ新設セラル、十寶
生九郎始メ各派ノ名手ト共ニ出勤シ漸ク斯道ノ
祭展ヲ見ルト共ニ技藝圓熟シ終ニ能思ノ名人ト
呼ハル、ニ至リ又四十二年一月十九日老病ヲ以
テ誤州藏前ノ自邸ニテ逝ク年八十二養子アリ實
子アリ以テ箕裘ヲ續ケニ足ル實死スルニ瞑ス可
ニ
元和二年正月元日江戸城拜賀式極縁ニテ梅若親
世等ニ派レノ杯ヲ賜フ是レハ將軍ガ一飲セシ杯
ニテ酒ヲ下ナル、ナリ二日誦初ノ式アリ大廣間

甲辰志

三三三 家以下諸大名旗下列坐祇候初獻ニ献三献
 賜杯ヲ賜フ觀世左近四海波靜ニテト謠フ加
 酒アリ 三家并ニ公子ヨリ杯臺ヲ献ス七献
 家門大名八献國守大名十献井伴直孝此ノ間ニ
 子終リテ鉦子ヲ納ム 老中廣縁ニ出テ觀世大夫
 ヲリ梅若等ニ時服ヲ纏頭ス次ニ柘竹ノ臺出テ
 加ハノ時弓矢ノ立合ヲ舞フ 終リ老中進ニ將軍
 ノ肩衣ヲ受テ之ヲ觀世左近ニ賜フ 三家以下皆
 肩衣ヲ脱ギ能役者ニ纏頭ス 終リテ役者ニ酒饌
 ヲ下賜ス折紙ヲモ下賜ス役者ハ各自肩衣ヲ持歸
 リ後日諸大名ハ持卷スレバ引換ニ目錄ニ添ハ代
 金ヲ與フ折紙ニハ金額ヲ書ク

大正六年十月二十七日大阪府立博物館能舞臺ニ
 於ケル梅若能ハ右ニ出セル圖ノ木賊鉢木ニ對ス
 ル好評ヲ博シ翌日ノ二日月ニハ初番龍雄龜之ノ
 小袖管我ハ哀レニ花ヤカニニ番目萬三郎ノ安宅
 勅進懐延年舞ハ勇壯無限ニ三番目六郎鐵之丞ノ
 松風ハ折柄ノ秋雨蕭條中ニ幽寂ノ趣ヲ悉クシ憂
 シトモ思ハス潮路カマヲテ淡味中ニ感傷的ノ味
 ヲ示シ萬三郎ノ磯田川六郎ノ望月等兄弟ノ得意
 物トテ大ニ看客ノ情ヲ惹ケリ一門ヲ譽ゲテ斯業
 ニ従事シ一時衰潮ニ漲セル家聲ヲ挽回スル熱心
 ハ世ノ同情ヲ買ヒ得タリ

京都府立総合資料館所蔵

八木村

八木村記事

大字

八木

柴山

當村ハ本郡ノ東端ニアル名邑ニシテ山陰道コレ
ヲ貫穿ス古稱志摩郷ニ屬スト云フ一小街衢ヲ爲
ス所ニハ百五十戸許ノ高廓アリ四五町ノ間雜貨
米穀家具ヨリ萬般ノ品物ヲ陳列シ近傍諸村ノ需
要ヲ充タス然リト雖全一國ノ物品ヲ購得スルニ
ハ亀岡ニ赴クベシ濠車往復ノ賃錢ヲ掛フテ猶足
レリトノ語ヲ聞クハ唐ニ物價高下ノ差ノミナラ
ズ物品ノ新陳ニ大關係アリト云ハバ物價集散ノ
遲速ハ未以テ隣郡ノ都會ニ一籌ヲ輸スルナリ併
シ商人ノ機智ニ富ムハ近郡ニ比稀ナリ 村ニ沿
テテ川流アルハ舟楫ノ利ヲ博スバシ 馬車ノ東

八木村記事

西ニ疾驅シタルハ瀛車ノ爲ニ具ノ區域ヲ模奪セ
 ンレタリ 八木本郷ト云フハ全農ノ地ニシテ五
 穀ニ適シ産物ノ饒ナルヲ以テ領主國部侯御臺所
 ノ一ニ數ハラレ御用金ノ都度第一ニ指テ屬メラ
 レタル所トス 東方ニアリテ山丘ニ傍テ南位ノ
 山嶺ト北方ノ河身ト相接スル所ヲ郡界トス東ハ
 南栗田郡千代川村トス本郡東部ヲ以テ玳瑁ニ譬
 ハシ半具ノ缺所ハ即チ八木ナリ 其ノ缺所ヲ西
 行セシ半地勢次第ニ逼塞シ到ル處山嶽前面ニ横
 ハル 往時志摩郷吉富莊ナリシガ今ノ名トナリ
 シハ何時ノ頃ナルヲ詳ニセズ
 室町時代天下分封割據ノ姿ヲ現セルヤ一色義直

ノ有ニ歸シ波多野植通ノ八上城ニ據ルテ勢力ヲ
 此所ニ及ボス細川氏具ノ舊領タルヲ以テ之ヲカ
 筆ニ終ニニ氏ニ分割セラル之ヲ暫クシテ内藤備
 前守ナルモノ備中ノ國ヨリ來リ從臣數十名一劍
 ノ任ニ仗リ兵ヲ擧ゲ一地方ヲ席卷シ城郭ヲ山上
 下谿ノ間ニ構ヘ足利氏ニ乞フテ其ノ封冊ヲ受ケ
 遂ニ目代トナル 之ニ關スル諸書ノ抜書左ノ如
 シ 一説多紀郡日置村内藤道勝カ子季継尊氏ニ
 從テ栗田船井ニ郡ヲ與ハラル

系圖 初代備前守 二代備前守重則 三代備前守貞宗 第一説

系圖 初代備前守 二代伯耆守貞正 三代備前守貞宗 第二記

代々備前守ヲ名乗レルハ本國備中ニシテ猶其ノ

京都府立総合資料館所蔵

本ニ沂リテナリトカヤ

細川勝元ノ被官ニテ内藤瑯正忠元貞ナルモノ丹波ニ位ス具ノ紋三様アリ

應仁元年丹後但馬因幡ノ山名方京都へ攻ノ上ルニヨリ細川ヨリ備前守繁則ニ命レ之ニ三千餘騎ヲ加ヘテ天田郡夜久野ニテ防カシム敵ハ三萬餘騎アリ内藤孫四郎貞徳亦死ス宗徳ノ者皆亦タレ敗北シテ歸リケル何床郡山家村ニ備前ガ尾トモ又ハ備前ガ尾トモ言フ所ハ内藤備前守ガ戦死

ノ所ナリトテ八木ノ内藤トスレドモ同名異人ナリト山家ノ部ニ辨ス以下諸書ニ散見スル所ト諸家ニ藏スル古文ニヨリ難輯ス
永正四年細川家ニテハ澄元家督トナリ給ヒ目出度カリケル所ニ御内ノ三好筑前守長之高島與三尋餘リニ無道ノ振舞共ナリケル程ニ此ノ分ニテハ如何セントテ内々ツブヤキケル所ニ京ニテハ奈良修理亮元吉撰津ニテハ伊丹兵庫助元扶丹波ニテハ内藤備前守貞正相談シムホシラ企テ同五年戊申四月九日六郎澄元ヲ叛キ申スナリ
永正十七年庚申ニナリ正月十日高國ヨリ諸陣ニ觸レサセ貳萬餘騎ニテテチツテ出デ諸口ニテ合戦終日

京都府立総合資料館所蔵

二在り高国方丹波ノ守護代内藤備前守次花ヲ散
 ラシテ合戦サセ切リ負ケ數百人計リ討死サセテ
 引キニケリ 大永六年丙戌七月十三日御内ノ香
 西四郎左衛門敵心アリトテ屋形ハ石シテ生害セ
 サセラレケレバ兄波多野同弟ノ柳本遺恨ニ思ヒ
 阿波國ハ申合セ大兵乱ラ出来ヌ 十月下旬ニ波
 多野ハ丹州八上ノ城ハ左籠ル 天上城ハ取掛カル
 人數ハ河原林修理亮同彈正忠塩川孫太郎池田彈
 正コノ人々攻戦フト雖神尾ノ陣敗レケレバ明ク
 ル十二月一日コノ陣破レケリ然ルニ池田彈正ハ
 波多野カ甥ナレバ則カノ方ハウラガヘリ河原林
 塩川ノ衆ノ退口ハ矢イクテ致スナリ 大永七年

正月中ハ雙方共ニ勢ツカヒ無シ二月ニナルナラ
 バ道永細川高ヨリ丹波ハ勢ツカヒ有ルベキニテ有
 リケレトモ越前ヨリノ合力勢相待ツテ延引申ス
 所ニ結局二月三日ニ丹波ヨリ柳本大江ノ山口ハ
 切上リ同四日未明ヨリ山崎ハ取懸カリ西薬師寺
 ヲ攻ム 道永桂川ハカ、ラレタルニ奈良原修理
 亮同興三郎一番ニ進ミ出ルニ澄元方ノ赤澤新次
 郎同方香西元盛ト渡リ合ヒ赤澤香西討死ス又丹
 波勢波多野衆懸合フテ合戦ス丹波衆モ八十餘人
 討死ス手負數知レズ 當時細川政元ハ子ナキヲ
 以テ九條關白ノ子尚経ヲ養子トス聰明五郎是レ
 ナリ後ニ澄元ト稱ス又阿波ノ澄元ヲ養子トス澄

元ニハ丹波國ヲ與ヘラ國ニ下レ申サレケレハ孫
 無念ニ思ハレケルカ政元殺サレテ澄元澄之相戰
 フ天正二十年栗田郡ニ於テ細川晴元浪人衆ト
 戰フテ久細方内藤備前守履ケ十人討死ス 同ニ
 十二年九月三日三好方ハ松永兄弟大將ニテ丹州
 出陣ナリ波多野典兵衛尉方城ヲ攻ムルニ兄弟討
 シレ歸ルナリ内藤方ノ城丹波八木ハ難儀候處松
 永甚助ハ内藤備前守聳ナレバ此ノ八木城ハ懸ケ
 入り堅固ナル衝トモ見事ナリ 同二十年細川晴
 元ノ属下内藤顯勝等京ニ入り等持院ニ陣ス松永
 久秀等四面ヨリ襲撃ス 同二十二年松永甚助屋
 上城ヲ攻ムル時備前守モ其手ニアリケルガ帥敗

レテ戰死ス 城兵閨キテ方々ハ落行キケルニゾ
 甚助コノ城ニ入り散卒ヲ集メ遂ニコレヲ守ル
 ヲ得タリ
 明智光秀ハ信長ノ命ヲ受ケ天正三年初メテ丹波
 ニ入り翌年ニ至ル迄小迫合アリレカ愈々怒攻
 撃ノ開始マラル、ヲ以テ御士野武士ヲ語ラテ
 味方ノ軍ニ應ゼレメントシタル書付ナリ
 折八木ハ上神尾ニ城征罰ニ軍全悉蒙
 勅命所發兵也今度澁川一谷細川藤春明智光秀馳
 向也此其方昔更重
 天恩命詔示國人勿令遠犯尚與之將議軍事下波
 寺功其地於乎定志可有恩賞也

京都府立総合資料館所蔵

天正三年

五月三日

信長

川勝一族中

知行方

一 船井内 五石

一 桑田内 五石

金子五石石高

金宛行 迄 宜令飲也

天正六年

五月五日

布武
天

朱印

川勝左兵衛との

本丸 内藤備前守 内藤土佐 八木玄蕃

八木和泉 一内藤和泉ト云 波々伯部兵部

兵部ト云フ

北二ノ丸 内藤五郎 内藤上野 大八木蟻若

左衛門 佐藤駿河 八木民部

烏丸三ノ丸 内藤法雲老 内藤兩宅老 赤坂

順齋 並河十郎 西山門藤

用人衆 大八木但馬 波々伯部中猪

馬廻衆 後藤藏之助 間刈兵助 太田平八

郎

足輕衆 塚本金八郎 高橋主税 板橋六

郎 高橋源藏 小谷玄吾 宅間左

京都府立総合資料館所蔵

源 竹内金石衛門

弓大將 八木孫太夫 坂口備後 波々伯部

伴與 杉崎惣後 中後藏丈 中川

兵部 川勝數馬 杉崎德右衛門

明田儀右衛門 杉崎孫之丞 坂本

四郎助

弓大將二番 大村平左衛門 西山外記 赤

坂嶋之助 小條孫三郎 前田丹後

原谷八郎助

弓大將三番 杉谷又太郎 漣織部 矢木甚

兵衛 野條若佐 西田羊藏 黒田

権八郎 廣瀬早善

弓大將四番 杉崎大和 八木又右衛門 長

尾請左衛門 矢木竹右衛門 秋田

龜松 大狩源十郎 高芝藏藤 野

口九郎左衛門

忍藏 弓大將ニテ忍ヲ兼ルモノ 小山織

之助 畠丑之助

弓大將五番 竹野又右衛門 小出金右衛門

大野萬藏 岩本徳太夫 名倉源

五郎 茨木三郎左衛門 岩淵勘左

衛門 柳瀬左京 三浦莊右衛門

氷上郡代官藏 芝田平藏 鍋嶋半庄 北村

権太夫

京都府立総合資料館所蔵

船井郡代官衆	矢木寅左衛門	木村清九郎
矢木全長衛	廣瀬又兵衛	
栗田郡代官衆	矢木岩見	高橋甚藏
官島		
九郎右衛門	矢野五郎右衛門	
何鹿郡代官衆	坂口備後	秋田彦太訂
井		
上通右衛門	森村五郎太夫	
天田郡代官衆	矢木全吾	八木角太夫
池		
田五郎太夫	西田源九郎	
多喜郡代官衆	杉本德善	安藤寅之助
杉		
崎太郎左衛門	矢木市太夫	
小姓衆	大矢木嶋之助	赤坂小十郎
鶴山		
長賀	澤山六彌	

大小姓衆	佐野又三丞	上野龜助	内藤平
九郎	和田三左衛門		
茶湯衆	寛久助	茨木喜齋	高卜齋
醫者衆	北小十九	半井十勝	
寅松口大將	八木全吾	坂之伯部四郎太夫	
杉谷口大將	坂口備後	秋田龜松	
鳴瀬口大將	杉本德善	安藤寅之文	
安津森口大將	高橋源藏	板橋六九郎	
岩屋口大將	八木岩見	天野寅右衛門	
辰口大將	大野萬藏	矢木竹右衛門	
天神口大將	松本喜六	大八木磯若左衛門	
以上	是天正元年五月朔日	龜山ヨリ	明智

京都府立総合資料館所蔵

方押寄スルト聞キ城中ニテ旗揃ヒタルモノ
ト云フ
右姓名前後複出スルモノ多シ蓋シ一人ニシ
テ兩三役ヲ兼ネタルモノカ其中ニ六個郡代
官アルハ其ノ何故ナルヤヲ詳ニセズ哈丹波
全國ノ主長ナルカ如キ觀アリ初代備前守が
何鹿郡ニマデ出征シタルヲ見レバ郡代ヲ置
ク丈ノ領地アリタルヤモ計ラレズ其ノ多喜
(多紀)郡ニマデ郡代ヲ置キタルハ何故ナルヤ
當時多紀郡ニハ歴然國主ヲ以テ自任シタル
波多野アリ之ニ内藤が造々郡代ヲ置クノ必
要ナシ否之ヲ置クノ權ナケレハナリ記スル

モノ、皇張誇大ニ失セラルカ彼ノ城地ノ塵大
ヲ示シタルト一般ナル乎
別紙寫ス所ノ繪圖ヲ見バ儼然タル城郭アルカ如
キモ今親臨査定スルニ山勢峻狹ニシテ地ノ棲櫓
館舎ヲ起スベキ無ク山上僅ニ平地ニ所アルノ三
而モ一トシテ十數間ノモノ無ク殆サハ無ク山脊
ヲ以テ往來ニ供スベキノミ夫レサハ二人ノ並行
ヲ容サズ四五百ノ兵モ居ルニ所無シ況ンヤ兵糧
器具ヲ納ルベキ藏庫オヤ山上山中邸第ノ迹無シ
諸將以下山下ニ住居シ重アルノ日籠城セシモノ
乎

泉井々流レテ柴山舊村ニ灌ガ村落ノ中央ヲ横断
シ八木村宇大狩代ニ至リ流末大堰川ニ入ル戰國
ノ時ハ山陰道ノ要所トシテ數ハラレタル城郭ナ
リシ

八木村地租 承應三年ニ領主小出信濃守ノ檢地
アリ左ノ如シ

町數合 上中下田畑屋敷川共 六十九町三反三畝九步

惣高 千百八十三石七斗六升

毛附高 九百一十一石四斗二升二合 承應三年

同 八百八十一石八斗三升三合四勺 享保六年

同 八百六十八石九斗三升八合二勺五才 同 九年

同 八百五十石二斗二升九合二勺五才 文政六年

同 八百五十九石六斗三升五合二勺五才 天保六年

同 八百八十一石九斗七升二合五勺五才 嘉永六年

同 千二百一十一石七斗四升七合八勺 明治二年十月

諸引物引ノ七百七十七石八升九合七勺

物成 四百九十七石八斗四升九合七勺 毛附六ツ四分取

物成ノ五百四石九斗 二年巳ヨリ三年請免

文久

千百四十九石八斗六升四合 八木

九十三石八斗三升六合 柴山

地七十一町八段八畝二十五步 價金四萬八千二百圓半

租金千四百四十圓六十六錢四厘 九年 同 千二百圓五十五錢四厘 十年改正

右ハ明治五年地券發行 九年ニ地租改正

十年ニ確定調査アリタル結果ナリ
正保二年書上明細帳寫

丹波國船井郡八木村高并家數之量

一 高九百九石三斗三升 毛付

一 貳百二十六石八斗七升 永川

内二十三畝七斗六升七合 荒起シ

ノ千百三十六石二斗 小出伊勢守領分 四萬ノ郷ナリ

一 家數高合六十三軒

内三十九軒 役人 同 十三軒 隱居 同 七軒

下人 同 四軒 寺

山ノ量

一 東西長リ二十八町 谷峰カケラ 一 南北横二町

谷峰カケラ

古城ヨリ 恒上高サ百三間

東長八町横一町半 草山 北長一町横一町

明神山

同長二町横一町半 柴山 南長六町横三町

草山

西長三町横二町 草山 西長八町横三町

草山

神前村入合ナリ

石之通書上申通少及相違無御座候爲後日一筆
如件

正保二年酉十一月 八木村庄屋 茂兵衛 判

年寄	傳	助	判
同	源左衛門	判	
同	助兵衛	判	
同	甚之丞	判	

菅沼左近大夫様御内

城所佐左衛門殿

赤井藤右衛門殿

里程 宇喜札場ヨリ 京都三條大橋 八里二十七町三十九

間二尺 福知山 十二里餘 園部 二里五十

一間二尺 龜岡 二里二十町九間二尺 篠

山 七里餘

鐵道 園部 四哩 龜岡 五哩 嵯峨 十哩廿五

鎖 七條 十八哩 三十七鎖

戶數 二百十九 人口一千百五十四 明治二十九年

從前ノ人別帳ハ村役人コレヲ管シ宗旨帳ハ寺

僧コレヲ管ス 明治五年村長ニテ戶籍ヲ掌リ

九年十一年改正アリ十八年又訂正セラレ

社倉米 八十一石四斗三升 十二年現在ノ分 六十

三石二斗四升 十七年現在ノ分

精醇學校 明治八年六月創設

大堰橋 明治二十七年五月二十七日落成式執行

長百二十一間 幅二間 費金二千二百四十圓

從前大堰川和知川ノ兩川系ニ於ケル橋梁ハ

各水源ニ架スル獨木橋又ハ土橋ノ類ノミナリ

京都府立総合資料館所蔵

之其ノ橋梁ナキ所ニハ渡舟アリ其ノ他ハ徒涉
 セガル可ラス 當所モ渡舟ノ場ナリシカ交通
 次第ニ頻繁ナルヨリ設橋ノ舉アリ之ヲ嵩矢ト
 レテ第二ニ起コレルハ亀岡宇津根橋トス 是
 ノ舉アリテヨリ深夜連聲渡ヲ喚フノ煩ヲ免レ
 タリ其ノ代リトシテ遊治郎ガ類々橋北ヨリ歩
 ヲ運ニテ晩ニ来リ曉ニ歸ルノ便ヲ得ツノ父兄
 ヲシテ架橋ニ對スルノ怨聲ヲ發セシノタリ
 綿 土産赤綿佳品ナリ八木綿ノ名ヲ以テ四方へ
 轉輸スルヲ以テ其ノ本家本元タル大和ノ國ノ八
 木村ノ名ヲ奪フモ可笑シケレ維新前後ヨリ青綿
 ノ利多キヲ以テ之ヲ作り多少聲望ヲ失墜セリ赤

種ハ其ノ質ノ強韌ナルヲ以テ木綿ヲ織ルニ適シ
 青種ハ一籌ヲ輸スルノ煩キアリ近傍諸村ノ産皆
 八木綿ノ名ヲ以テ京阪ニ出グ亀山藩ガ綿會所ヲ
 建テ國産ノ名ヲ以テ販出シタルモ此ノ土産ヲ采
 リタルナリ 亀岡ノ部ヲ冬看セヨ
 近來有名ナル此ノ産物カ米穀粟菜等ノ作り有利
 ナルニ壓伏セラシ漸次衰運ニ至ルモ是非ナケレ
 抑モ我が國ノ氣候風土カ棉花生産ニ適セガルハ
 絶對ノモノニ非ズ其ノ栽培ノ起原ハ今ヲ距ル
 實ニ一千百五十年前ニアリ其ノ後幾多ノ慶遷
 ヲ経テ寛永年間夙クモ大阪ニ於テ棉花市場ノ出
 現アリテ緊要農産物ノ一トシテ各藩之カ栽培ノ

京都府立総合資料館所蔵

獎勵ニ最ナル結果逐年産額ヲ増加シ
何麻郡護部ノ分ニ出セル
佐藤信剛安政末年米因南北戦争勃發ノ下アルヤ供
 給ノ路俄然トシテ開ケ邦産ノ棉花ヲシテ上海市
 場ニ輸出セラレタルノ盛運ニ向ヒタルニ明治元
 年ニ於ケル棉花ノ不作ハ端ナクモ外國棉花輸入
 ノ動機ヲ作シ良品續々進入シ本邦産ノモノ爲ニ
 退一步スルニ至リ當地ニマデモ影響スルニ至レ
 リ是ニ於テカ政府ハ米棉種子ヲ輸入シタル結果
 明治十四年ノ頃ソノ盛作ヲ見タルガ結局米國産
 ノ品質ニ於ケル價格ニ於ケルモノニ敵スル策ハ
 不且又紡績原料トシテ邦産ノ不適當ナル下判然
 シタルヨリ販路ノ縮少トナリ遂ニ今日ノ如ク棉

田ノ縮少トハナレリ
 石材 山中ヨリ掘リ出ス所ノモノニ類似花崗石
 アリ築造用トスベシ寺山高サ十五丈周廻十町礦
 脈充溢ス
 礫石 亦出ブ同脈中ニアリ青磁ナリ明治六年ノ
 発見ニテ毎年七千貫以上ノ産量ヲ出ダス
 強盜清八 清八ハ百姓ノ家ニ生マレ生得ノ盜癖
 アリテ以テ生地ノ人ニ盡過セラレテ少時郷里ヲ
 奔リテ浪伴ニ入り遂ニ巨盜トナリ京都清水五條
 坂ノ菊造振津御影ノ神浪父之丞同國有馬ノ丹波
 金通ト一夥トナリ近畿ヲ横行暴行ヲ爲セシカバ
 世コレヲ四人強盜ト呼ビ戒懼セシテ所司代板倉

伊賀守ノ年ニテ補勸所刑セラレタリ
 春日神社 朱雀天皇承平五年乙未大織冠鎌足公
 九世ノ裔孫右大辨藤原忠平ノ次男左近衛將監重
 房コレヲ勸請ス祭神ハ經津主命建御雷神天兒屋
 根命多氣理比賣命狹依比賣命多紀津比賣命トス
 祭日ハ十月二日社格ハ村社コレハ明治ニ至リ社
 祠調査アリテ定メレタル所 明治十六年 祠掌ヲ置
 カル 同八年 境内六百三十坪 天正年間ニ懸ケタ
 ル梵鐘アリ明治維新兩部神道ヲ廢ミタルニ由リ
 之ヲ卸シ拜殿ノ下ニ埋メ種鐘臺ハ毀却ス小社數
 棟アレドモ傳紀詳ナラズ
 天神社 天正年間ニ上野廣主ナルモノ社家ト唱

工境内ニアリシト云フ
 米山龍興寺 八木山ノ八木ガ何時ノ頃ヨリカ一
 字トナリ米山トハナレリトカヤ創建檀越ハ細川
 右京大夫晴元ニテ關山ハ妙心寺五世ノ義天玄承
 禪師トス享徳元年ニ建テラレ妙心寺ノ末寺ニテ
 臨濟宗ナリ本尊釋迦如來境内八百九十九坪民有
 地ノ第一種ニ屬ス天正年間ニハ塔頭九院アリ又
 東代山西明寺ノ十二院アリ坊谷ニハ一切經藏ア
 リ昌雲山大法寺ニ三院アリ明王院奥ノ院ニ帝釋
 天アリ高山ノ下ニ地藏堂アリ皆コレノ寺ニ屬シ本
 堂鐘守社關山堂以下具備ニ末寺ニ個アリ舊領主
 園部藩主ノ位牌ヲ安置ス

岩屋山明王院 無本山ニテ獨立寺タリ本尊不動
 明王 草創ハ文覺上人 寺家ナルモ、三十九戸
 アリテ城主内藤氏ノ祈願所ナリシカ内藤ノ没落
 ト共ニ衰頽ミタリ而ルニ數十星霜ノ後ニ小出氏
 ノ領地トナリ毎年正月二十一日藩使来リテ祀レ
 リ明治廢藩ノ後ハ其ノ管理者ナキヲ以テ明治六
 年コレヲ龍興寺ニ收ム
 水害ハ年々比々霖雨毎ニ下流逆溢シ人家浸漬ス
 其ノ難ニ慣レタル當所ノ人々ハ洪水ゾト聞クヤ
 其ノ度合ヲ計リ床上ニ一段高ク衣類器類ヲ積載
 シ人亦其所ニ上リ避難シ暫クシテ水退キ人亦降
 リ来リテ掃除シ一兩日ヲ経テ諸事復舊ニ依然業

ニ誌ク

今明治二十九年ノ滂難ハ其ノ比ニアラズ床ニ及
 ビ以テ家財ノ全キモノ至ツテ稀ニ樓ニ避ケ屋ニ
 逃ケ生命ヲ、危厄ナリト訴フル内ニ減水シ人々
 再生ノ感ニホケレヌ
 丁壯ハ期セズシラ會シ堤防上ニ立テ危險ノ個所
 ヲ々ニ盡カ捍禦シツ、アル所ニ前岸ナル富本村
 宇北廣瀬三所合計三百四十餘間ノ堤防決潰セシ
 ニ因リ辛フジテ沉没ノ患ヲ免ト得タリ同時ニ堤
 上ノ壯下一度ニ拍手相賀セシカハ富本ノ堤上其
 ノ不人情ヲ念ラザル者無カリシトゾ 店舗百七
 十二戸浸水 村役場ハ炊事場ヲ設ケテ施食シ退

京都府立総合資料館所蔵

水後窮民二十七戸八十數日施食セラル被害田畑
六十一町二段四畝二十二歩内皆無十七町橋害八
十町三丹運送會社ハ十二馬ヲ畜ハリ馬丁當地
ノ事情ニ熟セザルヲ以テ出水ノ急駿ニ狼狽ニ厩
戸ヲ開クヲ遺レ漸氣附キ之ヲ救ツ馬悲鳴ヲ揚ガ
大川ノ方ハ遊ギ遊ケリ

八木名物桑酒話

頃ハ延慶三年日蓮上人ノ孫弟子日像ガ山陰道教
化ノ爲ニ今ノ吉富村字八木ノ嶋ナル菌田俊家ノ
宅ニ錫ヲ留メ又升ハ途中風寒ノ惱ニ遇ヒ之ヲ治
療スル爲ナリシナリ此ノ時ヤ法華宗ノ勢力宇内
ヲ風靡センナル有様ナレバ他宗ノ怨訴ヲ蒙リ京

都ヲ貶忤セラレ、三回ニモ及ビスルトテ日
像ハ其ノ冤ヲ清メント心ハ矢竹ニ進メドモ身ハ
病惱ノ爲ニ退ケラレ進退谷マリテ床ニアリ不思
議ヤ一朝奇藥一袋ヲ授ジ卒然トシテ遊ルノ老翁
アリ主人ハ是レゾ天授ノ良藥ナラメト封押シ開
ケバ製方サヘモ明記シアリ此ニ於テ屋後ノ山ノ
井ナル堀切井戸ノ水モテ煎ジ之ヲ日像ニ進メタ
ルニ病勢退治元氣舊ニ倍スルノ奇效ヲ見タリ病
情ノ喜ト主人ノ喜ハ云フ迄モ無ク信徒ノ喜譬フ
ルニ柳ナシ日像ハ地名ノ儘ニ堀切酒ト名附ケ之
ヲ携ヘテ奥丹波ノ教化ニ錫ヲ進メタリ是レゾ此
ノ桑酒ノ起原ナレ

京都府立総合資料館所蔵

斯カル起原ハ今ヲ距ル百年前ニアリ而シテ其ノ
 巷間ニ賣リ初メタルノ起原ハ之ヲ知ルニ由ナレ
 家業トシタル時節モ亦之ヲ知ルニ由ナレ最初ヨ
 リ一種ノ高藥仙方トシテ施與シタルモノニテ次
 芽ニ世人ノ嗜好飲料トナリシナリ藥味ノ改良モ
 享保元文ノ頃ヨリ行ハレ本草學上ノ研究ヨリ風
 味モ更マレリ製法ハ一般法ニ從フテ燒酎ヲ造リ
 之ニ蒸シタル糯米ヲ投ジ藥品ヲ加ヘ密封シ五月ヲ
 經過セシム其ノ間ニ時々攪ヲ入レテ攪拌ス茲ニ
 テ醱ヲ得テ壓搾シ濃過シ沉澱シタル残渣ヲ去ツ
 テ貯藏スルニ年ノ後市場ノ物トナワテ人口ニ上
 ル材料トシテハ人參龍眼肉桂皮麝香等ニシテ其ノ

主タルモノハ桑根皮トス著者が明治元年其ノ家
 ニテ喫ヒタルモノハ釀厚ニシテ甘美ナルヲ今日
 十明治三ノ如キ淺薄ナルモノニハアラザリ主人曰
 ハク是レハ五年前ノモノト今ヤ之ヲ賣ル家一二
 ニ止マラズ昔時ノ如ク腹痛痧瘴中暑中寒等ニ用
 ビテ利クベクモアラズ

北産 一〇六五 水 六七、三八 亞爾個保留 一二、五〇 澱粉 一七、八〇
 糊精 二、三二

堀切の井の水あまく桑の酒つくも翁やふりしなるらん 徑一徑結真卿

丹波候野生見鉤來酒數箇賦以謝之 星 崇嚴

久矣兵厨吹冷塵誰教美味到吾唇流霞沉澹復何羨
 此是扶桑第一春

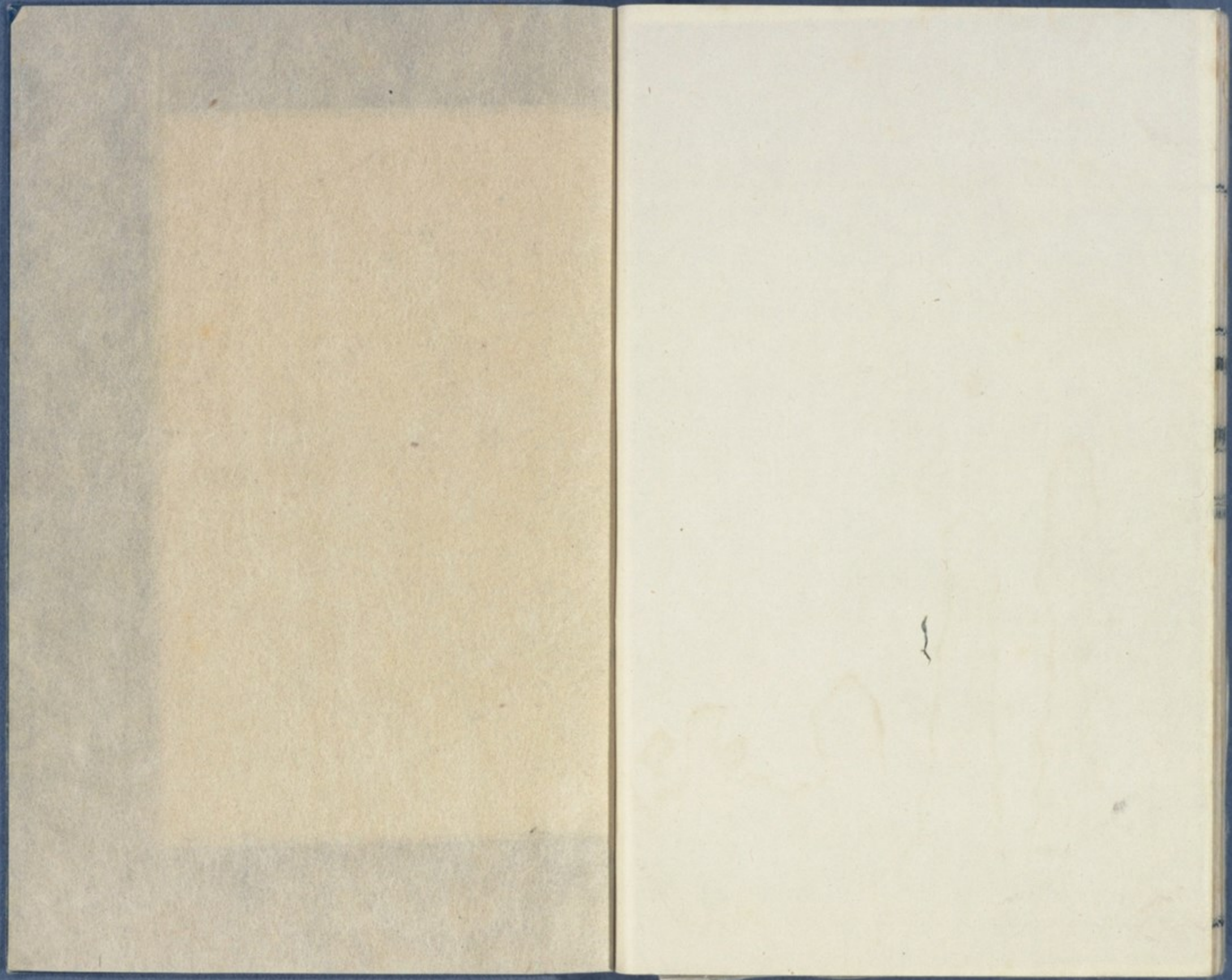
又

招友留賓易惹塵獨吞祇取足沾唇敢援云石中山例
一醉聊成半刻春

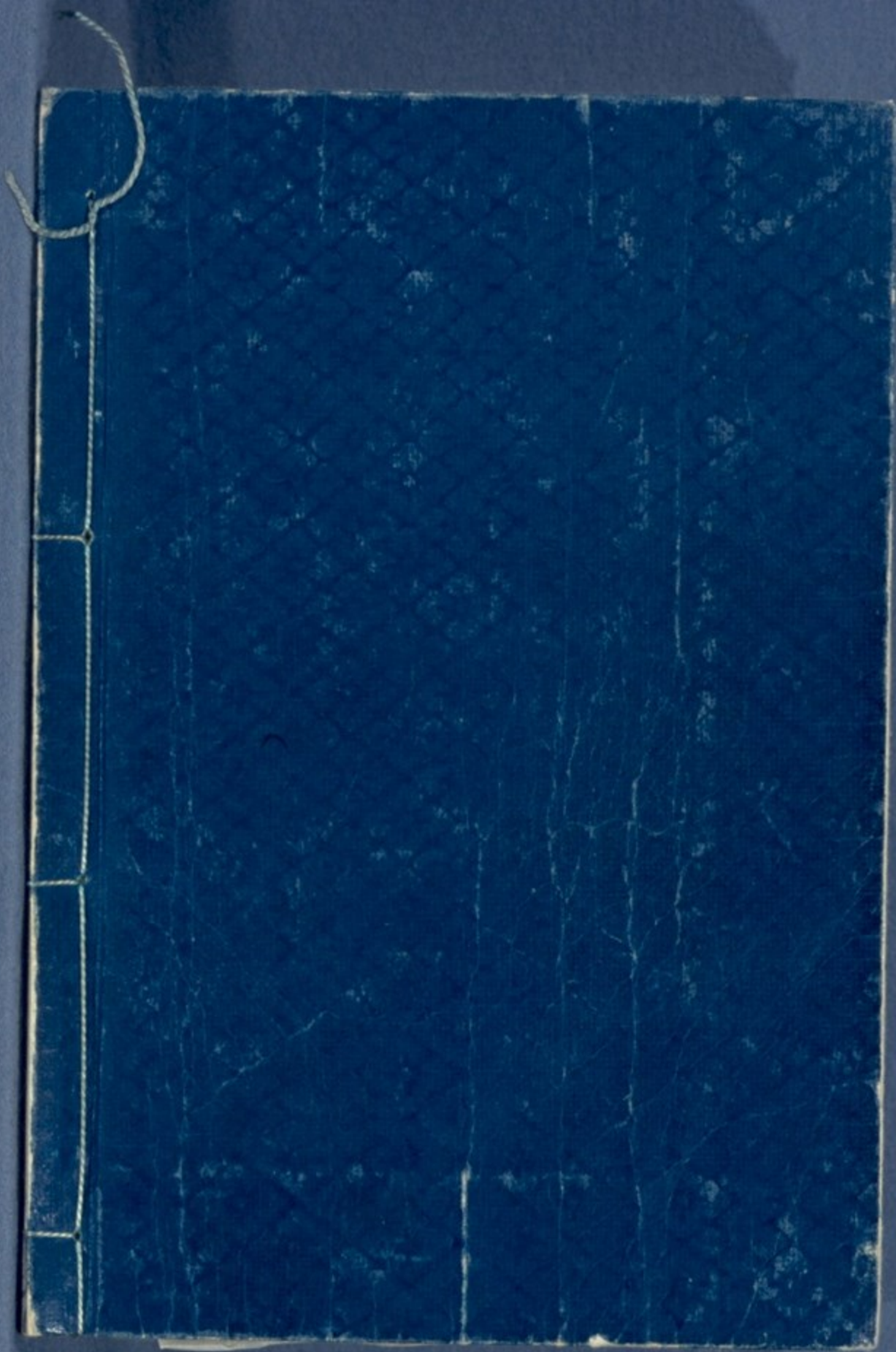
當地ノ故老ニ聞ク曰ハク今日ノ桑酒ハ燒酎ト味
淋トノ交ビモノト言フ様ナモノテ九キリ御話ニ
モ成リマセヌ御土産トシテ御持歸リニナリマス
ノモ御恥ケ敷キ有様デス何シノトハ無イ只藥酒
ト云フ文ノトデス私等ノ若イ時分ノ安政頃マデ
ノ物トハ雲泥ノ相違デス其頃ノモノハ旨イ濃イ
ノ薫リガブントスル所ハ八木ドコロカ一國ノ名
産トモテ恥カレカラスモノデシタ吞シテ仕舞フ
テモ盃ノ底ニ溜リマスノデ盃ヲ傾ケテ又舐リ吞

ラセヌト物體無イ様ナ氣ガシマシタ令ノハ此ノ
通り盃ノ底ニ粘リ附ラナトハ無イデス龜山デ
モ園部デモ佐伯デモ其外々ノ村ノ酒屋ガ真似シ
テ造リ中々好イノヲ出シマシタ左様デス急イ
デ早ク出シマス今日ノモノト同ジ様ナ水臭イ
モノデス昔ノ人ノ様ナ根氣ガ無イトニハ造レマ
セヌ或ル人が佐伯ノ酒屋ニテ猪口ニ二杯呼ビ
レマシテ例ノ通り龜山デ中食ラシヨウト存ジ煮
賣屋ハ這入りマシタガ腹ガ減ワラ斗マセヌノデ
峠マデ参ラテ飯ヲ喰ヒマシタ皆掛アタリマデ醉
カ残ツテ斗マシタ是デハ食事ノ代リトモナリマ
ス云々田舎カラ小徳利ヲ提ケテ一夕ニ夕位賣ヒ

二 来ルモノカ有ルト病人デモ出来タノカト問フ
 ト 左様デス是レ文吞マシマスト沿リマシヨウト
 答へマス八木ノ薬酒トモ言フタ等デス云々
 明治四十四年鐵道局ニ於テ名物九十餘點ノ臨時
 検査ヲ爲シ品評ヲ下セル内ニ八木桑酒ノ一項ヲ
 リ 曰ハク 風味良 體裁良 代價相當 試験合
 格



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵